

# チヨゴリザ登頂

桑原武夫

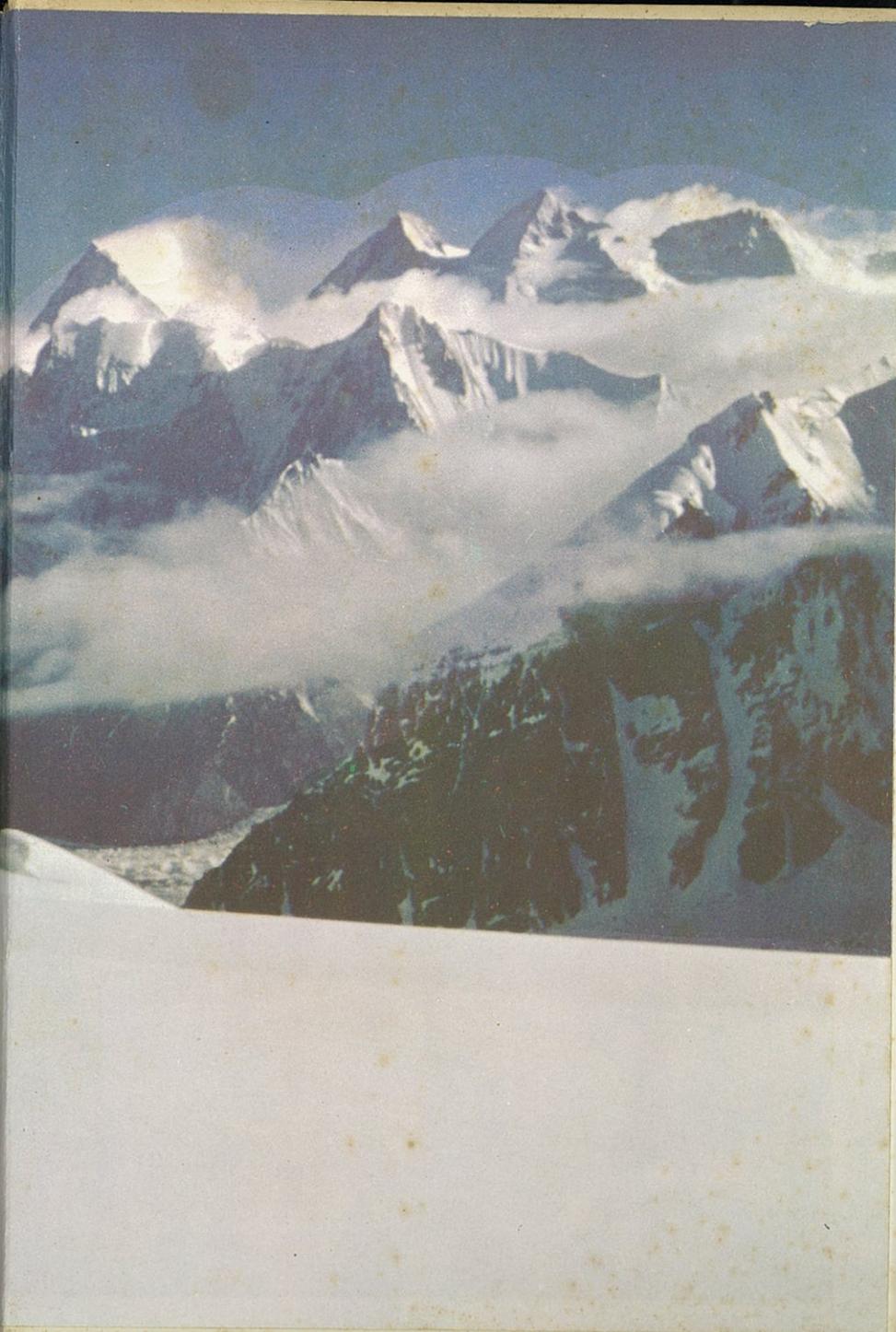
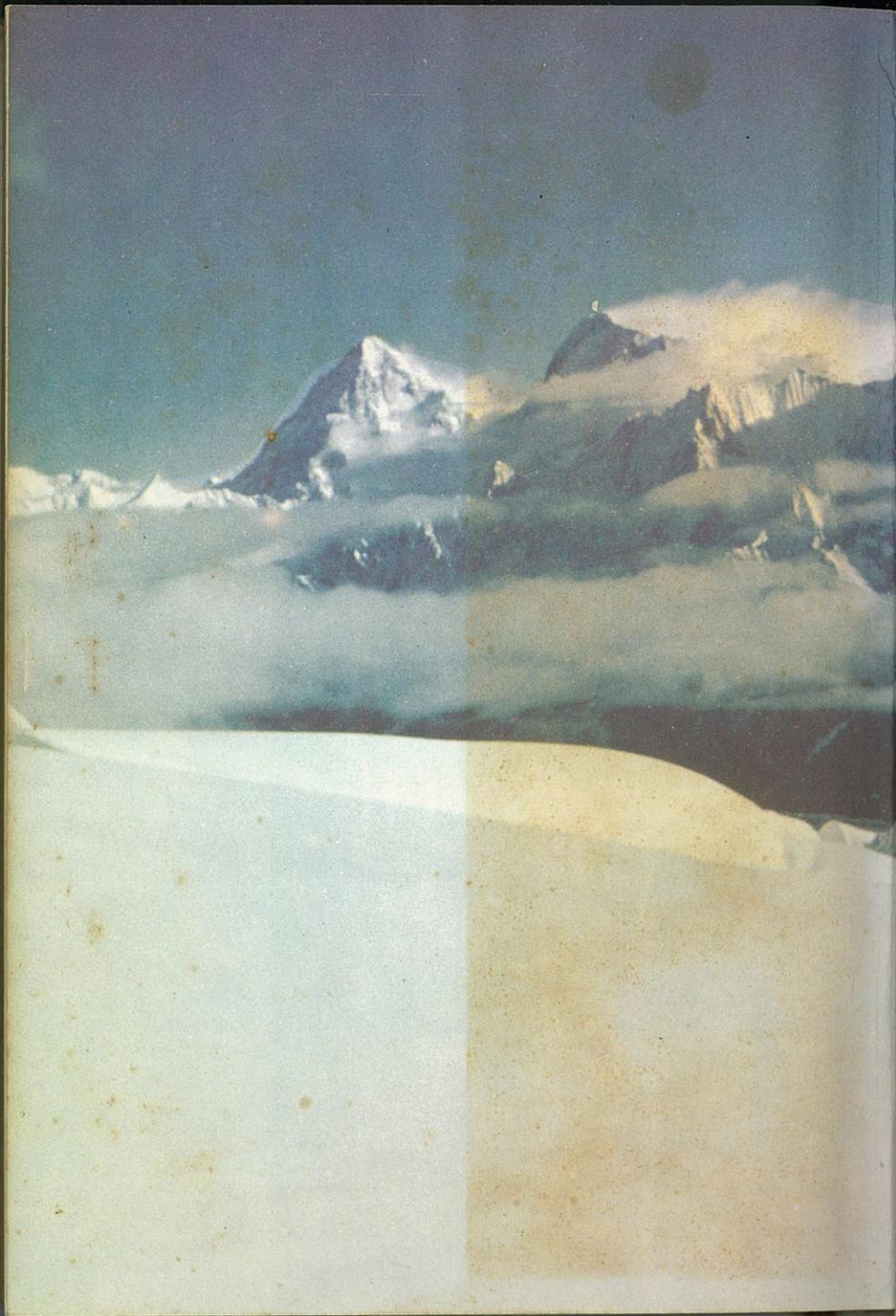
京都大学図書



1980402534

文学部

文藝春秋新社



(二十世紀)  
仙文  
K  
992

伊吹武彦撰

桑原武夫

文藝春秋新社刊

チヨゴリザ登頂 桑原武夫

京都大学  
98040253  
図書



ブラルド谷。兩岸の岩山が相迫り、増水期は川ぞいには行けない。炎熱の中を、高まわりの連続だった。褐色の世界に、対岸の村落だけが緑に美しい。

注文カード

帖合

No.

桑原武夫著  
チヨゴリザ登頂

文藝春秋新社

初版  
¥ 270.

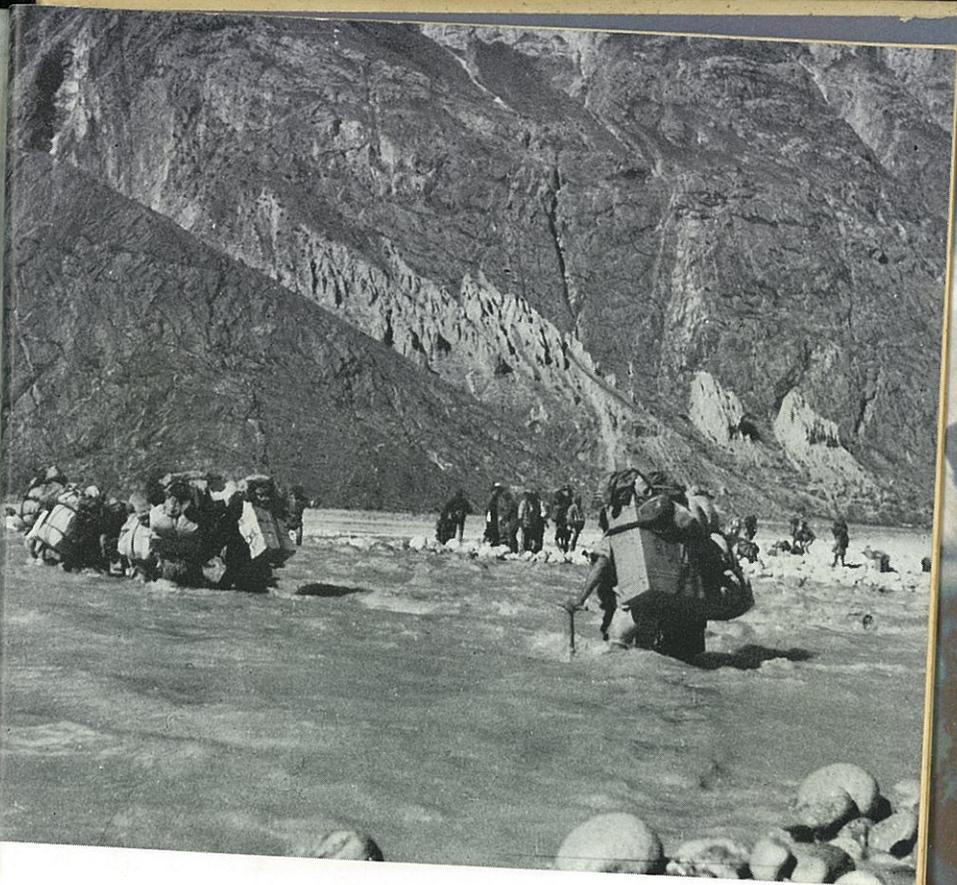
注文数

書店名





危険なヘツリ。ブラルド谷をゆくとき、直立した岩壁を越さねばならぬところがある。下は泥水の奔流、一足すべればおしまいだ。



デュモルドの渡渉。太股までの深さだが、氷河から出た水は冷たく、急で、あぶない。クーリーたちは四、五人ずつ腕を組み合って渡る。



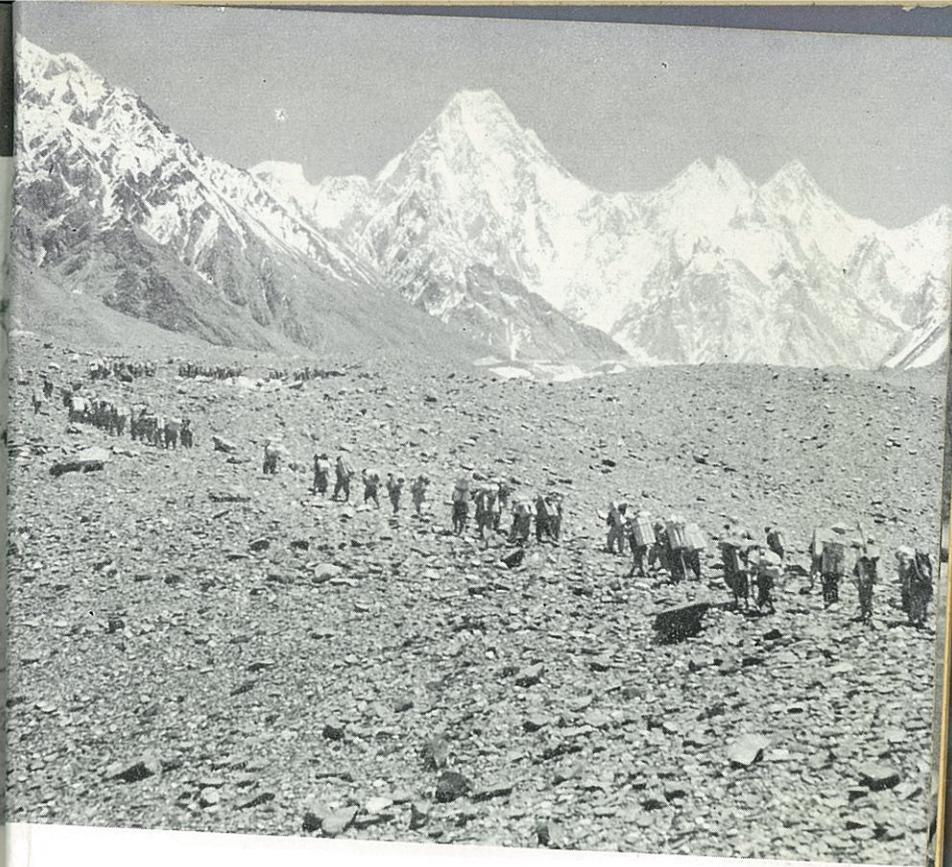
マッシャーブルム。ウルドカスを出て、最初に見える名山は、この7821メートルの処女峰だ。秀麗無比。こちら側からは、とうてい取っつけそうもない。



バルトロ氷河の末端。パイジュから見たところ。氷河はモレーンにおおわれ、どす黒く横たわる。その後の青空をつらぬくように尖峰がそびえ、雄大無比の風景だ。



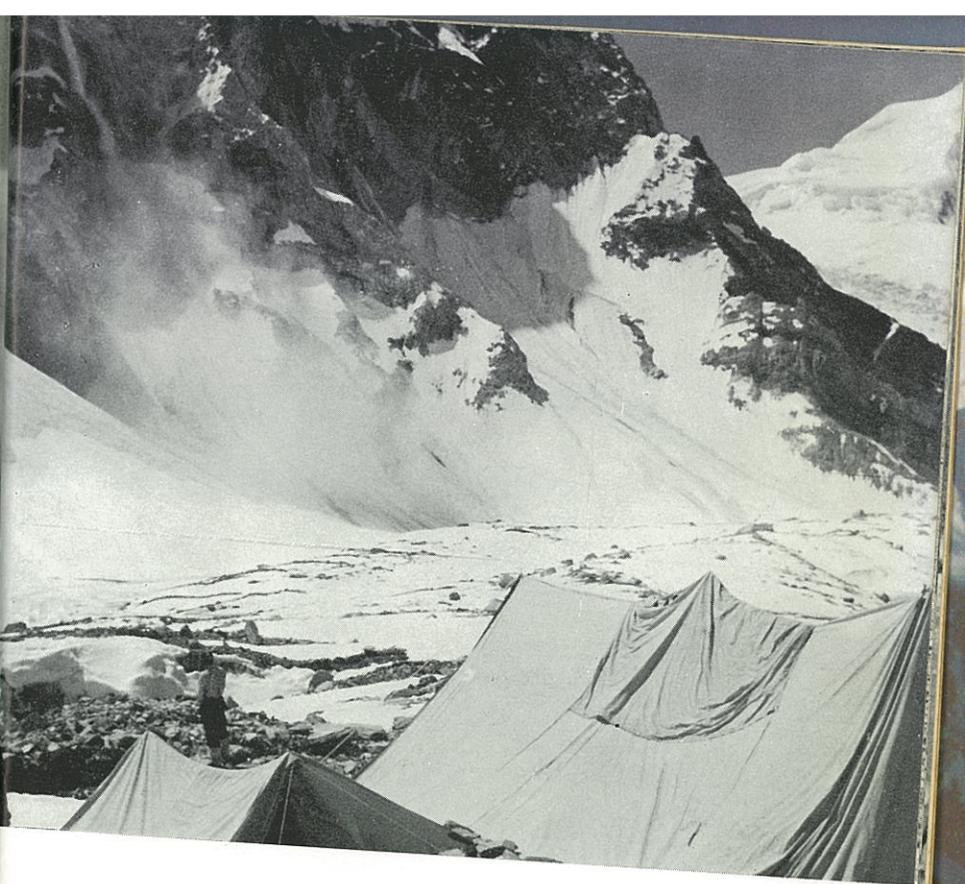
B.Cから見たチヨゴリザ。右が頂上，中央がアイス・ドーム，左端の黒いのがバルトロ・カンリの岩壁。それと中央の岩壁との間のアイス・フォールを登った。



氷河上の行進。氷河の表面はモレーンのガラガラ石でおおわれている。ぐらついて歩きにくいことこの上ない。陽は容赦なく照りつける。うしろはガッシャブルム第4峰。



ヘルマン・プール最後のテント。急な雪の斜面をよじて、  
アイス・ドームの角に達したとき、半ば雪にうずもれて  
桃色がかった灰色のテントがたっていた。



ベース・キャンプ。バルトロ・カンリの岩壁から出るモ  
レーンの上に、8個のテントをはった。岩壁からは昼夜  
をわかつず、なだれが落ちる。何ともいえず音である。



山頂にひるがえるAACKの旗。



頂上めざして。巨大な雪庇を出している右手の稜線がアイス・ドーム。それと主峰との間のコルをあとにして、主稜線の急斜面を登ってゆく藤平。このあたりの空気は平地の三分の一だ。



チョンゴの温泉。3000メートルにある露天の岩風呂。今は落ちついた気持で周囲の高山をながめやりつゝ、酷使したからだを温めてやる。左から平井、加藤、藤平、桑原、潮田。

はしがき

京都大学学士山岳会は、一九五八年の夏、カラコラムの処女峰、チョゴリザ（七六五四メートル）に遠征登山隊をおくり、八月四日、その登頂に成功した。

『チョゴリザ登頂』は、その遠征の幸運な隊長であった私の個人的報告である。公式報告は別に出るので、この本では、事実はあくまで客観的にしるしたが、それについての感想ないし解釈は、私の自由勝手に書いた。

自分の日記と記憶にたよって書いたが、加藤、藤平、山口、三君の手記やノートを大いに利用させてもらった。「登頂前後」の章は藤平君の手記そのままである。

写真はすべて隊員の作品、地図は末包慶一君につくってもらった。それらの諸君に心から感謝する。

学士山岳会編の公式報告は、写真アルバムを兼ねたものとして、『チョゴリザ』と題して、近く朝日新聞社から公刊される。潮田カメラマンの記録映画『花嫁の峰チョゴリザ』は、日映新社からやがて公開される。あわせ見られたい。

一九五九年一月

桑原武夫

目次

はしがき	1
出発まで	7
暑さともどかしさ	25
基地スカルド	41
世界のはてへ	77
乾燥地帯のキャラバン	95
セラックとクレバスの迷路	101
苦悩の進撃	119
B・C 孤立そして勝報	141
登頂前後	167
しばらく骨やすめ	203
楽しいき帰路	219

チヨゴリザ登頂

登頂前夜

カバー表  
カバー裏  
みかえし

アイス・フォール  
ガッシャーブルム4と著者  
C3から見たバルトロの山々。  
左からK2、ブロードピーク、ガッシャーブルムIV・III・II

活版の紙

チヨゴリザの巻

チヨゴリザの巻

出  
発  
ま  
で

出 発 前

一月三十一日の夜、今西錦司から電話がかかって来たのは、もうかなりおそかった。アフリカへたつ前に、ちょっと話したいから、これから行く、という。彼は二月二日、京都をたつて、ゴリラの生態研究の予備調査のために、アフリカ大陸を横断することになっている。出発の日には駅まで見送るつもりだったが、半年留守になるのだから、ゆっくり話し合っておきたい、とこちらも思っていたところだった。間もなく今西は伊谷純一郎をつれて現われた。壮途を祝してビールを出す。伊谷は例によって飲まず、きっちり控えている。

私たちの勤め先、人文科学研究所での共同研究『フランス革命』には、今西も加わり、「ロベスピエールとダントンのパisonナリテイ」を受け持っている。これを留守中どう進めるか、アフリカでの調査予定は、などとしゃべっているうちに、彼はいきさか雄弁めいてきた。そして突然、私に、この夏のAACKのチョコリザ遠征に、隊長としてぜひ出てくれ、と切り出した。

AACKというのは、京都大学の山岳部出身者で組織したクラブ、京都大学士山岳会 (Academic Alpine Club of Kyoto) の略称である。二十八年前に創立したのだが、その中心は、今西、西堀栄三郎、四手井綱彦、そして亡くなった高橋健治などであった。私は三高山岳部以来、この仲間に加わっていたのである。AACKは、大学を出てからも山に登ろう、というのが創立趣意だが、ヒマラヤ遠征が究極目標だった。そしてカンチェンジュンガのわきのカプルー(七三八メートル)、さらにカラコラムのK2登頂の計画を立てた。会員の一人伊藤憲は、インドのラホールまで下調査に出かけたのである。それらの計画は第二次大戦前の諸情勢にはばまれて、実現せずにおわったが、そのとき私は留守本部長を引き受けることになっていた。総裁のような仕事をお願いした小川琢治先生が、桑原が留守本部長をやるのなら引き受けてもいい、という条件を出されたからである。私は前に山で死にかけたとき、小川さんに頭ごなしにどなられたことがある。私の父が、友人である小川さんに頼んだのではないか、と思われるふしがあるが、そのことは別に書いた。以来私は先生にかわいがられることになった。先生がことさら私を留守本部長に、といわれたのには、私の亡父に対する何らかの感情が入っていたのかも知れない、とあとになって思った。

ヒマラヤは行けなくなったが、仲間はカラフト、冬の白頭山、興安嶺などに、つぎつぎと遠征した。そして戦後になって、西堀が、一九五一年はじめてネパールに入り、マナスル登山の道を開いたことは周知のところだが、その計画を毎日新聞に持ちこみ、取決めを京都でやったさい列席した

のは、AACKの会長木原均博士、今西錦司、そして私だった。一九五三年になって、創立二十五周年(一九五五年)にはカラコラムに進出しよう、と今西が主張したが、登山計画としては成熟せず、けつきよくカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊となって実現した。そのさい今西はカラコラム支隊長として、フンザからヒスパイ氷河をのぼり、ヒスパイ・パスを越え、ビアフォ氷河を下ってアスコレに出、さらにバルトロ氷河の中心コンコルディアまで行き、憧れのK2を見た。そのときは最初から調査が眼目だったので、登攀は試みず、そこから引き返したのだった。そして一九五六、五七の兩年には、京都大学・バンジャブ大学の共同計画として、パキスタン北部に学生を中心とする小遠征隊を送った。それら三回の遠征によって、この地区の状況、地元官憲のあり方、とくに食糧や人夫等の諸条件について、くわしい知識が蓄積された。

そしてAACKは、これらの経験をふまえて、創立以来の宿願、カラコラム登山計画を実現すべく、七六五四メートルの処女峰チョゴリザをその攻撃目標としたのである。この山をえらんだのは「花嫁の峯」(フライド・ピーク)という別名が示すように、純白のよそおいをした山容の秀麗さにもよるが、その純白さとは雪であり、日本人は岩よりも雪に強いという点が考慮されたのだった。一九〇九年、この山を七五〇〇メートル付近まで登ったイタリアのアブルッチ公の記録があること、一九五七年に主稜線から落ちて死んだオースタリーのヘルマン・プールの記録もやがて公刊されるだろう、ということも、選択理由の一つであった。外務省を通じてパキスタン政府にアプリケーション

ヨン（許可申請）を出したのは一九五七年の八月であった。しかし先方からは何の音沙汰もないままに半年たつてしまった。その許可が思いもかけず届いたのであった。

AACKの会長は、創立当初は那場寛博士、間もなく木原均博士がこれに代られたが、昨年三島に移られてからは、しばらく空白となっていた。いつまでも会長なしというわけにはいかず、選考の結果、私が三代目の会長に推された。私は深い考えもなく内諾をあたえた。そして一月下旬、日教組の教研集会を視察のため別府へ行っている間に、委員会は私を会長と決定した。そこへチヨゴリザ登山許可の公式文書がとどき、隊長を考えるさい、一九五五年の遠征隊は木原会長がみずから隊長となったのだから、今回も会長が出馬するのがよかろうということになり、私が第一候補とされたのだった。

私は固辞した。長らくトレーニングを怠ってきたからだに、この仕事はむりではなからうか。横さんは六十二でマナスルへ出かけたという。しかし私は、世界的業績をあげた登山家と一しよにはならない。しかし、今西寿雄を隊長とした一九五三年のアンナブルナは、第四峯への登頂寸前に退却をよぎなくされたので、今回のチヨゴリザの成否はAACKの名譽にも関する事業である。その意味で創立当時からの方が責任をとることが望ましいのであった。だが今西は出発直前、西堀は南極におり、四手井は関西原子炉設置問題の中心で、しばらくも日本をあげることはできない。委員会的一致した意見だ。それに副隊長には加藤泰安を出すから、遠征の現場の仕事は大丈夫だ、と

もかく引き受けてもらいたい、といわれると、組織に属する人間として、私は原理的には引き受けねばなるまい、と考えるようになった。それに私は、新しい条件の中へ飛び込むことは嫌いではない。学校を出てから職場をあちこちと変ったが、ひとつやってみないか、といわれると、いつも心が動くのだった。大てい即決で引き受けた。それにAACKの委員会といつても、事業の難易と私の実力は、おそらく私以上に客観的に知っている友人ばかりだ。そこで、あすの晩もう一度四手井を呼んで、三人で話し合つて決めよう、ということにした。

次の晩、四手井がやってきた。今西は準備が忙しくて出てこれない。そこで基本的な問題は、電話で彼の意見を聞きつつ、四手井と夜半まで話し合った。

そして私は遠征隊長という名譽ある任務を引き受けた。

装備、食糧、梱包などは、研究をつんでいるエキスパートがあり、またAACKはすでに何回も遠征隊を出しているので、何がどれほど必要で、何ほどの商社で、またその連絡はどこを通して、等々といったことは、およそ見当がついている。すると出発前の隊長の任務は、パキスタンと日本の官庁との折衝と募金、つまり渉外が主要任務となる。作文とおしゃべりに人生の多くの時間を費してきた私が、この仕事を何とかやれねば相すまぬ。そして何とかなるだろう。「優」まではいかずとも、「良」は取れるだろう。カラチへ着いてから山に入るまでの間の現地交渉は、私の英語は

ひどく貧弱だが、これも体当りで、「良」は確保したい。さてキャラバンに入ってからが問題だが、これは「優」、「良」などははじめからねらわず、「不可」にならないことを目標にしてやってみようと考えた。

二月二日、新調のレインコートにベレー帽をかぶり、双眼鏡を斜めにかけた今西は、さっそうと若返り、自信と愉快の表情が顔にさえている。研究室では時おりうっとうしい顔をしているのに、海外へ出かけるとなると、いつもこうだ。これこそほんとうの遠征家であろう。彼は私の手を握り、

——おおきに。しっかりとやってくれよ。

汽車が出ると、仲間の幹部級一〇人ばかりで、駅の二階の食堂のテーブルをかこみ、直ちにチョゴリが遠征の基本方針をきめた。この日から私は、目がまわるほど忙しくなった。講義は出発の週までやめなかったが、約束の原稿は対談で勘弁してもらい、ジャーナリズムの執筆は一切お断わりした。それでも忙しい。

すぐに加藤泰安に京都へきてもらった。私は彼を学生時代から知っている。白頭山以来いくつもの遠征に加わり、最近ではマナスル第一次登山隊にも参加した。気心もわかり、体験豊かで、この上もない副隊長だが、ただ一つ私に不安があった。一年ほど会っていないが、その最後のとき、私の部屋のふすまを開けて入ってきた彼の顔色がさえなかった。一昨年ガス風呂で中毒しかけ、しばらくわずらっていたのだから、当然かもしれないが、そのときの印象が消えていなかったのだ。会っ

てみると元気だ。ぜひ行きたい、からだは大丈夫、この正月は富士山に登って試験してきた、という。ここに副隊長がきまり、彼の意見も参酌し、数回の人事委員会を開いて激論を戦わしたが、結局みんなが納得して次の隊員がえらばれ、直ちにバキスタン政府に通告された。

- 隊長 桑原武夫 (54) 京大・教授
- 副隊長 加藤泰安 (47) 東京樹脂工業株式会社重役  
一九五三年第一次マナスル遠征隊員
- 隊員 藤平正夫 (33) 北陸銀行東京支店勤務  
一九五三年アンナブルナ遠征隊員
- 山口 克 (32) 大阪市大・理工学部助手
- 脇坂 誠 (32) 京大・農学部大学院  
一九五三年アンナブルナ遠征隊員
- 中島道郎 (27) 京大・結核研究所助手・医師
- 平井一正 (26) 金沢大・工学部講師
- 高村泰雄 (23) 京大・農学部大学院
- 岩坪五郎 (24) 京大・農学部学生  
一九五七年スワート探検隊員
- 芳賀孝郎 (23) 学習院大・政経学部学生

一〇人というのは多すぎるようだが、そして経費の点からもつらいのだが、カラコラムの高所用

ポーターはネパールのシェルパのように訓練されておらず、一般に弱いので、攻撃に入ってから荷あげには、隊員みずからが当らねばなるまい、と考えられたからである。

芳賀はAACR会員ではなかったが、松方三郎、加藤泰安の希望によって入れた。旧制時代には学習院を出て京大に入るものが少なくなかった。山岳部員についても、その例はこの二人にとどまらない。その伝統を新たにしたいというのである。

パキスタン政府から、私たちのリエゾン・オフィサー(連絡将校)としてワジー大尉が任命された、という通知があったころ、岩坪らから、去年のスイート遠征隊に加わった日本大使館員の今川好則君を隊員に入れてどうか、という意見が出された。カラコラム遠征の成否は、人夫問題の解決いかんにかかるといわれる。バルトロ氷河でのクエリーの扱いくさは、世界的に有名だ。そのさい今川のようにウルド語をたくみにあやつる人物を加えることは、きわめて有効に違いない。からだも強く、本人は参加を切望しているというので、通訳として隊員に加えることに決定する。

ワジー大尉には、ラワルピンディからスカルドまでの飛行機便乗の予備交渉、スカルドでの人夫徴発の準備、同地での軍食糧買入れの可能性、ことしはバルトロにアメリカ、イタリアなどの隊がわれわれに先行して入るが、なおアスコールで食糧買入れの可能性があるかどうか、さらにブラルド峡谷の吊り橋とイカダの状況など、予備調査を依頼する手紙を出しておいたが、さらに今川に手紙を出し、直接ラワルピンディまで行ってワジー大尉と連絡し、これらのことを一そう明確にするように依頼した。

ように依頼した。

登山にせよ、学術調査にせよ、海外遠征の成否の半ばは、自国を出発する際に決定している、といわれる。あらゆる意味での準備が十分でなければならず、それには知識と経験が、そして何より金が必要なのだ。装備も食糧も十二分にある方がいいに決まっていると思う人もあろうが、遠征の場合はそうはいかない。ととのえるのに金がかかるというより、問題はむしろ輸送だ。スカルドまでは飛行機で輸送せねばならず、それからさきは一三〇キロ以内の荷物にして、悪路を人の背で運ぶ以外に方法はない。これらはすべて外貨で支払わねばならず、かりに外貨があり余ったとしても、人夫の数がふえればそれだけ行進の速度が落ち、事故率もふえ、季節を逃してしまうことにもなりかねない。フランスのヒドン・ピーク隊(一九三六年)は二二トン、人夫六五〇人、イタリアのK2隊(一九五四年)は一六トン、日本のマナスル隊は一〇トンあまりの荷物だが、私たちの隊はアメリカのK2隊(一九五三年)と同量の二・五トンにおさえる方針を立てた。しかしやっていると三・三トンになってしまった。頭痛の種である。

出 発 ま で 日本は保有外貨は余裕がないので、遠征のための海外渡航の許可を取るのには容易でない。遠征の意義、その日程、こまかな予算書を大蔵省、外務省に提出して、口頭説明するのだが、なかなかラスラとはまわりかねる。もちろん東京在住の副隊長以下が精を出してくれるのだが、行きづまる

と、「あす来てくれなければ、もうダメです」などと電話がかかる。何べん東京へ飛んで行ったとか。加藤の家においた東京の事務所とは、毎日定時連絡をするが、そのほかにも臨時にかけることがあり、電話料は出発までに一〇万を越しただろう。

渡航審議会はあぶないところで通してもらい、七五〇〇ドルの外貨のワクがもらえたが、それに見合う、いな、内地で使う分も合せて、九〇〇万の金はどうしても作らねばならない。装備、食糧の発注は、資金が集まってからではもうおそい。どんどん発注する。募金担当者は、是が非でも目標は達成しなければならぬところへ追い込まれる。

ヒマラヤの処女峰の登頂、その行為には根本的にロマンティズムが宿っている。しかし、それを実現する過程は、リアリズム以外の何ものでもない。何より金が大事なのだ。私たちは朝日新聞の後援をうけ、日映新社の協力をえて、潮田三代治をカメラマンとして迎えることになったが、予算はそれだけでどうもいまかなえない。そこで募金。前京大総長の鳥養利三郎先生に後援会長になつていただき、年輩の仲間はみんな親身になって努力してくれた。忙しい中からこうした仕事を進んで引き受けてくれた友人たちに、私は心から感謝したい。こうした同情者なくして遠征は絶対に成立しえないのだ。

隊長だけ怠けているわけには、もちろんいかない。そして隊長自身が説明に行つたほうが効果的であることは、いうまでもなからう。一流会社の幹部に会うのは、容易なことではない。車をもつ

ていても、一日に五社もまわれれば成功だ。東京で一日に七社を歴訪した日など、まさにフラフラになつてしまった。だから「京大が探検と登山では日本一」ということは、よく承知しております。御協力しましょう。二〇万円で御しんぼう願えますか。たびたび御足労ねがうのもお気の毒ですから」といつて即金で渡してくださる理解者があつたりすると、子供っぽく感動してしまうのである。

そのほかいろいろの雑業があつて、考えてみれば遠征計画は一つの企業であり、私はその中小企業の社長のような位置にあつた。従つてそこには職業上の秘密ともいふべきものを生じてくる。私は日本でもバキスタンでも、さまざまの人に会い、さまざまのことをした。そしていろいろな感想と感情をもつた。しかし、そのすべてを私は書くことはしない。外国の遠征記も読んだが、明らかに空白を感じさせるところがある。なかつたことは決して書いてないが、あつたことがすべて書いてあるわけではない。将来の遠征に不利をもたらす恐れのあることは、ふれないのだ。すべてをあからさまに書かぬのは学問的な態度でない、事実をおおうものである、などというのは、個人でありうる批評家の立場であつて、生きた組織の中の実践者は、そうした言葉に同調しないだろう。

目的意識のはっきりした実践者たちと実践準備をすすめることは愉快だった。しかし過労で脚がだるい日など、不安がきざすのだった。今度の山旅は炎天の下、氷雪の上、二十日はつづく。信頼する医師は精密検査をすませて、大丈夫です、心臓もなかなかいい恰好をしている、などといつて

くれたが、近ごろ鍛えてない私からだは、いっどんなへばり方をするかわからない。そこで私は人家のある最後の村アスコレ、緑のある最後のキャンプ地ウルドカス、そして氷河上のベース・キャンプ、この三点において万一からだに異状が見えたら、直ちに二、三人の人力を従えて撤退作戦をしよう、とまでひそかに考えていた。私がほんとうに寝込んでしまったりしようものなら、ドクターは私につききりになるだろうし、隊員の一、二もしばられ、攻撃体制は崩壊せざるをえまい。そういうところへだけは、絶対にもって行ってはならない。

ゆらい私はあらゆることを先走って考える、つまり空想好き、あるいはそうせずにはいられない精神的あわて者である。そしてみずからその性質をいやとも思っていないのだ。準備に東奔西走しているころ、寢床でふと遺言状を空想した。子供あてにした方が書きやすそうだった。

「お父さんは大へん遠い国へきた。そしてどうやら、もうひとつ遠い、帰るのがむづかしいところへ、行かなければならなくなったようだ。もうお前たちが見られなくなるのはかなりつらいが、遠い国へきたために、こういうことになったことは、ちっとも後悔していない。年がいったら、精神的にも肉体的にも、危いことはしない方がよい、などというのは、ばかげた考えだ……」

この「かなりつらい」の「かなり」は取った方がよい、などと文筆家らしいことを考えたが、その辺でバカらしくなってやめた。あそびの気持はあったが悲壮感など少しもない。私はいつもこうなのだ。臆病なのだろうか、あらゆる事の吉凶の結果は、事前に一おう頭の中を通過する。だから

凶が出て割合にがっかりしない、というのも、幸運な星の下に生まれて、ひどくがっかりするよ  
うな目に会っていないからかも知れない。だが自分の星を信ぜずして何の仕事ができればよい。

「チヨゴリザノ ニユース キイタ キカノ ゴシユツバ トテモウレシイ ニシボリ ヨシイ  
キタムラ」

「宗谷」からの電報は私を元気づけてくれた。私は西堀と一ばん話したかった。私がからだのこと  
で一、二弱気なことをいうと、

——うん、それでええ、君が出るといことが一ばん大事で、一ばんええのや。へバるときはへ  
バつたらええ。君なら、へバつたということが、ちゃんと意味をもってくるからな。ただ年のいっ  
たものは、一ぺんへバると、もう一度も直すのがむづかしい。仕事はみんな若いものにやらせて、  
ラクにする工夫が肝心や。それは利己主義とは違うぜ。

そして馬のあるかぎり、必ず馬に乗ること、それも初めて乗るのだったら、何かスポンジのよう  
なものをハート型に切って、サルマタにぬいつけたのを用意して行くとよい、Mのところを引っか  
からぬように、ちゃんと切っておかなければだめだ、などと教えてくれた。そして帰国早々の多忙  
の中から広い顔をきかせて準備をたすけてくれた。

バルトロは比較的モンスーンの影響が少ないといわれる。それにしても七月中には登頂を終えた

い。私たちは、できるだけ早く出発したかった。しかし、カメラマンを加えて一人、全部飛行機というぜいたくはとてできない。若手七人と荷物は貨物船にするのだが、貨物船の内航は月末か月の初め、三月末の分は、外貨と装備の関係でとうてい間にあわない。四月末をねらったが、もともと貨物船は客をたくさんは乗せない。それにすでに予約者もあり、割り込んで乗せてもらうのは大へんだった。せっかくなまじった船にブタをたくさん積み込むことになり、ブタ係りを乗せねばならぬ、というので断わられたりする。三井船舶、山下汽船、飯野海運の好意によって、やっと三隻に便乗できることになり、五月早々に七人を出発させた。

船とは電報でたえず連絡をとる。最初の二船が積荷の関係でどんどん日程をちぢめ、カラチへ予定より十日も早く着きそうな電報が入る。そこで後発隊の中の藤平をにわか五月二十七日の飛行機に乗せた。先着して、大使館の援助を求め、免税通関の便宜をはかってもらい、隊員の宿舎の用意などに当るわけだ。二日前に突然出発を命ぜられた藤平にはかわいそうだったが、仕方がない。そして三十一日には第一、第二船の到着と、荷物の通関が無事にすんだと入電があった。

心配なのは第三船で、日程がどんどん遅れる。このままだと、カラチ着が六月二十日を過ぎるだろう。あらかじめボンベイから飛行機への乗換えを考えておいたが、それでもおそすぎる。そのうえ六月十五日にはインド全土に港湾ストの指令が出た、というニュースが入った。もうぐずぐずしてはいられない。コロomboのビザは取ってないのだが、無理してそこから乗り換えさす以外に手は

ない。その指令をした直後、コロomboは政情不安で戒厳令がしかれ、外国汽船の強制徴用を始めた。危険なのでコロombo入港は取りやめらしい、といってくる。それではと、インド南端のコーチンを考え、そちらへ航空賃を電送したりした。しかしさいわいにして船は無事コロomboへ入り、日本大使館の特別の尽力で、戒厳令下すぐ飛行機への乗換えができ、六月五日カラチに安着した。その電報が入ったのは、私の京都出発の日であった。事務長の近藤良夫とともに、船との連絡に、ほとんど徹夜の日もあった。

私は六月七日の夜、加藤、潮田とともに羽田をたった。

シートに着いて窓から見ると、二日おくれて西ネパールへたつ川喜田二郎がバルコニーの上で、「欲送京大チヨゴリザ遠征隊長桑原武夫教授」というバカでかい紙のノボリ、待合室で私をはずかしがらせたのを、やけに振りまわしているのが、夜目にもはっきり見える。加藤に、いかにも二郎らしいな、といったとき、エンジンが爆音を立てた。

暑さともどかしさ

カルカッタで発動機の小故障のため、三時間、空港で待たされた。その暑さ。ここは最近一二五度を越し、一日に死者が二五人も出たという。早くエア・コンディションの飛行機の中に逃げこみたい。やっと乗り込んで一眠りと思うと、コーヒー、お菓子、等々、やたらにサービスがあつて、眠らせてくれない。午後八時三十分、カラチ空港着。

六月八日・カラチ

大使館の前田、古川両氏が空港の中まで入って出迎えてくださった。おかげで通関はごく簡単にすむ。高村、平井、芳賀が構外に待ちかまえていた。みんな元気そうだ。高村など、春先きのイワナのようにはりきっている。コロンボでさんざん苦労したはずの平井、芳賀も、ちっとも疲労のあとがない。加藤がいった。

——やつらひどく元気そうだな、まるまる肥えて。使いごたえがありますよ、あれが瘦せきる

までには。

成田大使が今夜カイロへ出発されるといので、直ちに大使館邸に車を馳せる。飛行機が延発となったので、御挨拶のあと少し雑談のひまがあった。大使館全体に、大へん好意的な空気がみなぎっているように感じられたことは、何よりうれしかった。遠征といったことは、在外公館の援助なしに一歩も進むことではない。私たちはやや好意に甘えずぎているのではないか、とあとで反省されるが、目的地に着いた第一印象の明るさは、私たちに元気を与えた。

大使館の方で、「冷房のないところは悪いと思ひましてね」といって予約しておいでくださった、メトロポール・ホテルに入る。涼しい部屋。そして私たちはビールが飲みたくなった。芳賀に電話をかけさせる。しきりにやっているが、一向に通じないらしい。カンシヤクをたてて彼は、中学一年の教室のように、「ビー・アール・アイ・エン・ジー・Bring, ビー・イー・イー・アール・Beer」などとやっている。やっと届いたビールは、飲めたものではなかった。

こちらはすべてうまくいっていた。六月二日、高村、岩坪の船が着いたときは、港外碇泊で、荒波をおかしての積荷おろしは悲壮なものだったらしい。藤平、今川が大活躍した。予定のとおり、藤平を先発隊長に、山口、脇坂、中島、岩坪、今川の六人は、五日当地をたち、すでにラワルペンディに着いている。

そこからスカルドまでの飛行機はパキスタン航空(PIA)の営業だが、実質は軍の支配下にあり、乗りたいときに乗れるというわけのものではない。一回の旅客定員が少なく、それに危険な飛行なので、天候次第でいつ取消しになるかわからない。げんに五月末に着いたガッシュャブルムIVへのイタリア隊は、二週間も待たされたと聞いている。ところが日本隊は大へんスムーズに飛べそうだ。これは今川がすでに二回ラワルペンディまで行き、同地に住む今回の連絡将校ワジー大尉はじめ現地当局と交渉を重ねてくれたためであろう。先発隊の電報によると、彼らは十日に飛び、後発隊のための飛行機は十三日ときまった。そこで加藤、平井、芳賀、潮田の四人は十日の夕刻、汽車で出発、私と高村は十一日の飛行機で、ラホール経由ラワルペンディに向うことにした。

六月九日・カラチ

入国手続のために警察へ出頭しなければならぬ。私の公用パスポートは滞在五ヶ月となっているが、他の隊員は三ヶ月となっている。もし攻撃が長引けば危いので、六ヶ月に延長してもらおう。外務省東亜局長、文部省体育次官などにあいさつにまわり、天気予報の放送をもらおう件、地図下げ渡しの件、その他を折衝する。文部省では考古学部長のキュリエル氏に会って、来年京大からパキスタン仏教遺跡調査隊を送る計画について話す。彼はフランス人なのだが、パキスタンの役人となっている。感じよく、しかも事務能力のありそうな学者である。当地ではすべて物事の進行がおそいから、早く計画を立てて許可申請をしなければダメだという。

長らくイギリスの支配下にあったのだから、当然のことながら当地の役人はみな英語がうまい。私の英語ではかゆいところに手が届きかね、もつばら前田一等書記官の御厄介になったが、東亜局長をはじめフランス語の通じる人も若干あって助かった。そして必ず、フランス文学の先生がヒマラヤ登山をするのか、とげげんな顔をされた。フランス文学はどうやら柔弱なものど決めこまれてゐるらしい。私は、ヒマラヤの八〇〇〇メートル級を最初に征服して、以後の巨峰征服への道をひらいたエルツォークは、フランス人ですよ、といつてみたが、彼は学者ではなかった。

夜、大使館邸で猪名川一等書記官を中心に、私たちのための招宴が開かれた。帰って夜中まで打合わせ。

先発隊から、一二〇〇〇ルピーを一ルピー札で持つて来てくれ、という電報が入った。バルチスタンはさいわい今では紙幣が通用し、昔のように、またネパールのように、多くの人夫を使用して重い硬貨をかついで行かなくてもいいのだが、一〇〇〇ルピー、一〇ルピーなどの札だと、奥地ではつり銭がとれないのだ。これだけの一ルピー札は、そう簡単に手に入るものではない。東京銀行の支店にお願いして、ととのえてもらうことにする。

毎日、自動車で飛びまわっているので、町の様子は何もわからない。もとは小さな町だったのが、

六月十日・カラチ

独立後首府となった、だだっ広い新興都市。反共を国是とする国だが、ソ連、中国の大使館が一番大きく、ソ連は映画などで猛烈な宣伝をしている。といつても全くイデオロギー抜きで、美しい風景、豊かな資源、進んだ科学の力を誇示するようなものばかりだ。用務をすませてはホテルに逃げ帰り、からだを冷やす。一日早くここを逃げ出せる加藤隊をうらやむ。

四人は夕刻「チェナブ急行」で出発。荷物は前回の積残しだけだが、軽金属製のハシゴ（水河上のクレバス渡りに使う）が大きすぎるとか、個数が多すぎるとか、駅で文句が出たが、談判は車中として、ともかく車室にのせてもらう。別扱いの貨物にすると、いつ着くかわからないのだ。一等車といつても冷房があるわけがなく、真中にどっさり荷物をつみ重ね、まるで貨物車に便乗したようだ。駅へくる途中、芳賀がパスポートを置き忘れてきたことに気がついた。あわててタクシーをとばす。それは行き違いに大使館員が届けてくださったが、本人がなかなか戻らない。発車時間は刻々迫るともかく三人を車に乗せ、改札口に大使館員、それと列車との間に私が立ち、連絡をとった。さいわい列車は定刻になつても出ない。五分すぎ、芳賀がかけ込んできた。私は「早く走れッ」とどなつた。一〇〇メートル一五、六秒というスピードで走つた芳賀が飛び乗ると、汽車が動いた。

六月十一日・ラホール

一二〇〇〇枚の一ルピー札は、加藤らの出発までには間に合わず、結局私たちがカバンに詰めこ

んで持つて行くことになった。私と高村はきょう夕刻ラホールに飛び、あすの夕方、空路ラワルピ  
ンディに着き、後発全員が集結して、十三日スカルドに飛行するのだ。

出発直前、天気通報の件で氣象長官から呼び出しがあり、あわただしい折衝をした。話はきわめ  
て好意的で、帰りに氷河上の科学的観察を報告してほしいとのことであった。それをすませ直ちに  
飛行場へ。忙しい日程だが、毎日一〇八度、それで昨今は涼しい、などとあいさつをする、この炎  
熱の町をあとにすることは、むしろ救いだ。

これで私たちは京都で立てた日程表をおよそ十日短縮したことになる。この十日はあとで物をい  
うだろう。すべり出し好調といってよい。

六月十二日・ラホール

昨夜、飛行場からこのファレットイ・ホテルまでのバス窓から見て、私はラホールに好感をも  
った。夜目にはよくわからぬが、巨樹が多く、鈴をならして走り去るタンガ(二輪馬車)には、多彩  
なサリをまとった貴婦人が斜めに腰かけている。路傍の夜店の灯火にも、どこか旧都めいた情趣  
が感じられるのだ。しかし一たび目覚めると、その暑さはまさに当国第一。カラチを離れるの  
が解放などと思ったのは、私の早合点だった。午前八時、九四度。

その人に会うのが目的のベック教授には、二日前に電報連絡してあるのに何の音沙汰もない。彼

はカラコラム山岳会の長老で、一九五五年以来AACKは毎年お世話になっている。去年はスワー  
トへのバンジャブ大学との共同遠征にも参加してもらい、私は会長としてあいさつをする義務があ  
るのだ。いささか手みやげも持ってきている。高村がやつと勤め先の学校の番号を調べ出し、電話  
をかけた。うまく出てきたが、早口にまくし立てられ、ともかく午後二時に先方からホテルへ来る、  
ということだけがつかみとれた。

午前を空費するのとも思つて、帳場で案内パンフレットを見ると、四大名所とある。タクシーで  
何時間かかるか。少なくとも二時間半。それを二時間以内で強行することにして飛び出す。世界最  
大と称する回教寺院(モスク)に入るには、靴をぬがなければならぬ。その奥の院に当るところには、  
大理石の敷石の上にレンペンのような者が五、六人ねころんでいた。広い中庭を横ぎると、目がく  
らむほどの照り返しだ。その前にあるシーク族との戦鬪に名高い古城、巨大な庭園、ムガール皇帝  
の御陵、四つともやたらに巨大で、乾き切っている。中国の記念建造物も巨大で乾燥的だが、これ  
に比べるとまだ何ほどか趣きとうるおいがある。そこに移入すべき歴史的感情が皆無のせいもある  
う。あとでパキスタンの人に話すと、あれを一時半で、と必ず不満の表情を見せる。本願寺、桂  
離宮、二条城、桃山御陵を一時半で片づける外人がいたっていいじゃないか、少なくとも京都は  
戸外一〇度ではない。ただここでは汗は出るが、流れはしない。アルコールを皮膚にぬつたよう  
にスーッとかわき、そこに若干の快感がある、とても思わぬと、しんぼうがでない。

昼すぎ、カラコラム山岳会の事務長ハイヤン・アーメッド・ハーン氏というのがホテルに現われ、昼飯に招かれる。彼は貿易商、日本品を扱っているらしい。料理店は毎回私たちの仲間が招かれる一流の店だが、この事務長は二時をまわっても平然としている。こちらが気にやみだしたところへベッグさんが瘦軀を現わした。三七までハンティング、それから登山に転じたので、五七歳の今でもロック・クライミングは壯者をしのぐ、と事務長が自慢する。教授はなつかしげに、しかしせつかに、旧知の人々の近況をきく。「あの天使のようなプロフェッサー」といったのは、松下さんのことであつた。遠征中、若い者より早くキャンブを出て、一番あとにキャンブに着き、その間一つの石も見逃さず調べて歩いた松下教授の学問熱心は、よほどの印象を当地の人々に与えているらしい。ベッグさんは、去年スワートに同行した学生諸君の名を一々あげて、なつかしがつた。

六時四五分にラウルペンディへ飛ぶ私たちのために、山岳会から上等のジープがさしまわされた。ベッグさんも同乗される。途中、突然猛烈な砂あらしがまき起り、一時視界が暗くなった、と思うと、数分、まさに車軸を流す大風雨。このあたりは何もかも大がかりだ。バルトロでもこんな猛烈な激変がないとはいえない。乾ききつた飛行場の上に雨水が六、七センチもたまる。電灯の消えてしまった待合室で二時間空費したが、この幹部はベッグ教授の教え子なので、紅茶が出たりして優遇された。隣りに坐っていた青年が話しかける。アメリカ人だ。日本に二年間、八戸にいて伝道したが、ラオスを経て今度はラウルペンディの北にいる仲間を頼り、そこで働きたいという。効果

のほどは知らないが、单身CIの雑糞一つ、ワイシャツにこうもり傘一本、気軽ないでたちに感心し、相互に前途を祝福し合つた。

飛行中止。大風一過して、ホテルの中庭の芝生の快さ。ヒンヤリと冷えた石のベンチをしばし楽しむ。

六月十三日・ラウルペンディ

うそのように晴朗、平静に返つた空をラウルペンディに飛ぶ。

グランド・ホテルに着く。けさたつたはずの加藤が軒下のアーム・チェアにグッタリと坐り、声をかけても腰を上げようもしない。ひどく青ざめた顔色だ。けさ五時に飛ぶ約束のところ、天候悪化して中止になつたのだ。「チェナブ急行」の三十四時間はひどかつたらしい。炎熱の中を突つ走るのだから、窓を開けたくなるが、それが一ばん悪い。しめきつて、そのうえ毛布でもかぶつているのが結局一ばん涼しいのだ。彼らはそういう方法を知らなかった。そして加藤は着くなり猛烈な下痢を始めた。私と高村は大へんなせいたくをしたことになる。加藤ももう若くはない。飛行機に乗せるべきだつた。今度の登山は、遠征について最大の経験をもつ彼の力にまつところが多い。それがこのありさまではどうなるか。しかし私はガツカリなどしてはられない。ここでの仕事は私が全部引き受け、彼を一日も早く全快させなければならぬ。

行き違いになった岩坪が帰ってくるなり、あすは早朝の出発だから、今日中にぜひこれだけ、というリストをさし出す。着くなりすぐはしんどいが、よし、やろう、タクシーを一台用意しろ。目のまわるように忙しい一日が始まる。

ここは当国第一の軍都で、私たちの行くバルチスタン地区は、このカシミール事務所の支配下にある。輸送、食糧の買入れ、地図入手、等々、だいたい折衝は先発隊が手ぎわよくやってくれているが、隊長としてのあいさつは欠かされぬ。まわった役所名を一々あげるにもあたるまい。一般的に当地の空気は私たちにこの上なく友好的であった。東京でのアジア競技大会で、パキスタンが優秀な成績をあげたこと、とくにホッケーで宿敵インドをやぶった喜びが、好ましい影響を生じている。その選手たちは当地の軍人が多く、先発隊はその連中と交歓したらしい。その一人が日本娘と結婚してつれて帰っているので、私にそのひとに会ってやつてくれという話も出たが、これは遠慮した。

私たちにとって一そう直接的なことは、大戦中チャンドラ・ボースの率いたインド独立義勇軍に加わっていた人々が、当地からバルチスタン地区の重要なポストについていることである。先発の一人がボースの名を聞いて、四手井綱彦の名を出し、彼が今回の遠征の組織者の一人だということ、相手の高級士官は直ちに電話機をつかんだ。

——今度の日本遠征隊は四手井閣下の弟の仲間だぞ。

台北で飛行機事故のためにボースとともに死んだこの名将の人格は、いまだに忘れられていない。これから行くスカルドの長官も義勇軍の一人である。旧インドの一部では、今でもボースがネールよりも人気がある。彼が生きておつたら、インド、パキスタンと二つに分れることもなかったはずだ、と信じこんでいる人が多い。ともかく私たちは四手井將軍の英霊の保護を受けているといえる。行先の地図も簡単にもらえたり、軍食糧の分譲も便宜が与えられた。

太平洋戦争のもつ意味、それは改めて考えねばなるまいが、その影響が意外に大きくアジア中をかきまわしたということだけは確かだ。ネパールの奥地やバルチスタンの辺境で、銀座はすばらしいとか、道頓堀はこのごろどうだ、などと聞く人があるうとは、この戦争なしには考えも及ばぬことだ。飛行機の爆音がすると、ふと隊員に近づき、「テッキテッキ タダチニ ゲキツイセヨ」などと叫んでみせる人間がいたり、ふところから日本軍の軍票を出す人があつたりするのだ。

スカルドへの飛行機輸送を一手に握るナシム中佐は、フランスに留学したことがある。先発隊が交渉に行くと、「おれは英語だけではない。フランス語がよくできるのだ」といった。そこで「それは大へん都合がいい。こちらの隊長はフランス文学の先生だ」と答えると、彼は例によってフランス文学とヒマラヤ登山とは、いかなる関係があるのか、といったそうだ。私は事務室に入るなり、フランス語でしゃべった。私の方が少し上手で、折衝は大へん早かった。人は語学的に優位に立つと、それと関係のないはずの話の内容そのものにおいても優位に立ちうるものである。私はフラン

ス人以外の外国人とは、できるだけフランス語でしゃべることになっている。

軍の気象部へ出頭して、気象通報の交渉をした。それはカラチから指令が来ており、OKだ。資料はここで作るが、それを電波に乗せるのは放送局長の意向によって決まる。それを取りつけておかなければいけないという。車を馳せてラワルペンディ放送局へ。局長はすぐ承諾しておいて、私に、遠征についてあす放送してくれという。あすは早朝に立つという、それでは天候の悪化を希望する、などと冗談をいい、午後二時十五分に車をまわす、と一人ぎめだ。英語はニガ手だということ、お前の英語はエクセレントだ、とくる。私の英語がエクセレントといわれたのは、生まれて初めてだ。英作文で昼寝のひまもない。二時半にははや車がくる。行くと、講演調ではまずい、インタービュー形式にするという。いよいよ工合が悪い。一回練習してやり始めるとテープ・コーダーの故障。しめきった部屋でまさに流汗一斗、七分間の放送に一時間半もかかった。もちろん無料だ。やっと「当局は貴隊に電波をもつてあらゆる援助を送る。成功を期待します」というのはっきりした言葉が聞きとられ、法規によって厳禁といっていた放送局の撮影も許可された。

クタクタになってねたが、暑くてときどき目をさます。すると同室の加藤がまた便所に立つ。

六月十四日・ラワルペンディ

三時半起床。約束どおり四時半に空輸事務所に行ってみると、本日は中止。

温度は一〇八度。先発隊からスカルドは極楽のように涼しい、などといってくるので、一しおしのぎにくい。しかしヤキモキしても仕方がない。部屋にこもって、きのうの疲労の回復をはかるのみ。

ヨーロッパでも、グランド・ホテルというのは、名のように立派なホテルではない。これもその例外ではなく、ただ安いからというので先発隊が決めたのだ。円の中心に当るところに事務室と食堂があり、同心円を描いて自動車の通れるほこりっぽい中庭、その周辺に部屋がならなる。旅客のほかにアパートのようにして住んでいる人が多く、私の隣室には軍人夫婦がいる。細君は、私たちが着いてからは必ず夕方方は盛装して、軒下で涼をとっている。もちろん話しかけたりはしない。妙齢の美人だ。夫君が帰ってくると、椅子を向い合わせに置き、そろえてのばした両足を相手の椅子にのせ、じっとしている。これでは眺めにならない。ほかに子供づれの客がいて、やけにやかましい。部屋の中は暗く、ちゃんとした便所もない。便器に用を足しておく、掃除夫が一日に一回まわってきて、それを持ち去るのかと思うと、ただ隣りの家との空地にパツと捨てるだけだ。食事はライスカレー一点ばり。それは食べほうだいなので、若い隊員はさして不服はないようだが、私にはちとつらさ。

飛行機はあす乗せる約束だが、お天気次第で、何ともいえない。私は加藤を冷房の部屋に入れたいと思つて、当地で一番よいフラッシュマン・ホテルに問い合わせた。一九五五年隊から、いいと

すすめられてきたホテルだ。冷房はないが、少しましな部屋があるというので、タンガを呼んで、加藤と二人だけそちらへ移る。ここも車馬を通じる広い敷地の間に、一階建の部屋のブロックが配置されている。天井が高く、バスもあり、少しはしのぎよい。

夕方、連絡がきて、明朝八時半、四人だけスカルドに送るといふ。この飛行機は小型で、座席は八つ。あすはどうやら大官が乗るので、限定されたい。加藤、潮田、平井、そして私の四人が乗ることにする。あすはぜひ飛びたい。しかしそう決めこんでガツカリしてもなるまい。飛べれば仕合わせなのだと思うことにする。

当地に長くいたイタリア隊は、英語のしゃべれる隊員が一人しかいなかった。フランス語のらまいものもいるが、それは同じ人間だ。ところが日本隊は全員が英語をしゃべる。そのうえフランス語、ウルド語までできる隊員がいる。大へんなインテリ部隊だということに当地ではなっている。京大の先生たちが聞いたら笑うかもしれないが、私たちはこの好意的デマを甘受して、できるだけ現地の人々とコミュニケーションをよくしたい。

## 基地 スカルド

電話です、という声で飛びおき、ピジャマのまま帳場へ走る。飛行可能、七時三十分までに空輸担当官の事務所に出頭せよ、との連絡だ。ありがたい。紅茶を一ぱい飲んだだけで、七時すぎ加藤、平井、潮田と事務所に行く。やがて私たちの荷物がトラックで運び出される。そのあとをつけてタクシーを走らす。

飛行場で、私は朝食をとったが、下痢中の加藤と潮田は紅茶しか飲もうとしない。となりの食卓で食事している機長に、潮田カメラマンのために空中撮影の許可を願ってみたが、国法の禁ずるところやむをえない、カメラはすべてあずかる、との返事だった。

九時四十分、双発の小型が飛びたった。飛行機は両翼の先端が真紅に塗ってある。万一中に墜落したさい、見つけやすいためだ。一昨年一機落ちたが、遺体を収容するのに二年近くかかった。

六月十五日

そう当局者がいうのだから、気持はよくない。事実この空路は巨峰ナンガ・バルバット(八二二五メートル)の横つ腹をかすめ、山と山との間を曲芸飛行するのである。離陸して二、三十分、荒涼たる平野の上を飛ぶと、右手に白い雪の山が見え出す。地図でしらべるとヌン・クン山塊。かつて東大と京大が連合で計画したことがある。山なみがしだいに近く迫ってくる。その中にいきわ目立つ大きな塔のような巨峰が、群峰を支配している。不覚にも、私たちはそれがナンガ・バルバットだとすぐには見分けかねた。

魔女のように美しい山、イギリスのマンマリー、ドイツのメルクルなど、世界の名登山家二〇数名のギセイを要求し、ようやく一九五三年、単独行のヘルマン・ブールに登頂をゆるした(そのブールも妖気にふれたのか、チヨゴリザで消えた)ナンガ・バルバットは、銀白にかがやいている。私たちはまずマンマリーが二人のグルカ兵とともに消息を絶ったといわれる巨大な尾根をかすめ、眼下に有名なベース・キャンブ地メルヘン・ウィーゼ(牧場)が氷河のはじめに緑に光るのを望む。目を上に戻ると、ジルバー・ザッテル(銀白の鞍部)、ラキオット・ピーク、主峰につづく長大な尾根に囲まれたアイス・フォールが、間近かであった。単身この長い尾根を突破したブールの超人的なエネルギー、そしてあのラキオット・ピークはいかにして登りえたのか、私たちには想像を絶した。

なんだか息苦しいと思つたら、このとき高度は六五〇〇メートルだった。操縦者は酸素吸入器をつけている。

ラカポシ、ハラモシ、はるかにK2、何というゼイタクな眺めだ。とくに六〇〇〇メートル級のパンジャブ・ヒマラヤの山々をぬら美しい谷間。あそこを軽装でワンダリングしたら、どんなに楽しからう、あの峠のあたりを。

やがて飛行機は急カーブを切ると、兩岸に岩山のそびえ立つインダス河の谷筋にすべり込む。眼下に緑と砂丘の盆地が見えてくる——スカルド。やがて河原の砂場に猛烈な砂塵をあげて着陸した。十一時十分。陽は熱砂の上にキラキラと光っているが、さわやかな風、なんと涼しさだ。七〇度と思つた。あとで事務所の寒暖計を見ると、九〇度。一一〇度になれた私たちには、この二〇度の低下が快感をあたえたのだ。内地で暑さといえばおよそ九〇度、そこから二〇度さがった七〇度が涼しさを感じさせる。この錯覚に私は異境を実感した。

事務所から電話をしてくれ、トラックが迎えにくることになる。飛行場からスカルドの中心まで九マイルあるのだ。二時、軍用トラックに乗って半ズボンの藤平、今川の両隊員がやってきた。藤平はほどよく陽焼けし、よく肥え、ハチ切れそうに元氣だ。初対面の今川は、昨年のスワート隊員たちの証言を裏切らない好個の青年。ウルド語のできる日本人というので、当地の人気をさらっているらしい。飛行場の連中と旧知のごとくしゃべっている。隊の大きな力となるだろう。

スカルドは、乾燥しきったインダス流域に、緑のオアシスを作っている。サトバラ湖から引いてくる、きれいな水がまちの中を流れ、ヤナギ、クワ、ポプラ、アンズがよく繁っている。その間に

島のように、地はだむき出しの砂丘がいくつかある。バザール(市場)を通り抜けて行くと、ダブルの背広を着た人の姿を見かけたりする。小さな町とはいえ、バルチスタンの政治、経済、軍事の中心なのだ。

私たちのテントは政務局のよこの迎賓館(レスト・ハウス)のわきの芝生に、黄、緑、赤ときれいに五つ張られてあった。周囲は四、五〇〇メートルの岩山に囲まれ、その頂きはすべて白い。見下ろす前面のインダスの河原は、砂漠めいていたずらに広く、そこを巨大な泥色の水が悠々と流れている。

先発隊員とは日本以来一月半ぶりの再会だ。握手、握手。ワジー大尉と初対面のあいさつ。元気そうな軍人。よく肥えているので、行軍がいささか案じられるが、熱心な回教徒というので、案じていたほどの堅苦しさはないようだ。

三時ごろから涼しくなり、夕方には砂嵐がまき起った。これは毎日のことのようなのである。緑草の上のま新しい個人用テントで、スリーピング・バッグを使い、久しぶりに暑さを忘れて快く眠る。

パキスタンは、辺境地区にポリテイカル・エージェント(政務官とも訳すべきか。P・Aと略称する)を置いている。このバルチスタン地区では、ギルギットにP・Aがおり、スカルドにいるのは正式名称ではアディショナル・ポリテイカル・エージェント、つまり副政務官だが、土地の人はやはりP・Aとよんでいる。P・Aは行政権と司法権をにぎり、少佐を隊長とする駐屯軍をも事実上おさ

えていて、いわば大名のような生殺与奪の権をもっている。私は到着の翌朝、官邸へあいさつに行った。

ハビブ・ウル・レーマン・カーン氏は、第二次世界大戦中、インド独立義勇軍に参加し、チャンドラ・ボースの幕僚長をしていた。ボースを死なせた台北の事故のさいも、同じ飛行機に乗っていたが、九死に一生をえた。その火傷のあとをとどめているが、堂々たる体格、眼光鋭い偉丈夫である。戦中戦後、二回日本に来たことがあり、「アリガトウ」「コンニチワ」など若干の日本語を知っている。ハコネ、アタミをなつかしがり、大の親日家だ。イタリア隊やアメリカ隊には貸さないが、日本隊のためにはジープもトラックも自由に使用してくれた。私が先発隊に与えられた格別の好意を深謝すると、それはP・Aとしての自分の任務を行なったにすぎぬ、しかし同時に独立義勇軍に對して日本国民から与えられた好意への御恩がえしの気持もある、といった。その後いろいろのことを頼んだが、いつも好意的に聞いてくれた。

——日本隊のことならやりましょう。何しろ共に戦った仲間じゃないか。

そういつて大きなこぶしを握りしめ、それを頭上にかざすのだった。二度目の訪問のとき、彼は独立軍時代の写真帳を見せたが、その一つにチャンドラ・ボースを中心に、日本陸軍の将星のいならぶものがあった。「あなたは、このうち何人、名がわかりますか」と聞くが、私には東条、土肥原くらいしかわからない。彼はほとんど全部を思い出し、梅津さんはいいい人だった、などとなつか

しがるのである。私がどう思おうと、彼にとって、この人々は尊い、命がけの民族独立運動の思い出と分ちがたく結びついているのだ。

目下当地には、カシミール省の次官、ラワルピンディ駐在のカシミール支局長らの高官連がきているので、彼は多忙をきわめている。査察ということだが、避暑の気分もあるようだ。隊員一同、その連中とともにP・Aのレセプションに招かれた。どこかイギリス風の多い官邸の庭、その緑の芝生の上に巨大なテントが張ってある。この地方の有力者が二〇名ばかりきているのに、一々握手をさせられた。そして私は中央からの大ボスの間に席を与えられたが、彼らが手ずから私に茶菓を勧めてくれる。P・Aすら大名格なのだから、このカシミール省次官などは將軍さまと云っていい格だろう。末席からうやうやしく拝見している地方の有力者たちの目には、私の株は大いに上ったに違いない。この連中の権力を振う土地を、これから私たちは旅するのだ。げんにシガールの有力者もきている。P・Aはおそらくそこに生じる効果も考えてくれていたようだ。てれくさがっても仕方がない。支局長は、パリに留学したこともあり、フランス語をしゃべる。フランスの植民地の高官によくあるような、きわめてスマートで、あいそがよい、しかしやるだけのことはやりそうな感じ。カシミール省次官は、海坊主のような巨大な浅黒い顔をして、あまりしゃべらない。登山などには一向に興味なさそうだが、バルトロ、ビアフォなどの氷河がいかにも巨大であるか、世界有数のものだ、という、おれの支配下にそんなものがあつたのか、というような笑顔を見せた。

チヨゴリザの名も、位置も、もちろん知ろうはずはない。

威厳という言葉に、私は子供のときから反撥を感じていた。威厳を示そうとする人間は浅はかに見えた。しかし、外国の僻地へ遠征するということになる、少なくとも隊長は、いささか威厳をたもたねばならない。背広も二着こまでもってきた。ほかの隊員は、暑くるしい背広などみなカラチにおいてきたのだが、私はそうはゆかない。きょうのレセプションも背広にキチンとネクタイを結んだ。大ボス連中はもちろん、有力者たちはみな身なりをととのえている。きょうだけではない。身分のあるものは略装してはならないように見える。またパーティーで隊長はカメラなどを、あまりふりまわしてはいけない。中島健蔵君のように、いつもカメラを肩からぶら下げていたりしては、こういうところでは、あなどられるだろう。地方の有力者のとりどりの服装と顔つきを、写しておきたいような気がしたのだが。

パーティーが終つてから、夕刻、P・Aは自慢の愛犬をつれて、私たちのテントを訪問した。彼の心使いで、私たちのテントのわきにはいつも巡査が一人、朝から晩まで見張りに立っている。事実、そういう用意がなければ、物が消えてなくなることは必至なのだ。キャンプ地のまわりは見物人ないスクリーリの志願者がうようよしている。一九五五年にバルチスタンに入った私たちの仲間から、巡査を同行することが、いかに有効かということを知っていたので、私たちも巡査をつれて行こうと考えていた。それには顔なじみにもなつたし、気立てもよさそう、この巡査をと

思っていて、実は本人の承諾はもう取ってある。それをP・Aに頼むと、しばらく考えて、よろしい、と行って調査を手招きした。直立不動の姿勢をとって敬礼する相手に、P・Aはきびしくいった。

——お前を日本隊に同行させる。しつかりやれ。万一、任務を怠ったならば、帰ってから厳重に処罰する。

もちろんウルド語でいったのだが、今川がいるので、すべてわかるのである。

六月十七日

当地のハイ・スクールで、中央の大官たちを迎えて、運動会のようなものをするから、ぜひ列席してくれと頼んできた。案内のとおり、九時かつきりに行ってみると、まだ飾りつけの最中である。校庭では、生徒たちが何べんも予行練習をやらされている。回教国だから女の子は一人もいない。子供たちは少しも人みしりせず、むしろ人なつこい。私たちがきたと行って騒ぎすぎて、先生にこっぴどくぶん殴られたのが二、三人あった。殴っておいて、先生は、これはまずいところを見られたという顔をした。

ハイ・スクールといっても高等学校ではなく、せいぜい小学校程度と考えてよい。しかし校舎は新築で、P・A御自慢の施設なのだ。ボスたちがきたのは十一時をまわっていた。マス・ゲーム、

体操などがあり、生徒の楽隊が、太鼓、笛などを行事の内容とは全く無関係に、ときどきかき鳴らす。二人の生徒が次官の前でスピーチをした。その一人は、潮田にテーブ・コーダーのマイクをつきつけられると、かわいそうにあがってしまい、暗誦のあとが出なくなつた。からだ中をさがし、やっと紙切れを見つけ出して、それを読んだ。最後に、日本のいなかの村の校長と同じような感じの校長が、しゃちこぼって、汗をポタポタ落しながら、長いスピーチをした。もちろん私には何のこともやらわからぬが、スクール、エデュケーション、グランマー、コンバーセッションなどという、英語の単語が一ぱい飛び出してくる。こうした単語はウルド語にはないのだろうか、それともあつても、新教育のニュアンスが出ないのだろうか。

大官たちがジープで帰るときは、全生徒が道路の両側に整列し、かつての日本の天皇の行幸の感じだ。帰り道、小馬(ポニー)に乗ってきた役人の一人が、私を見かけて乗れという。私は生まれてから乗ったことがない。好意を謝すると、だつてあなたは、やがてこれに乗って旅せねばなるまい、という。いかにも、と乗ってみたが、おとなしい馬だ。他人より一段高いところから見ると景色というのはいいものではない。キャンプ地までついできた馬丁に、タバコを二本やる。

午後、猛烈な風が出て、集会用のマス・テントが飛びかけ、大騒ぎをした。夕方五時からポロ・ゲームに招かれる。まちの中央に大きなグラウンドがあるのだ。まず、乗馬でやりをもち、疾駆しつつ地上の小さな木片を突く、デント・ベギングというゲームがあり、ついでポロ・ゲーム。P・

Aみずからも出馬した。勇壯無比、ときどき怪我人を出す猛烈なゲームだが、おしまいは少し退屈する。ここにも楽隊がいるが、ゲームと無関係にトンチンカンな演奏をすることは同じだ。ゲームが終ると、数人の踊り手が出てくる。もちろん男ばかり。グラウンドの周囲をうずめた観衆の中にも女は一人としていない。女は家の外へ出歩かないものと決まっているのだ。その踊りはムクツケキ男どもが、なよなよと女のような身振りを繰り返す。むしろ気持の悪いものであつた。

夜中から雨となる。明日も後発隊の到着はむりだろう。

六月十八日

加藤副隊長は、涼しいスカルドへ着いたとたんに元気になつた。毎朝五時前に起きてインダスへ魚を釣りに行く。一日といえども欠かしたことがなく、精励恪勤、驚くべし。毎日多少の獲物があり、四〇センチくらいの私には名もわからない魚をぶら下げて、私たちがレスト・ハウスの朝飯をすますころに帰ってくる。スカルド滞在中は、食事はこのレスト・ハウスのクックにやってもらう。おかずは、ニワトリかヒツジのカレー煮、それにチャパティとライス。加藤の魚がそれにいささかの変化を与えてくれる。

午後、渡河点を見に出かけた。河は、私たちのキャンプのある台地から、五〇メートルばかりの崖の下を流れている。ハイ・スクールのわかから下ってみると、巨大な木製の舟が一隻つないであ

る。アレクサンダー・シップとよばれ、この大征服者がこの地方に攻め込んだとき作った舟だ、ということになっている。少なくとも、その形は以来進歩していないといつていい古風なものだ。長い矩形で、ヘサキもトモもない。しかし、その本部はぶあつく頭丈で、三〇人はらくに乗せることができよう。その中でタバコを一服していると、はるかかなたの対岸に人影が見え、手をふって何かわめいているようだ。しばらくするとあきらめて、シガールの方へ帰って行った。インダスは遠くから見ると、ゆたかな水をたたえて悠々と流れているように見えるが、近くでみると、あなどりがたい水勢だ。

この日も天気はさえず、散歩の帰りには小雨が降つた。しかし降りやむと、全く雨のあとは残らず、うそのように乾ききつてしまう。後発隊は依然としてこない。ヒドン・ピークのアメリカ隊、ガッシュャーブルムIVのイタリア隊は、それぞれ一月ないし二十日前にここを出発し、すでにベイス・キャンプについて、攻撃を開始しているはずだ。P・Aはじめ当地の連中は、私たちにくるのが少し遅すぎた、とよくいう。モンソンの影響はネパール・ヒマラヤほどではないとはいふものの、焦燥は禁じえない。藤平以下の先発隊はすでに滞在九日になっている。

夕方、八人のポーターがやってきて、手紙をさし出した。イタリア隊の隊長カシン氏からのものだが、最後に「デワ ヨロシク」とローマ字で書いてあるところを見ると、副隊長マライーニ氏の代筆に違いない（彼は戦前、戦中、日本滞任七年に及び、京大でイタリア文学の講師をしたこともある）。文

面は、高所用ポーターを一五人つれてきたが、ウルドカスに着いてみて計画を練りなおし、うち八人を解雇した。しかし、この連中は優秀なポーターだと思うので、日本隊において採用してやってもらえばありがたい、というのだ。日付を見ると、彼らはウルドカスからここまで昼夜兼行して五日でやってきたのだ。この夏失業するか否かの分れめとはいえ、驚くべきスピードだ。なかなかたのもしそうなものいるが、いざれ数日中にポーターの選定をするから、それまで待て、といって引きとらせた。P・Aは、途中でポーターを解雇したりするのは計画がずさんだ、とイタリア隊にたいして御機嫌ななめだった。

六月十九日

けさも天候が悪く、あきらめていると、十時半、隊員到着の電話があった。きょうはビンディイから当地へ軍医総監が、また当地からビンディイへカシミール省次官が、と大官の往復があるため、どうやらむりをして飛ばしたらしい。やがて高村、岩坪、芳賀の三人がジープでやってきた。長い間、ビンディイの殺人的な暑さの中でカンヅメになっていたのだから、健康を害していないか、それが気がかりだったが、みな元気で安心した。芳賀など、レスト・ハウスの低い土塀ごしに私たちの姿を見かけると、嬉しくなったのか、いきなり塀を飛び越え、少しいためてしまった。

これで連絡将校も加えて一三人の全隊員が集結した。二十一日出発と決定し、準備にかかる。荷

物は加藤、藤平で再点検して、総量を切りつめることにした。不要品ははじめから持ってきていないが、下可欠でないものは、なるだけ落す。コロンボから苦心して飛行機ではこんだ軽金属のハシゴもやめる。嗜好品が切られると、食糧係が嘆息を発する。ここで買入れた食糧も入れて、四・五トンにおさえたのである。

最初の計画では、私と加藤、今川、連絡将校でキャラバンを指揮して、シガール、ブラルドの谷筋をアスコールにむかい、藤平以下、他の隊員は、高度馴化のため、二、三人のポーターをつれて、五〇〇メートルのスコロ・ラ(峠)を越す、ということになっていた。しかし、今年は例外的に雪がふかく、間断なく雪崩がおちて、峠の通過は危険だということがわかったので、全員一隊となってシガール谷をさかのぼることにした。

午後、P・Aの副官と警察署長のあっせんで、二〇数名の高所用ポーターの志望者を集めて人選する。すでにアメリカ隊、イタリア隊が優秀なものを選んだあとだから、クズが多いのかもしれない。大ていばかりで参加した遠征隊からもらった証明書を持っている。高度何メートルまで何キロの荷物を上げたとか、第何キャンプまで登攀した、というたぐいである。しかし証明書ばかりを信用するわけにもいかない。というのは、これが数ルピーで売買の対象になっていることを、私たちはすでに知っているからだ。二〇代の若僧が、一九二三年の遠征隊の証明書を平気でさし出したりするのである。これはあとで気がついたことだが、私たちの選んだ中にも他人の氏名をかたった不心得

者が一人あった。ベース・キャンプへ着いてから、実力の不足とともにそれがバレて、以後小さく  
なっていた。警察の旦那たちにうまく取り入っていたのである。こういうのはP・Aに通報すれ  
ば、おそらく厳罰に処せられるのだろうが、私たちはそこまでムゴイことをする気にはならなかつ  
た。けっつきよく直観で、顔つき、体格を見て選ぶよりほかはない。

イタリア隊帰りの中から五名、一般募集の中らかつて今西隊のコックをしたというのをコック  
として選んだのをはじめ四名、補欠二名を入れて一まず一人を選出した。体格がいいからといっ  
て選んでみると、警察署長があつた男は盗癖があり、このあいだ監獄を出たばかりだ、などといわれ  
て取り消したり、なかなか苦心を要する。元来回教徒の人の名前は、モハメッドとかアリとかイス  
マイルとか同じようなものばかりで、とうてい私たちには区別のつかないことが多い。そこで加藤  
は、それぞれに覚えやすい日本語のアダ名をつける提案をした。それを次に記しておこう。

イスマイル(くろ 色が真黒  
なので)

ハサン(しわ 顔にしわ  
が多い)

フセン(きいろ 黄色のシャツ  
をきている)

モハメッド・アリ(バクリー これはあとからのアダ名。山羊(バクリー)  
の番をさせたので、偶然そうなった)

フセイン(アスコーレ 出身地  
から)

グラム・モハメッド(チヨビヒゲ ひげをはや  
してゐる)

シユクール(あか 赤いシャツ  
をきてゐる)

失名(ワカ 一はん  
の年少)

コック(失名)

近くに石仏がある、と聞きこんだので足ならしに調べにいった。サトバラ湖への街道をゆるやか  
に登つてゆくと、キャンプ場から見える巨きな独立樹がある。そこを左へまがらずに真つすぐにゆ  
き、谷川を一つ越すとある。石仏といえは洞窟か断崖にあるものと勝手にきめていたが、これ  
は斜面につつ立った身長五倍くらいの大きな黄色っぽい石であつた。薄彫りで仏が浮き出してお  
り、文字もきざんである。無学の私にはいつごろのものか、何文字かもわからない。(帰つてから、  
文字はチベット文字、仏もその系統とわかつた。チベット文化が、レイからこころへまでのびていたのだ。パ  
ルチスタン語はチベタンの方言である。)少しも破壊のあとがないのは僻地のせいであろうか。最近ま  
でこの近くに仏教徒が住んでいたが、パキスタン国ができてからインド領へ越した。しかし、今で  
も時おり巡礼にくるものがあり、霊験あらたかなのだという。私たちのテントへキャラメルや菓の  
あき箱をもらいにくる子供たちの一人の家は、もと仏教徒だから、何かゆかりのものがあるかも知  
れぬ、と聞いたが、そこまで調べるひまがなかつた。

P・Aに別れのあいさつにゆく。

六月二十日

高所用ポーター九名は、昨日の原案どおり決定し、東京の御徒町で買ってきたG Iの中古軍服をきせ、個人装備を支給した。つぎに荷かつぎのクーリーを集めた。日本隊が近く出発するというので、近くの村々から集まってきた連中が、二、三日前から私たちのキャンプのまわりをうろうろしている。三〇キロをかつぎ、ここからアスコールまでは、日当三ルピー、それからベース・キャンプまでは四ルピー、帰途は半額、という定めになっている。彼らの日常生活では一日一ルピーももたうけることはむつかしいのだから、このように多額の現金収入の機会はそうあるものではない。無数に集まってくるのは当然だ。一部落に集中せず、公平に各部落からとってほしい、というのが、P・Aの意向である。この選択決定は警察とワジー大尉の仕事である。今川がそれに協力し、一五二人のクーリーを決定し、その名前を一々しらべて記帳する。

インダス渡河には時間を要するので、今夜中に荷物の半分は対岸に渡し、巡査に夜警させることにした。

## 乾燥地帯のキャラバン

午前四時集合、と命じておいたのに、クーリーの集まりが悪く、五時すぎになつて、やつとそろつた。中島、岩坪とワジー大尉が監督して、五時半出発。あとの隊員はゆつくり朝食をすませて、八時にあとを追う。渡し場までおよそ三十分。

舟は一回に三〇人を荷物、馬などともにはこぶ。ロとカイのようなものを使うが、それらをひっかけるヘソのようなものは何もなく、舟べりに砂をふりかけてすべりを防ぎつつ、ヤミクモにこだ。しかし、インダスの急流に押し流され、はるか下流に着く。それを引き舟して上流に上げ、こちら側に戻し、ふたたび引き舟して上流にひっぱってきて、客をのせるといふ操作を繰り返すので、一回に一時間ちかくかかる。きのう荷物を半分だけ対岸に送つておいたのは成功だった。

ここで一個約三〇キロの荷物を再点検し、かねて用意の円いセルロイドの番号札をクーリーに渡

六月二十一日・シガール

し、首にかけさせる。この紐を用意してくるのを忘れ、昨日になって紐をバサールで買ってきて、隊員は夜ふけまで紐通しにかかり果てたのだ。この番号札は、とうてい顔を覚えきれないクーリーたちを識別するためでもあり、また荷物の方にも番号づけをすれば、それが対応するという仕組みだが、クーリーはアラビア数字など読めないものであった。この仕事に一時間あまりを費し、十時半出発。幅四キロを越す大インダスの砂漠のような河原を、長蛇の列を作って進んで行く。隊員一三人、ポーター九人、クーリー一五二人、合せて一七四人のキャラバンだ。馬上に、これを眺めやるとき、万里遠征の感を禁じえない。といっても、乗馬ははじめての私は、一向に勇壮ではない。もっぱら加藤副隊長のあとをつけて行く。彼は陸軍大尉だ。いくらムチを当てても、ノツソリ歩くだけの小馬だから、心配はなかったのだが。初日二二マイルを乗り通したが、どこも痛くはならなかった。西堀式乗馬サルマタは怠けて作らなかつた。

砂原を半ばすぎたころ、風が吹きおこり、猛烈な砂嵐となった。カメラをリュックの中へかくしたころは、だいたい手おくれで、半数ばかりのカメラが故障した。器用な潮田が、その晩テントで分解掃除をしてくれなかつたら、あやうく使いものにならなくなるころだった。

河原がつきてシガール谷へ越すところに巨大な岩壁の登りがある。その峠から見下ろすシガール、インダス両河の出会いの雄大さ、それは筆にも、おそらくレンズにも捉えきれまい。峠の下りで、にわか雨に会った。私は陽よけの洋傘をもっていたが、各自持っているはずのレイン・コートをす

ぐ取り出したのはほんの少数で、あとはビショぬれになって、寒さにふるえた。まさかこんな所で雨が降ろうとは思っていなかったのである。峠を下り切ってしばらくすると、ヤルボツォーという小さな美しい湖水があった。ワジー大尉の友人で、私たちもスカルドで心やすくしていた農業技師が先行していて、ここでお茶の接待をうけた。

河幅が広くなると、クーリーたちは、すっかり列を乱し、全くばらばらになって行く。進むというより敗残兵の退却という感じだ。第一日目で荷がこたえているのだ。落伍者を出さぬように、しんがりは大変だ。

あそこがシガール、といわれた所から、きょうのキャンプ地、ボロ・グラウンドまでは二マイル近くもあった。シガールは大きなオアシスだ。村中を灌漑水路の清水がたっぷり流れ、緑の木が多く、美しく豊かな感じがある。バルチスタンで最も美しい地域の一つ、といわれるのも当然だ。

女も私たちに会って、あわてて隠れようとしなないのは、スカルドと違う。これは進んでいるのか、後れているのか。キャンプ地に着いたのは四時半。後尾は一時間おくれた。

テントを張っていると、若いみなのいい男があいさつにきた。けさ渡し場で白馬に乗ってやってきて、私たちを追い越して行った人物である。シガールの土侯だが、今はスカルドのP・Aの事務所に勤めているのである。五十年前、アブルッチ公がここを通ったさい、お供と楽隊をひきつれて歓迎に出た土侯というのが、彼の父に相違ないが、それが今ではP・Aの輩下となっている。中

央権力が次第に末端にまで及びつつあることの象徴であろう。そういうえばスカルドでも、その土侯というのが孫を診察してもらいに、ドクターのところへやって来たことがある。P・Aも一おうの敬意は払っているが、もはや何の権力もないのであろう。キョトンとしたその子供の病氣というのが、不治のツンボだというところに、私は彼らの運命の衰兆を見た。シガールの土侯の領地は村落三五、人口二三〇〇〇人という。

その夜は寒く、とくに明け方はふるえ上った。温度は別として、感覚としてはベース・キャンプまで、この夜が一ばん寒かった。みんなそう感じたらしい。

六月二十二日・コシュマール  
きょうはコシュマールまで、一六マイル。キャラバン中の最長行程だ。

このあたり夜は冷えても、日中の陽ざしは強烈そのものだ。涼しい朝のうちに、できるだけ行程をかせがねばならない。四時半、おそくも五時前には起き、紅茶をすすするだけで出発。そして八時か九時ごろに適当な場所を見つけて朝飯をとる。コックを先行させておいて、あらかじめ準備させておくわけだ。ところがわれわれのコックは気立てはよいが、まったくのスローモーションで、そのシリをひっぱたくのに隊員は苦勞する。昼めしぬきになったこともある。

行軍は、隊員を前衛、本隊、後衛の三つに分けて行う。前衛は二、三人、地理に明るいポーター

とともに先に進み、食事、休息、キャンプの場所をえらび、あらかじめ整備する。後衛も二、三人。これがおくれたクリーリをかり立てる。渡河などの際は、その支払いをすすませてくる。そして隊長、副隊長を中心に、本隊が中央部を進むわけである。前衛と後衛との距離は時として数キロに及び、キャンプ地への到着は二、三時間くらいおくれることがある。

右手に、コゼル・グンジュ(六三〇〇メートル)の純白の峰を望みつつ、クワ、ヤナギ、アンズ、ポブラなどの並木道を、早朝のしっとりした空気を吸いながら行く。馬上にタバコをくゆらし、ときに写真をとり、また手に触れるクワの実をちぎって味わう、幸福ここにあり、という感じだ。私たちの通るのを待ちうけて、笛、太鼓などをもって素朴な踊りを見せて、ボクシス(チップ)を求める村民もある。

シガールのオアシスを抜けると、ガラガラ乾燥地帯。強烈な日光が直射すると、足下の砂や石ころが焼け、キャラバン靴のゴム底も熱くなり、夏の砂浜をはだして歩いているようだ。きのうきょう、足にマメを出した若い隊員が少なくない。副隊長は、山男らしくない、と雷を落したが、今度のキャラバン靴は型がスマートすぎて、親指、小指のあたりに少し無理がくるのだった。

四時半すぎ、コシュマールに着く。地際にかまれた奇妙な台地の上に、キャンプをはる。あたりは荒れ果てているが、台地の上には芝生があり、適度に木もあって、山の眺めも悪くない。ブルド渡河の皮イカダの持主というのがユーノーにいる。それが連絡にやってきた。三隻予約する。

われわれのコックのスコ・モーには閉口する。今晚の夕飯は実に八時四十分。これでは寝る時間もおくれ、あすの行程に支障をきたす。いくら怒っても性質は改まらぬものとみえ、今後もずっとこの調子だった。

六月二十二日・デュッソー

五時半出発。一時間半でユーノーにつく。これは素通りして、タンダラ部落の墓場のわきで小憩する。墓は、木で作った矩形のワクのようなものを土にはめこみ、しるしとしてある。小型なのは子供、同じ形をスレート石をならべて作つてあるのは権威者であろうか。このそれぞれが苦悩とよるこびをまじえた一生を送つた人間なのだが、そのわきに坐して私は平然とクワの実をたべている。人夫たちは、その上を平気でふみ歩いている。日本やヨーロッパの墓地では、無縁のひともこゝろ無造作ではありえない。

この辺の村々は、クワの巨樹がきわめて多く、熟したクワの実が枝もたわわになつてゐる。私たちは休息することにもさびり食つたが、小人口の村民ではとうてい食い切れないほどあるので、何ら文句は出ない。クーリーたちは梢に高く登り、木をゆすぶつて実を落とす。下ではテントのシートをひろげて受けている。このクワの木はどこから移植されたものだろうか。このあたりでは養蚕は全く行われておらず、ただ木の実が食用になるだけだ。もちろん木かげの価値は大きい。

このあたりからデュッソーにかけて、日本のと全く同じ構造のゲタをはいている土民の多いことは、私を驚かせた。相互影響ということは考えられず、人間の知恵が別々の地域で同じ発明をしたものだろう。ワジー大尉によると、パキスタンでは、このバルチスタンとアフガニスタンちかくの国境地域にだけ、ゲタをはく風俗が見られるという。

道はムンゴを通らず、ほぼ等高線で河原ぞいに行く。がらがら石の荒地で、ヨモギくらいしか生ええないのだが、ときたま野生のバラが美しく花を咲かせている。対岸に見える白雪の山は標高およそ五、六〇〇〇。もし一つでもヨーロッパや日本に持つてくることができたとしたら、いうまでもなく最高峰。山麓までたちまちに鉄道が敷設され、バスが満員になるだろうが、奥地に八〇〇〇、七〇〇〇の名峰をふんだんに持つカラコラムでは、ろくに名前すらつけてもらっていない。

マリチヨの村につくと、前衛が村のまん中、汚い人家の横つちよのほこりつばいところにシートをひろげて、朝飯の準備をしていた。加藤がいきなり文句をいった。

——こんなところで飯が食えるか。もう少しましなところを探せ。

そして彼自身麦畑のあぜ道から二、三〇〇メートル向うに緑地を見つけた。クワの巨樹のかげが快い。一時間半ばかりくつろぐだけだが、いや、それが短いだけに、快適なところを選びたいというのが、年輩者の気持だ。血気さかんな若い者には、その感じがもう一つびつたりこないのかも知れない。食べるものはどちらにしたって全く変りはないのだから。しかし私たちにとっては、一ぱ

いの紅茶を草上に飲むか、砂上に飲むかによって、その味が変わるような感じがする。それはあくまで感じにすぎず、美の領域、趣味の問題かも知れない。しかし登山ということ自体、その底に趣味の問題を深くひそめているのでないか。どんな姿の山でもただ高いところに、登ったらいよいよというわけにはいくまい。

道は右折してブラルド谷に入る。スカルドからチヨゴルンマの合流点までをシガール河、それから上流アスコレまでをブラルド谷と呼ぶらしい。ブラルド谷に入ってから、その分流の渡河が何度もあった。ごく浅いのはポーターにおんぶして渡ったが、もう少し深いのは、私たちが乗ってきた二頭の小馬に全隊員が交互に乗って渡った。水は馬腹に達し、水勢強く、水温は五度あまり。乗馬の経験のないものが大部分だから、馬を右側から乗ってみたり、水流を見ていたためからだが傾斜し、あやうく水中に落ちようとしたり、大笑いだ。こちら側についた馬を毎回馬丁に対岸へ戻させるのはかわいそうだと思ったが、どこからとなく下半身を露出した村の少年が二、三人現われて、たくみに仕事をやってのけた。ボクシス。クーリーたちは危いので、山ぞいに高まわりさせる。

広い河原に、そうした渡渉をいくたびか重ねると、やがてチグスタン村の前面で、本流を渡らねばならない。幅はおよそ三〇メートルくらいだが、水量多く、流れは矢のように速い。私たちはここで小馬を乗りすてた。三日間と帰り賃を合わせて四八ルピー。これにいささかのボクシスとタバコ数本を与えると、馬丁は喜んで馬に乗って帰っていった。

渡し場には、すでにユーノーの村からザークが三隻ついていた。羊の皮をほとんど原形のまま袋としたものに、空気を入れてふくらませ、これを二〇数個ないし三〇個ばかり四角に並べ、その上にポプラの木のワクをつけたもの。半裸体の船頭が四隅に一人ずつがんばり、おのおの棒をもって流れをたたくようにし、また浅いところは底を突き、たくみに急流をあやつる。もちろんはるか下流に着くので、毎回それを引き舟するか、かついでかみてまで持って行かねばならぬから、大へんな手数だ。客は一回四人しか乗せない。羊皮の上に姿勢を低くすわりこみ、運命を船頭にゆだねる。『世界の楽園』をとった、アメリカの映画隊の一人が、このイカダで撮影中、バランスを失って河に落ち、死んでいる。いくら水泳が達者でも、あの速さでは助かりようもない。私たちは三隻つかったが、全員渡りきるのに三時間半を要した。焼けつくような砂浜に最後までがんばる後衛のつらさは察しがつく。

ヒドン・ピークへのアメリカ隊は一月前に入っているが、その後発隊二人が二十日にスカルドに着き、八人の人夫をつれて私たちと同行している。彼らは英語しかできないので、今川に頼っているのだ。好青年だが、金払いはよろしくない。この渡河でも三ルピーしか置かないので、船頭たちが憤慨して、人夫の一人を人質に取った。最後にやっと釈放してもらったが、アメリカ人はこうした辺境のおくれた土民などは、どのように利用してもかまわないという気持があるのでないか。同行のクーリーたちが私たちにこぼしている。

デュツソ一のキャンプ地は、流れのそばの芝生。飲料水はにごった灌漑用水しかない。ポーター、ワ  
クリーには、どうやら私たちのような清水という觀念が乏しいようだ。

この日は前衛の到着二時半、後衛は六時。最大の開きを生じた。

キャンプ地から見える裏山に塔のような岩峰がある。かつて聖人がそこで修行したということ、  
ここを通る者は、必ずその聖人の靈に何か甘いものを供える、しきたりになっている。村からそう  
いう要求があったが、砂糖は私たちには貴重品だ。けつきよく金で折れ合うことになり、二〇ルビ  
ー奉納させられた。(帰りも、登山に成功したのだからということで、またまき上げられた。)

六月二十四日・チャボ

デュツソ一からチャボまでの道は、ブラルドの谷ぞいに行けばよく、「楽な道です」と私は一九  
五五年隊の藤田和夫から聞いていた。前に行つたアメリカ、イタリヤ両隊も谷ぞいにルートをとつ  
た。ところが私たちの着いたころは増水期になっていて、河通しには行けないことがわかつた。ブ  
ラルド谷は、このあたりから兩岸の岩壁が相迫り、大型の廊下の様相を呈している。増水期には高  
まきの連続となるわけだ。アブルツ公によるとアスコレまで、その上り下りの合計は数千フィ  
ートになるらしい。

五時五十分出発。しばらくは河原を行くが、いきなり急な岩壁の上りが始まる。実際は三五〇メ

ートルほどしかなかったのだが、私には五、六〇〇メートルはあるように感じられた。デュツソ一  
まで馬でできて、歩き出しの初日にいきなりこのよじ上りにぶつかり、そのつらさが錯覚させたのだ。  
私は歩度をあやまり、早く登ろうとして、いささかアゴを出した。その途中トラバースのところか  
ら下方に吊り橋が見える。河原通しに行けば、これを渡るのだ。九時、巨岩の多い峠のようなどこ  
ろに登りつき、朝飯をとる。それからは、やや下り気味の一時間以上のトラバース。そうして地隙  
のようなどころをシャニムニ河原まで下りる。あとはおよそ河ぞいに行くのだが、この日の暑さは  
全くこたえた。

二時すぎチャボのテント場に着く。地凶にはチョコピオンとあるが、普通チャボと呼ばれている  
らしい。アンズの木のしげつた狭い階段状のところにテントを一系列に張り並べる。

部落のわきの枝谷にかけた橋のそばに、すばらしい湧き水を発見したので、それを汲みにやらせ、  
中島ドクターにお茶の御手前をやらせらう。旅行用の茶道具一式、用意があるのだ。メス・テン  
トに正坐した隊員たちの前に秘蔵のヨーカンが一切れずつ配られる。ワジー大尉は、生まれて最初  
の茶会というので、うれしそうにきっちり正坐している。スカルドで荷物の重量を減らそうと加藤、  
藤平が大ナタを振り、食糧係が苦心して持ってきたものも相当はずされた。食糧係は泣き出しそう  
な顔をしたが、はじき出された嗜好品の若干を自分たちのリュックサックの中にひそめて持ってきた  
のである。キャラバンの途中、こうした隠匿物資が思いもかけず出てくると、一同歓声をあげる

のだ。このヨーカンもその一つかもしれない。

六月二十五日・チョンゴ

きよらの行程はキャラバン中、最悪の一つだった。

しょっちゅう落石のある悪場を通過せねばならず、そこは朝早いほど安全なので、五時二十分出發、急ぎにいそぐ。少し手前までくると、もうもうたる煙が谷一面にみなぎっている。私はふと温泉があるのかと錯覚した。ガラガラ石と砂の急斜面。上にたまった石が陽が当たると間断なく落ちてくるのだ。近くまで行くと、いまして石なだれが出て、クーリーが一人死んだという。さいわいそれは誤報で、落石がクーリーの背負った木箱にあたり、箱が割れ、中の砂糖などがこぼれると同時に、クーリーは河にはたきこまれたが、軽傷にとどまった。手当をすると歩行に支障はなかった。帽子とはきものを流したので、これはすぐ金で返す。

潮田カメラマンは岩なだれの現場へ飛びこもうと走り出す。クーリーたちが、しがみついて、やつと食いとめた。

この危険区域約五、六〇〇メートルのトラバースは駆け足で強行突破だ。ゆるい傾斜の上りを少し走った。息が切れる。石よ、当らばあたれ、とあとは速足で渡った。

そのあとはガラガラ石の河原づたいと三〇〇メートルばかりの高まきが二回。高まきは一回と何

の根拠もなしにきめこんでいた私は、二回目の登りにすつかりまいった。二時間近くも早くついた先発の藤平が、水筒に冷たいレモン水をつめて、高まきの下り道まで出迎えてくれた。これにいささか元氣をつけて、チョンゴにたどり着いたのは三時。全行程中、私が一番へたばったのはこの日だった。

キャンプへ着くと、いきなり横になってしまった。ここから半時間ほどのところに自然の温泉があり、みな出かけたが、私は動く気もしなかった。隊員の食事は毎日チャパティの現地食だが、疲れた私には特別にアルファ米が支給された。それがひどくうまかったのだから、そう大したへばりようでもなかったらしい。

六月二十六日・アスコール

村にテントを張ると、ボクシスとして、村の顔役たちに何か出さなければならぬ。ここでも五ルピー取られた。

きよらは楽な行程。五時四十分に出て、途中トングノルでゆつくり休んで、朝めしを食い、九時半にはアスコールに着いてしまった。チョンゴからブラルド谷はからりと開ける。もう高まきはなく、アスコールに近づくと、緑の美しい段々畑のあぜ道を快く下って行くのみである。

キャンプ地は村の中央、いままでのどの遠征隊も必ず泊ったところ。写真で見覚えがある。ヤナ

ギの木蔭に石垣でかこまれた、ほこりつぽい、狭く苦ししい場所である。ひまな村民は石垣の周囲に集まり、一日中私たちを眺めている。ふと動物園のサルのような気がする。

スカルドからつれてきたクーリーたち全員に、賃金の支払いをした。そうして希望者はさらに同行し、他はここから帰らせる。その不足数は当地のクーリーでおぎなう。スカルドのP・Aもそれを希望していたのだ。その支払いが大へんだ。一度に支払係の方になだれ寄ろうとする。その整理に隊員とポーターがやつきとなる。きつちり勘定して渡しているのに、不足を申し出るものがある。数勘定ができないので、一おう文句をいっておいだ方が安全だというのだろうか。

イタリア隊について、奥まで行って戻って来た連中に様子をきくと、雪が深く、相当苦勞をしたらしい。ウルドカスで一日滞在するとして、ここからベース・キャンプまで、どうしても十二日は要するらしい。

六月二十七日・アスコール

滞在。六日間の急行軍のあとだから、一日休養とあらかじめ決めてあったのだが、ほんとうに休養できたのは、私だけだろう。

食糧の買入れ、それも村にないときは近くまで買出しに行かねばならぬ。荷物の再整理、そしてクーリーの選定だ。スカルドからのクーリーの半数は帰った。その補充のほかに、ここで食糧を買

い足すので、人数はふえざるをえない。これからさきに補給地はないのだから、クーリー五人につき、その食糧運搬のために、さらに一人の追加を要するという勘定になる。二〇〇人以下にするとは困難のようだ。

スカルドからの当地のもの、すべてクーリーは一人キャンプ地の石垣の外に出し、その入口から一人ずつ呼びこんで採用決定をするはずのところ、一人呼ぶとワツとばかりに三、四人飛びこむ。それでモタついているすきをねらうように、大ぜいがなだれこもうとする。ポーターと巡査が整理しようとしても、手がつけれぬ。しまいにはカンシャクをたてて、棒でぶん殴ったりしている。不採用になるより、棒で二つ三つ殴られた方がましだ、というところらしい。アスコール・クーリーといっても、この村のものだけではない。対岸のステ・ステヤチョンゴあたりから多数つめかけ、競争ははげしいのだ。それにしてもこのあたりの農民は、自分の名前を忘れているのだろうか。自分の名が呼ばれても、返事もせず、キョトンとしていて、他人が呼ばれたときにノコノコ出てきたりする。スカルドのクーリーはちゃんと返事する。ワジー大尉、山口、今川ががんばるが、夜の十時までかかって一〇〇人しか決定できなかった。休養という名の、喧騒、多忙な一日だった。



四時半起床。残りのクーリーの決定にひまどる。クーリー総数は二〇〇人となった。比較的軽そうな、背負いやすい荷物の奪いあい、大混乱をきたし、全員アスコレを出たのは、六時二十分になった。

六月二十八日・コロフォン

人間のすむ最後の村をあとにして、私たちはいま世界のはてへ向かおうとしている。しかし、実はそこに何の感傷もない。前途に大きな目的があるからか、それともいま別れるのが不潔をきわめた寒村だからか。村の中より、私たちのキャラバンの方がやかましいことは確実に、人間世界の引越した。

一時間も行かぬうちに、クーリーは突如として行進を止めた。早速の団体交渉だ。交渉に当るの

は、クーリー三〇人ごとに一人ずつ選ばせたメイト(小頭)たちである。きょうは羊正月(バクリーエ

ード)といつて、この地方では金持が召使たちにヤギの肉をふるまう日だ。おれたちにもヤギの肉をよこしてもらいたい、というのである。私たちはヤギを一五頭つれて行きたいと思つたが、七頭しか手に入らなかつた。不足分は玉子とともに、後からウルドカスに届けさせることにしてある。唯一の動物性蛋白食糧だ。そうやすやすと渡すわけにはいかない。しかし出発早々停滞されては困るので、あとで金でやるということにして、やつと行進再開。アスコレの連中は、おれたちはスカルドのような腰ぬけとは違ふぞ、というところを初日に見せておこうとしたのかも知れない。

岩壁の高まきを下つて、ビアフォ氷河のデルタに出たところに、すばらしくいい水があつた。私はひそかに「バルトロ第一水」と名づけて、それをたらふく飲んで、朝飯をたべた。その最中、ぼんやりしているうちに二頭のヤギに逃げられ、捜索に大騒ぎした。デルタ地帯は平坦で歩きやすい。十時半ビアフォ氷河の末端(ツング)に着く。すばらしく巨大な氷河だ。その表面はモレーン(堆石)に蔽われているが、断面には氷が露出して見える。このツングを横切るだけで、たつぷり二時間はかかる。それが終つたところがコロフォンだ。

コロフォンというのは、巨大な石という意味だそうだが、その巨大な石のところに着き、昼飯を始めたのは一時すぎ。時間は早い。もう少し前進できないものかと思つたが、メートたちは、これからさきは道が悪くて、とてもダメ、といつて絶対に動こうとしない。できればデュモルドの吊り橋の手前までと思つたが、ここに泊る。

テントを張っている最中に、猛烈な砂嵐が起つた。もともと水の悪いところへ砂が吹きこんだのか、楽しみにして飲んだ紅茶は、コップの底にドス黒く砂がたまつていた。

六月二十九日・バルドマル

荷物を整理して、また一日歩けばそれだけ食糧も減るので、けさクイリーを六人解雇。以後一九四人となる。

六時出発。十五分も行くと直ちに断崖のへつりとなる。メートたちもウソばかりいうのでもなさそうだ。右岸から入る大きな支流デュモルドの渡河は、はじめから問題だつた。おそらく出合いからかなり上流の吊り橋まで行かねばなるまいと思つて、朝はやく修理隊を出しておいたが、こまできて見ると、水量はさまで多くはなく、渡渉ができそうだ。前衛とポーターが苦心して、太股までの深さで渡れる瀬をうまく見つけた。浅いが流れがひどく冷たく、急なので、クイリーたちは四人ずつ腕を組み合い、杖でふんばつて越す。クイリーやポーターは靴をぬらすのをいやがつて、はだして渡るが、彼らのような厚い足の皮をもたぬ隊員たちは、すべりやすく、怪我をするおそれもある。靴のまま渡る。隊長、副隊長は、一ばん力のありそうなポーターにおんぶされて渡つたが、片手の杖で激流を支え、片手だけで私たちの身体を支えつつ遅々として行くので、ずり落ちそうではなはだ気持がよくない。K2のイタリア隊の隊員はここで水中に落ち込み、ポーターがあわてて

その足をひつつかんで離さぬので、あやうく溺死しかけたことがある。多人数だから一時間かかったが、吊り橋まわりに比べると一日のトクになる。もつとも渡渉料として一人一ルピーずつのボクスを出さされ、もちろん橋の修理料はとられた。

渡渉点から間もなく、大きな石に赤字で「ニホンノ アルピニストニ ヨロシク」という落書があるのを見つけた。イタリア隊のマライーニ君のしわざに違いない。

朝飯をすませて歩き出したと思うと、もうバルドマルのキャンプ地だという。一日にこんな短い行程では、サギにかかっているようなものだ、と若い隊員たちは立腹する。だが私には、これくらい余裕のある旅の方が楽しい。チョンゴからからだも快調になり、行程も短いので、気分は全く快適だ。キャンプの対岸、真正面に薄暗いシンカン谷が見える。シンカンという発音には何か中国的な語感があり、これはマツシャーブルムの裏にまわっているはずだが、一度入ってみたい感じを起させるたはずまいだ。

夕食後一ぱいずつのウィスキーを流し込み、老年組と少壮組と歌合戦。老年組は靡頓的な歌詞が多く、少壮組は健全な歌をただガナリたてる。こういうことになるやと世代の差は顕著で、私は嫌いな世代論を改めて一考せねばならぬような気がした。

クーリーたちは、焚火をかこんで夜ふけまで、ものうい裏声の合唱をつづける。歌詞は、夫に愛人ができたことを知った妻が、愛をその女にゆずるといふもので、その自己犠牲の美しさが大いに

アッピールするらしい。

六月三十日・バイジュ

毎日出発前は大混乱を生ずる。クーリーたちがクビにされないように、必死になってめいめい荷物を取り合うからだ。行進につれて荷物はへる。けさも九人解雇した。そのため生存競争なのだ。

ルートは河の右岸をすれすれに行く。一カ所切り立った岩をからむ悪場があって、通過に手間どったが、あと少し上ると、正午すぎにはバイジュのキャンプ地だ。

谷まで垂直に落ちる崖の上の台地にあるキャンプ地からは、はるかにドス黒いバルトロ氷河のツングが見える。そのうしろはエイギユイユ(尖峰)がつつ立っている。私たちのテントから少し草つき斜面を行くと、左手から清流が注ぎ込み、湿地があり、カンバなどの樹木が大きくそびえ、美しく花が咲き乱れている。そこに掘立小屋のようなものがある、クーリーたちはそこに宿る。

私が散歩していると、「バラ・サーブ」(大旦那隊長)といって、桜草を一束さし出したクーリーがあった。彼はフーシェ地区からきた数人の仲間の一人で、この連中は脚力が強く、毎日先頭に立ってどんどん進む。今川に、ベース・キャンプへ着いても、ポーターとして残してほしい、という希望を申し出たようだが、この優にやさしい行いには、おそらくその運動の意味もあったのだろう。彼らは精悍だが、ほかの地区のクーリーたちとの折れ合いはよくなさそうだ。

メイトたちがいるのには、ウルドカスには灌木が少なくなつたし、それまでの間ではタキギが手に入らないから、ここから持つて行きたい、それをかつぐクーリーが必要だ。あすの朝五人解雇できるところを、その仕事にまわした。この提案は、クーリーたちの解雇防止の相互扶助だったのかも知れない。ともかくタキギ集め料なるものをせしめられた。

メイトの一人に小柄で、旅順口時代の乃木大将そっくりの顔をしたのがいる。ふと一種の敬意をほらいたくなるのは我ながらおかしい。顔というものは意味ぶかいものだ。もっともこの男はいつも穏健な説をはくのだが。

七月一日・リリゴ

バルトロ氷河のツングゲから下の広い河原を蛇行する水流に朝日が美しくさしてくるのを見ながら、六時十分出発。バルトロ右岸の扇状地の斜面をトラバースする。水のあるもの、ないもの、谷々がそれを深くえぐっている。その上り下り。

途中朝飯をすまして、八時二十分にはいよいよバルトロ氷河にとつた。右岸のはしっこを登るのだが、高度はおよそ一五〇メートルしかあつたろうか。氷河といっても、表面は完全にモレーンで蔽われているが、そのモレーンにはかなり大きな波があり、上り下りを繰り返しつつ氷河を斜めに横断して、左岸に出るのだ。ピラミッドのような大きな氷塔があちこちにニョキニョキ立っ

ている。氷河の上に大きな川ができ、それがまた氷河の中へ吸いこまれてゆく。またところどころに美しい、それぞれ色を異にする氷河湖ができていく。とぼけていると、足をさらわれてすべつたりするので、かなり苦しい労働だが、二時間にはリリゴのテント場に着いた。

バルトロが方向を変える、その左岸の尾根の出っぱりの手前、岩壁の下である。Liligo という名は、その字づらからも音声からも、何か清楚な、すがすがしい感じを与えるのだが（ワジー大尉も同感だった）、飲み水といえは近くのたまり水しかなかく、タキギもパイジュから運んできたので間に合わすという、まさに殺風景な泊り場だった。

テントの横の直立した、つるつるの岩場を、クーリーたちがトラバース通過の腕くらべをやっている。高さは二メートルくらい、下は砂だから、落ちても大丈夫。若い隊員もそれにまじってやっているが、うまくホールドを求めかね、顛落すると、みんながドッと笑って楽しそうだ。クーリーでは、イタリア隊帰りで、いつも他の連中をアジる人相の悪い、私たちが「イタ公」とあだなしたのが一番たしかな腕を見せ、隊員では平井がいつも基本体勢をくずさず、よく通過した。こうやって仲よく遊びたわむれているところを見ると、私たちを当惑させるような要求をつぎからつぎへと突きつけてくるクーリーたちとは別人のようだ。もちろんそれは私のカン違いなのだが。

テントに着く少し手前で、クーリーたちがあまりノロノロ歩くので、巡査がカンシヤクをたてて、一人をぶん殴った。リリゴに着くなり、アスコーレの連中が騒ぎ出し、巡査を首切らなければ、お

れたちが帰る、といきまき出した。こちらの口出しすべきことではない。当の巡査と連絡將校と、われわれに同行しているアスコレ村長の件とで、一おうおさめたようだ。巡査は今までなかなかよくやったが、スカルドからのクーリーが少なくなり、アスコレ・クーリーの数がふえると、威令はあまり行われなくなるようだ。

七月二日・ウルドカス

左岸のアブレーション・ヴァレーを登って行く。一時間あまりで、右手からリリゴ氷河が入ってくる。その水流を渡渉する。きのうと同じようなモレーンの上の行進がつづき、行進に疲れたところ、ふと左岸に目のさめるような緑の斜面——ウルドカスだ。六〇〇メートルのウルドカス・ピークの急斜面のスノが氷河に落ちる直前、少し傾斜をゆるめてできたところ。斜面に段をなして狭い台地がいくつかあり、最後は氷河まで約五〇メートルほど落ちている。この標高四〇二五メートル。そこへの急斜面の登りは、一日の行程の終りには楽なものではなかった。ゆるゆる登ってみると、真正面にバイジュ峰(六六〇〇メートル)、石の棒を並べたようなトランゴ・タワーを望み、足下の氷河は巨竜の背のように不気味な起伏を見せている。そばを清流がシブキをあげてほとばしり落ち、そのふちには咲きみだれるサクラソウ。まさに天下の絶景といつていい。その緑の階段に、赤、緑、黄のテントが張りならべられ、一そう色彩を添えた。三年前に今西がきたとき、ここが空缶と紙屑

で汚くなっているのに腹を立て、クーリーたちにチップをやって掃除させ、やっとテントを張れるようにした、と書いていたのを思い出した。恐れをなしていたが、先発隊が気をきかし、きれいにしていたので、あとから着いた私は、そういう不潔な第一印象を免れることができた。

いやしくもカラコラムに関心を持ち、その遠征記の一つも読んだ人なら、必ずこのウルドカスの名を知っているに違いない。ここがとくに有名でもあり、また読者の印象に残っているのは、バルトロ氷河の遠征隊が、ここで緑と袂別せねばならぬからである。これから先は白と褐色と黒と、そして空のすごい紺青だけしなくなる。別れた場所はまた会う場所であり、山との戦いを終えて帰ってくる登山家たちが、ここで緑と再会する喜びが、紀行文に生彩を与えているからだ。

しかし緑との別れとは、たんに美の問題だけではない。それは、これから先タキギが全くなくなる、ということの意味する。アブルッチ公がきたころは、これもタキギにする灌木が豊富だったよ。うだが、近年のように毎年といつてよいくらい遠征隊が入ることになると、それは取りつくされ、今はかなり高いところまで登らなければ、十分の燃料はえられない。やがてそれは絶滅するかも知れない。クーリーたちは高いところへ登る労をきらって、バイジュから運んできたタキギを全部自分たちによこせという。私たちの炊事用には、プロバン・ガスを使わねばならなかった。

どこの遠征隊も、ここでは必ず一日滞在する。休養というより食糧事情のためである。人夫たちの主食であるチャパティを、ベース・キャンプまでの往復日数分だけ、このタキギで焼かさなけ

ればならないからだ。これから先は、燃料としてガス、ケロシンを使うが、多人数のクリーリーの食糧をガスで作るわけにはいかない。ここからベース・キャンプまでおよそ五日、帰りを三日と見ても、一八〇人・八日分は大した量だ。日本隊のようにサーブ(旦那隊員)もチャパティを主食とする場合、滞在は必至となる。

ウルドカスは、人間の住む最後の村を出てから無人の境を五日も登った、氷河のただ中にありながら、たんなる自然の秘境ではない。ひどく人間くさい所だ。第一、この狭い台地に私たち約一九〇人が泊っている。人口密度は東京都より大かも知れぬ。テントの周囲は小学校の校庭よりやましいのだ。それに人間は排泄のために、一々五〇メートルの急坂を下りはしない。緑草だと思つて、その上にうっかり寝ころんだりできないのだ。美しく汚い所だ。緑の斜面には巨大な石が散在しているが、それには DHE 1954 (ドイツ・ヒマラヤ遠征隊) OHKE 1956 (オーストリア・ヒマラヤ・カラコラム遠征隊) CAI (イタリア山岳会) などの文字が大きく刻まれている。私のテントのわきの巨石には「↑チョゴリザ山道」と赤ペンキの達筆で大書されている。これには驚いた。マライーニ君自慢の落書にちがいない。リリゴの岩壁にも《Zun Arsch der Welt》(世界のはてへ)と書いてあったが、世界のはてへ行ったところで、人間のおいは消えるものではないようだ。

イギリス隊と日本隊が、こういう落書をしないのは、なぜだろう。

七月三日・ウルドカス

滞在。しかし隊員たちは全く休養にはならない。要するにクリーリー問題に忙殺されるのだ。

きのう着いてすぐ、二五人解雇できるはずだったが、それを一日分よけいに食糧を費して、けさ解雇としたのは、わけがある。夕方に帰すと、何かを盗んで行かれるおそれがあったからだ。帰りたい希望者をしらべると、すべてスカルドからの連中だ。氷河の上を歩くとすると、スカルド勢はアスコレの連中より、はるかに弱いのである。

メイトたちが団体交渉にきた。こういう悪路では登山靴なしには歩けない、靴を支給してもらいたい、というのである。私たちが百数十の山靴を用意しているはずはない。だからアスコレでクリーリーを集めたさいも、足ごしらえのちゃんとした者ということを条件に出したではないか。彼らは、それでは自分たちの不十分なはきもの、あるいは前に他国の登山隊からもらった山靴を使うから、補償として現金をもらいたい。イタリア隊、アメリカ隊はともに一〇ルピー出したという。ここで二〇〇〇ルピー消えては、あとがもたない。連絡将校が折衝して、原則として七ルピー、それも受け渡しはベース・キャンプ着後ということに妥結した。

朝十時すぎ、三〇マウンドのアタとヤギ五頭を運んで、クリーリーが七〇人急行でやってきた。五人くらいでかつげる重量だが、人数まで決めてこない、こうなる。

緑の斜面を離れて氷河に移るところに、雪の上をちよつとすべりやすい悪場があった。隊員が足場を刻んでやつたが、クーリーたちはその前で立ち止まって、神への祈りの言葉をとなえる。おりから朝日がさわやかに射し、ふと印象的だった。

モレーンの上に出ると、ガツシャープルムとブロード・ピークが真正面に見える。まさに手の届くところのように思えるのだが、コンコルディアまで三日かかるのだ。バルトロの景観の雄大さがそこにある。

巡査を帰らせることにした。彼はリリゴの悶着以来すっかり威力を失い、もう何の役にも立ちそうにない。そのうえアスコーレのクーリーたちは、いたずらに反目が続ける。ワジー大尉に忠告されて彼も引き返すことにしたが、貸してある羽毛服とスリーピング・バッグを欲しがる。当地の習慣では、警官は高地用ポーターと同じだけの装備がもらえるはずだ、という。スリーピング・バッグは、これからも必要なので、羽毛服の上衣、毛布、キャンバス・シートで納得させた。靴はスカルドとアスコーレで、それぞれキャラバン靴と登山靴を渡してあるのだが、彼はそれらをわざとアスコーレに残しておいて、ここまで自分の日常の靴をはいてきた。はいてくれば、途中で引き返すさい取り上げられると思ったのだろうが、巡査がこれだ。ほかの連中がごとくに物をほしがるのは当然といえよう。

歩き出してから一時間、朝食をたべたところから、マツシャープルムが秀麗な姿を見せる。こちら側からはとうていとっつけそうもない。正午すぎ、はやビアンジェ・パロに着く。ここで泊るのだという。きょうはクーリーたちがやたらに大休止をとったのは、行程を見越してのことだった。ウルドカスからコンコルディアまで三日ということに決まっており、そうすれば第一日はここで泊らなければ恰好がつかなくなるわけだ。

七月五日・ゴレ・パロ

七時二十分出発。出発時間が次第に遅くなる。高度を次第に上げてきた氷河の上では、明け方が冷えこんで、あまり早起きしても行動できず、意味がないのだ。

きょうあたりから、モレーンはスレート石が多くなり、ぐらつかず、歩きやすいので、私たちは喜んでバルトロ・アヴェニューなどといった。そうしたルートをもクーリーたちは悠々と歩み、大休止に大休止を重ねる。先発隊は正午まえに、はやきょうの泊り場ゴレ・パロに着いてしまった。しんがりは、二時間おくれた。

きょうのクーリーの行動ののろさには、さすがのワジー大尉も腹を立て、キャンプに着くと、メイトたちを集めて、こういうことではバキスタン国の名誉にかかわる、と一場の道徳訓話をあたえた。クーリーたちの答えは、ウルドカス・コンコルディア間は三帳場というのが、きまりです。二

日で行けとおっしゃるなら行きませんが、その代り三日分の食糧と賃金をいただきたい。そうした方がトクであったのかも知れない。

突兀として青空を貫くムスタグ・タワーは、実に奇怪にも美しい。

バルトロ右岸、氷河の中流にあるこのキャンプ地のおよそ対岸に当たるところに、野生のネギがあるというので、平井とシュクールが回り道をして採りに行った。久しぶりに口に作る新鮮野菜、歓声が上がった。あす、さらにポーター二人を採りにやらせることにする。

今夜はじめて、ラワルピンディ放送局からの日本隊向け天気予報をキャッチした。

——四九〇〇メートルのあたりは曇。ときに晴れ間あり。

七月六日・コンコルディア

連絡将校の訓話のききめか、それともきょうは少し行程が長い、というところからくるのか、クーリーたちは実に早く歩く。なかなか追いつけない。

若干のクーリーが降りてくるのに出会う。アメリカ隊帰りの一部だ。ヒドン・ピーク登頂は成功したという。私はその晩、隊長クリンチ氏宛にお祝の手紙をかき、アメリカ隊と同じところにベース・キャンプを張っている、イタリア隊に向う人夫の一人にこれを託した。

昼すぎ、はじめてK<sub>2</sub>が頭をのぞかせる。なんとという高さ、なんとという量感。きょうあたりから

雪そのものの上を歩くことが多い。氷河の上を進んでいるという実感はつきりしてくる。二時すぎコンコルディアに着く。氷河上の十字路。ここからの壯観を筆紙にあらわそうとするのは愚である。ただ天下第一といっておこう。

一九五五年、今西隊はここまできて、引き返した。そのときの経験をふまえてきた私たちも、あすから日本人にとって未踏のルートに進み入る。いささかの感慨あり。

七月七日・モレーンの上

六時半に起きたのに、出発は八時半になってしまった。雪メガネの配給で大混乱を生じたからだ。メガネの要求は、すでにウルドカスから出ていたが、絶対数が少し不足なので、人数がへるまで待たせてあった。しかし、きのうあたりから次第に雪上行進となった。メガネをくれねば、もう進まぬという。よろしい、くばってやれ。数はちゃんとある。キャンプから一〇〇メートルばかりのところは隊員が立ち、荷物をかきいで一列に出発して行くクーリーたちに、一つずつ渡せばすむ。ところが配給が始まると、まだ荷物をかきいでいないものまで、ワツとかけ出し、隊員をとりかき、收拾がつかなくなってしまう。二重取り、三重取り。隊員たちが、いかにわめきちらしても、もう手におえない。最後にメイトたちを呼び出し、それぞれのグループでの不足数を調べさせ、メガネの行き渡らなかつた者に二ルピーずつ渡して、やっと収まった。といっても、メイトたちには

ヤンとした計算ができない上に、不足数を水増しして自分たちが着服しようとする。必要かっきり  
の数量はあったのに、七五〇〇円ばかり損をした。昨夜のうちにメートを集めて、グループごと  
に手渡しておけばよかったのだ。

メガネをもらえなかった連中は、金はもらったといっても、雪上行進だから、雪首になる危険率  
はきわめて高い。彼らは、自分がメガネを一つ二つちよるまかせば、自分の仲間が雪盲になろうと  
一向かまわないうらだ。夜の泊りに防寒用としてキャンパス・シートを貸すのだが、これも一〇人  
に一枚の計算をしておいたところ、腕力のある連中は、二、三人の組で一枚ぶん取ってしまい、無  
力な連中は何一つ当らない。乏しい生活をしているものが物をほしがる気持はよくわかる。しかし  
極度の乏しさは、仲間意識をも喪失させてしまう。私はこの日、心から腹が立った。

コンコルディアまでは、一九五五年隊の藤田の作った精密な地図があった。しかし、きょうから  
は大きっぱなクォーター・インチ地図以外に何も無い。先発隊を出して慎重にルートを選ばせる。  
隊員四名、ポーター二名。出発後しばらくは、きのうまでと同じモレーンの上を行くが、やがて氷  
河上の小川を渡渉して、左側の（つまり右岸により近い）モレーンに移った。バルトロのように大き  
な氷河を行進するさいは、目的地によって伝わってゆくモレーンを慎重に選ばなければならない。  
あとになってわかったが、私たちはここで氷河を乗り換えずに、そのまま行けばよかったのだ。氷  
河の下手では、モレーンの乗り換えは比較的簡単にできるが、上流に進むと氷河の状態が悪くなり、

モレーンからモレーンに移るための横断がきわめて困難になることが多い。私たちもやがてその困  
難に逢着する。午後一時ヴィーニユ氷河の出会いを少し過ぎた、モレーンの上にキャンプを作る。

きょうはじめて見るチヨゴリザは、雲がかかってよく見えない。K2、ガツシャールム、その  
他の高峰はみな頂上を見せているのに、目的の山だけが山頂を見せない。「花嫁がはじらっている」  
などと冗談をいっている、不安である。バルトロの一ばん南端にあるチヨゴリザは、モンスト  
ンの影響がもっとも早く、また大きく、晴れ間も少ないのでなからうか。一ばん純白だということ  
は一ばん雪が深いということだ。真正面のバルトロ・カンリはすばらしいポリュームを示し、標高七  
三一二メートルといっても、実に堂々たる天下の名山、食欲をそそる山である。

コックが、プロパン・ガスのボンベ一本目がすっかり空になったと知らせた。ウルドカスから使  
い出し、まだ四日しかたっていない。一〇人世帯で一カ月悠々使えるはずなのに、これはどうした  
ことか。ガスの栓は半開でいいと言っても、隊員がそばにいなくなると、必ず全開にする。そして  
クーリーたちに頼まれてチャパティを作ったり、茶をわかしたり、深夜までサービスをして  
やっているらしい。親切はいいけれど、この分では燃料キンは必至だ。緊急燃料会議が開かれ、  
チャパティは燃料をたくさん食うので、サーブたちはあすからスイートンということになる。

五時半起床。気温マイナス四度。

クーリーたちは、夜はまっ裸になって寝る。数人お互いからだをくっつけ合い、日本流に正坐して上半身を曲げ、両腕で膝の下を抱くようにして、からだの外気に触れる面積を極小にし、つまり奪われる熱量を最小にして、その上から着物ないし私たちの貸してやるキャンパス・シートをかぶるのである。私の故郷の北陸地方などでも、冬まっ裸になって寝る慣習が一部にあったことを思い出した。

スカルドを出てから十八日目、大旅行もいよいよきょうが最終日、そう思えば足も軽くなる道理だが、現実には歩むルートは楽なものではない。モレーンの丘陵の上り下りの連続だ。そして空気も大分うすくなってきたのではないか。やがて、ヒドン・ピークが左手にはじめて姿を見せる。間近かまで来ないと見えないのだから、「隠れた峰」という名のついたのももつともだ。快晴の空にそびえるところ、八〇〇〇メートルの山の貫禄は十分だ。

バルトロ・カンリから出るモレーンの上にベイス・キャンプを作らねばならぬが、いまのモレーンからどうしてそちらへ越すか。きのうもキャンプ到着後、脇坂、平井が偵察に行ったが、よいルートがなかった。けさ十時前、先発隊が、やっと横断できそうなルートを見つけた。モレーンを下って、小さな氷河の上の川を渡り、氷塔の間をぬい、雪の上を進む。雪におおわれたクレバスがあり、うっかりするとはまり込む。中島は水のたまったクレバスを踏みやぶり、全身びしょぬれにな

った。先発隊は大へんな奮闘だ。クーリーも一人クレバスにはまった。大したことはなかったが、これを見た前後のクーリーたちが、ロープがなければこれ以上行けない、とすわり込んでしまった。手持ちのロープを全部出したところで、一六六人のクーリーをアンザイレンするわけにはいかない。五〇メートルのロープに三、四〇人、片手で握って進ませる。そして一人一ルビーズつの特別手当を与える、という条件でやっと切り抜けた。正午ごろから雪がくさって膝までもぐり、そのうえ太陽は容赦なく照りつける。最後の日の行進は苦悩にみちたものだった。

午後一時、ようやくバルトロ・カンリの岩壁から出るモレーンに登りついた。岩壁からおよそ一キロくらいの距離である。モレーンの上は残雪におおわれ、荒涼としていたが、その消えた丘のような高みをベイス・キャンプとさだめ、ガラガラ石をならし、不十分ながら整地した上に、八箇のテントを立てた。

スカルド以来十八日にわたる大行進も、いま終りをつげた。その間、隊員は軽微な下痢、腹痛以外ほとんど故障なく、四〇〇〇を越せば当然起つていいはずの高山病的症状は、ここおよそ四九〇〇メートルに至るまで、ほとんど現われなかった。クーリーたちはさまざまの要求で私たちを悩ましたとはいえ、予定どおりに行程を進め、天候もおおむね私たちに幸いしたようだった。前途に大きな仕事を控えるとはいえ、まず目的の第一、第二段階を無事に完了しえたことを、私は何よりうれしく思った。とだけいっておけば、私として真実ではなからう。上り下りの多いきょうの雪上行

進は、私にとって全行程中、チャボ・チョンゴ間とともに、一番つらい日であった。そのつらい一日が終った、というホッとした心とからだのゆるみが、行進の無事終了という頭で考えた喜びを包んでしまい、私はすぐ隊長用個人テントに駆けこみ、横になって、ただぼんやりしていた。

ワジー大尉、山口、今川らは一刻の休息の暇もなかった。早く一六六人のクーリーたちに支払いをすませ、彼らを日のあるうちに少しでも高度の低いところまで、下らせてやらねばならない。しかし、それは簡単にいくはずのものではなかった。彼らも、一刻も早く下りたいという点では、こちらと相通する。気持は一致しているが、それを妨げるものがある。金だ。登山靴の補償七ルピーを加え、帰りは半額として、計算は七六ルピー一八アンナとなるのだが、彼らは同じ行程をイタリア隊、アメリカ隊は八〇ないし八三ルピー払ったから、それでは足りぬ、というのである。ワジー大尉もカンシャクを立てて、メイトたちをどなりつけ、やつと一ルピーのボグシス追加で解決した、と思つたら、村長の息子が、ここまでアタを入れてきた皮袋の損料を要求する。

スカルドからつれてきたポーターのうち、隊長、副隊長のベアラ（召使）だったワカを解雇することにした。彼は体力がなく、年が若いから無理もないが、全然気がきかない。これ以上こへ置いても、何の役にもたたぬことは明らかだ。いささか哀れでもあるが、クビにする。その申し渡しを聞いたとたん、ワカは大声をあげて不当をならし、もらった装備は殺されても返さない、と涙を出して叫びたてる。

高所用ポーターを補強する意味で、ここまでできたクーリーのうち優秀と思われるもの、すなわちマハン、グラム、小シユクルの三人を残すことにした。コックも加えて、ここに残る人夫は一人となったつもりだったが、二人になってしまっていた。コックが自分の助手として若いクーリーを一人、コック用のテントの中へかくしておき、みんなが帰ったあとで、それを助手に採用してくれ、と願ひ出たのである。おこつてみても、日は暮れかかっている。一人だけ帰すわけにもいかず、そのままになってしまった。

メイトのうち例の「イタ公」は、からだもよく技術もあり、当然自分はポーターの一人として残されるものと期待していたらしい。私たちも彼の實力は十分に評価したが、いよいよ攻撃に際して叛乱を煽動されてはという懸念から、採用は見合わせた。彼は失望して、他の三〇人ばかりと、ヒドン・ピークに成功してあす撤収するアメリカ隊のクーリーとして雇われるべく、そのベース・キャンプへ急いだ。

理論的にいえば、この三〇人はまたあすからちゃんとした仕事にありつくのだから、帰り賃半額はいらないはずだが、それはこちらの理屈で、彼らは当地の慣例によると主張する。つまり日本隊の仕事が終ったのだから、ここで往復の賃金を受けとる。そして村に帰るはずだが、たまたまアメリカ隊の仕事が降ってわいたわけだから、そちらからも正当な迎へと下りの賃金を要求する権利がある、というのだ。会計隊員は疲れきって、もうこれ以上理論闘争をしなかった。

金勘定のときはやかましいが、それが妥結して現金をつかむと、さすがにうれしそうな顔をして、急ぎ足に帰って行く。手をふって、私たちにサヨナラのあいさつをして行く者もある。

彼らの協力なくして、ベース・キャンプをつくりえなかつたことは確かである。K2のイタリア隊のように、ベース・キャンプに五時間というところで、荷物をおつぽり出されるようなことも、私たちにはなかつたのだ。しかも感謝の実感はない。私の日記も景色のことより、クীরリの記事が多くなっている。バルトロ遠征の現実なのだ。

私たちのクীরリのうちには、一九五五年の今西隊について行ったものが若干あった。その一人に日本隊はどうだったかときくと、今西という名は忘れていたが、あのバラ・サーブは大へんグツドだという。なぜか。叛乱が起つたさい、自分はそれに加わらず一緒にゆくといいと、バラ・サーブは一ルピーくれた、またスコロ・ラで顛落した他の人夫を助けたときも五ルピーくれた、という。生活の様式と水準を異にするところでは、思い出も金でしかうかばぬのだろうか。

クীরリたちが行ってしまうと、氷河上の静寂が改めてしつとりと感ぜられた。これから四十日ないし五十日を、私たち隊員一三人、ポーター一二人が、ここに単純にして困難な唯一の目的意識をもって、過すことになるのだ。きのう一日、一ときもヴェールをはずさなかつたチヨゴリザは、きょうの快晴に、花嫁の名にそむかぬ清楚な姿を見ている。モレーンの上の岩に腰かけて、私たちは夕暮れのチヨゴリザをあかず眺めながら、ルートはいかにあるべきかと語り合った。

## セラツクとクレバスの迷路

きょうもまた快晴の空に、チヨゴリザが秀麗な姿をクッキリと見せる。しかし、私たちは眺めきたのではない。きょうからは、いかに登るか、ということが問題なのだ。

七月九日

バルトロ氷河に入ってからの好天続きは、かえって私たちに焦躁を与えていた。この天気がいままで続くか。アメリカ隊はすでにヒドン・ピークの登頂に成功し、イタリア隊はすでに七二〇〇メートルの第四キャンプに到達したと聞く。ポーターたちもみな、雨季の近づいていることを語っている。カラコラムは海から遠く、大ヒマラヤを越えてくるモンソンは、ネパール・ヒマラヤにおけるほど威力をもたぬとはいえ、天候のくずれに対する危険は刻々に迫っていると見てよい。バルトロ地区におけるモンソン襲来の季節は、まだ明確にはされていない。しかし七月五日以来、毎夜ラジオ・パキスタンの好意によって送られる天気通報は、西進するモンソンがすでにパンジャ

ブ平原に及んだと伝えている。そしてチヨゴリザは、バルトロ南端にあり、その影響が最初にあらわれるにちがいない。

チヨゴリザは、一九〇九年にイタリアのアブルッチ公が試登した。昨年は、ヘルマン・プールのブロード・ピーク征服の余勢をかってここにいどみ、主稜線から落ちて生命を失っている。すでに二回の攻撃が行われたのだ。しかし私たちは第三回の攻撃に際して、そのいずれのルートを探るべきかは、まだ決定していない。両者とも、アイス・ドームの南側を巻いていることは確かだが、アブルッチ公のルートはそのすそを迂回し、真南から主峰とアイス・ドーム間のコルに出たのに対し、プールの方はアイス・ドームをかなり高いところからんでコルに達しているらしい。いずれにしても六〇〇〇メートル付近から上の記述は明確を欠き、アイス・ドームの南側の写真は一枚もないので、どんな状態かは一向にわからない。しかし、六〇〇〇メートルから上については、とくに困難な点があるようには、アブルッチには書かれていない。第一の難関は、ここから直正面に見えるアイス・フォールにあるようだ。

ベース・キャンプ（以下B・Cとする）から望むチヨゴリザは、頂上に小さな黒い岩峰（ピナクル）を見せるほかは、すべて純白の氷雪に蔽われている。右は六三三メートルの無名峰に続くゆるい尾根、左は比高約八〇〇メートルの急傾斜でコルを経てアイス・ドームにつらなり、ドームから左はゆるく、コンダス・サドルの方に流れている。この二つの稜線に挟まれる北面は二七〇〇メートル

に及ぶ氷壁となつて、一気にチヨゴリザ氷河の底まで落ち込んでいる。登路はただ一つ、チヨゴリザ山塊とバルトロ・カンリとの間の鞍部付近から急傾斜をもつて落下する氷河に求めるほかはない。

この氷河はチヨゴリザの南側から発してバルトロ氷河とコンダス氷河の分水線をなすカベリー・コンダス両ピークの間の大雪原の水を集めて東し、さらにバルトロ・カンリからのいくつかの小氷河を集めて北進、六〇〇〇メートル付近から急激なアイス・フォールをなして、一気にバルトロ氷河本流に落下している。比高およそ一〇〇〇メートル、美しく荒々しい氷の迷路をなしている。アブルッチもこの通過には辛酸をなめ、途中幾日かのキャンプを余儀なくされている。これをいかにして乗り切るかが、私たちの最初からのキイ・ポイントであつた。

十八日にわたる苦勞にみちた長いキャラバンを終えた私たちは、ここで数日の休養をとるのが常道であろう。しかし私たちはすでに山に入るのが遅すぎた。雨季の切迫を前にして悠々たる態度は許されない。きょう一日を休養、むしろ整備にあて、あすからさっそく行動を開始することにした。けつきよく休養は午前だけ。午後はそれぞれ係に分れて荷物の整備である。そのほかに集会所兼食堂用の大テントの建設、各テント間の残雪を払いのけての道つけがある。何しろデコボコのモレーンの上だから、大きいテントを張るには整地が大へんだ。地ならしをして周囲を石でかためる。このテントに名をつけようと、投票で募集した。当選者にはピース一缶の懸賞つき。結局加藤案の

「望嫁亭」と決定した。

そうした仕事が一わたり片づき、ホツとした夕刻、アメリカ隊のヒドンの登頂者P・シヨーン君が、バキスタン側隊員リズビ大尉と二人のポーターをつれて、私たちのテントに現われた。彼らはきょうB・Cを引きあげ、私たちのB・Cから谷を一つ距てたしもてに、キャンプしたのである。彼は隊長クリンチ氏の代理として、その手紙をもって答礼にきたのだ。

「親愛なる桑原教授

私たちの遠征隊のヒドン・ピーク成功についてのお祝いのお手紙、厚くお礼申し上げます。

一九五八年のアメリカ・カラコラム隊の全員は、私とともに、あなたとあなたの隊員にたいし、チヨゴリザにおける最上の幸運を希望します。あなたがたの天候が、私たちのときのように、よくありますように。

敬具。

一九五八年七月八日

ニコラス・B・クリンチ

シヨーン君は、不幸な犠牲を出した一九五三年のK<sub>2</sub>攻撃のさいのアクシデントで、急斜面を顛落する隊長ハウストン以下五人を一人で食いとめ、名を挙げた、本年三〇歳の登山家。本職は化学の技師。顔は真赤に陽焼けして、ずるむけになっているが、成功直後のせいもあるうか、快活

そのものような話しぶり、精力的な好漢だ。彼らは一九三六年のフランス隊のルートより一つ南の斜面を登り、六六〇〇メートルのドームに達し、およそ七〇〇メートルの第五キャンプから稜線づたいに一気に頂上（八〇六八メートル）を打ち取っている。リズビ大尉は連絡将校ではなく、正式の隊員として加わっており、七〇〇〇メートル以上にまで登り、バキスタン人として最高記録を立てたのである。

シヨーン君は、日本隊の装備に非常に関心をもっているようで、全部手にとつて見た。大工業国アメリカでは、マス・プロダクションに乗らぬ登山用具などの中小企業は成り立たず、彼らの装備はイギリス、フランス、スイスなどから買ったものばかりである。それらに比べて日本品が有効で安価なのに感心し、輸出してくれるといいがといった。無線電話だけは私たちのと全く同じアメリカ製だが、これは初めからしまいまで動かなかった。あなたの方が故障しないことを希望する、といって笑った。この隊は天気通報の交渉など何もしてないのだ。こうした装備の説明には主として芳賀が当った。どうやらうまく通じているらしい。カラチのホテルのことを思い出し、驚くべき進歩だ、とみんなでひやかした。

アメリカはこうした遠征のなかなか出しにくい国らしい。ハウストンの本を読んで察していたが、この隊も費用およそ九〇〇万円。物価高を勘定に入れると、日本隊以下の貧乏部隊のようだ。途中の渡河などで渡し賃を出ししづつたりしたこと、私たちはいささか反感をもっていたが、こう聞

いてみると、無理もないような気がしてきた。彼は帰りしなに、使い残しだが役にたつたら使ってくださいと、ケロシンを八ガロンくれた。こちらは燃料不足に悩んでいる最中、この手みやげは感謝に堪えない。好物だといってモリモリ食べたライス・ケーキ(カキモチ)とビトスの缶入り二つを、お返しとした。

七月十日

雲一つ見られぬ快晴。

アイス・フォールのルート偵察のために三隊を出す。第一隊は藤平を長とし、高村、芳賀の三人。アイス・フォールの左岸に六〇〇メートルのあたりから末端まで走っているインゼルに登路を求める。これは下部が険悪な岩壁となっているが、これを突破できれば、セラック群中の迷路を避けて、一気にアイス・ドームの末端の雪原に到達できるはずである。

中島を長とする岩坪、今川の第二隊は、氷河の右岸、バルトロ・カンリの岩壁直下、比較的セラック群の少ない部分を直登する。このルートはベース・キャンプから一ばん近距離な点が有利で、また稜線直下であるために、かなりのデブリがクレバスを埋めている可能性が多い。

第三隊は脇坂を長とし、山口、平井の三人、中央部を登る。このルートはセラックが荒れているので、巨大なクレバスが埋まっている可能性がある。そのほかに遊撃隊として加藤副隊長が出かける。

る。

六時半出発。朝日はまだバルトロ・カンリにさえぎられて氷河の上にはささない。雪が堅いので、各隊ともピッチを上げ、やがてセラック群の中に消えてゆく。

私たちの隊には携帯無線電話機が三台ある。きょうは各隊が一つずつ持ち、無電操作の練習をかね、一時間ごとに交信することにした。B・Cからはただ双眼鏡で観察するだけだが、セラックにさえぎられて、その行動は何も見えない。夕方六時半、帰ってきた。はるか向うからモレーンの上を歩いてくる足取りとピッチを見ると、全員かなりの疲労と察しられる。十二時間の労働、ムリもない。そばまでくると、元気な声で、ルートが見つかりました、という。ありがたい、第一の難関が開けたのだ。しかし、それまでの苦心は大へんだったらしい。次に加藤副隊長の手記を引用しておこう。

「私は、潮田カメラマンとポーターをつれて、少しおくれて出発した。氷河上の雪はまだ固くしまつて、アイゼンの歯が気持よくきく。中島隊の踏みあとをたどる。

セラックの中に入って三十分も登ると、彼らの声が聞こえてくる。どうやらクレバスにさえぎられて、前進できぬ模様だ。左によれば、かなりデブリが出ていて、クレバスを埋めているようだが、そこは岩稜の真下で、落石の危険が大きい。彼らはこれを嫌って、やや中央寄りにルートを求めて

脇坂隊の声もきこえてくる。必死で巨大なクレバスやセラックと闘っている。が、中央のセラックがあまりに荒れているので、左寄りに流されているようだ。両隊の距離は二〇〇メートルと離れてはいない。セラックの間から隠見する彼らの姿が、実にちつぱけに見える。呼びかわす声が深いクレバスに反響してひびく。一時間ごとに無電を交信するよう連絡して、私はさらに藤平隊のあとを追う。

朝日は、すでにアイス・フォールの上に輝きそめ、セラックはシナの官人の姿、おとぎ話の怪物のさま、異様な形となって次々に現われる。大きなものは都会のビルほどもあり、頭上におおいかぶさる。あたりの純白の中に、クレバスは傷あとのように蒼黒く深く深く切れこんでいる。カメラマンは登山のビギナー、ポーターもはなはだ心もとない。私は用心ぶかく右、左とセラックを縫うて、アイス・フォールを横断し終り、インゼル末端につくと、藤平隊が休んでいる。

その末端の岩壁は約二〇〇メートル、ほとんど七〇度の傾斜をもつて、そのすそを氷河中につっこんでいる。ベルグシュルンドはガラガラに荒れて、落石が無数にころがっている。藤平はこわい顔をして岩壁をにらんでいる。

——どうしても登れ、というなら、登れんことありませんがね。あまり気が進みませんナー。全身これ闘志の藤平にしてこれである。私も見たとたんに、これはいかん、と思つたのだ。

ふと上を見ると、そこはウソのように開けていて、かなり上の方まで見通しがきく。藤平と相談して、これをつめるだけつめてみよう、ということになった。カメラマンとポーターはここから帰り、私は藤平隊に入る。

最初の一〇〇メートルほどは、雪の急斜面で、たいしたことはない。しかし、ヒドン・クレバスはハチの巣のようであつて、先頭、後尾を問わず、やたらに落ちこむ。藤平が一ばん深いのはまった。幸いはばが狭く、深雪のため、ロープのショックが大きくなく、簡単にとまる。しかし、雪メガネが奈落におちてしまった。スベヤをもつていなかったら大変だった。

コンティニアスにどんどん高度がはかどる。脇坂、中島両隊は、まださきのところで前進をはばまれているらしく、声は下方にきこえる。無電交信では悲観的だが、正午までは何とかガンバって登路を見つけよ、という。もしそれができれば、ここにくるまでのトラバースが助かるので、時間的に約一時間とくになるのだ。激励して登高をつづける。

芳賀、高村は先頭に立って、精神的に氷の迷路をさぐり、ステップを切つて、右に左にセラックを縫つていく。アイス・フォールはいよいよ荒れてきた。一たん切りぬけて登つても、輸送路として不適當とわかれば、またつけなおす。薄暗いクレバスの中に入ってゆくときは、さすがにいい気持はしない。高度は約五二〇〇メートル、アイス・フォールの最も急激に崩落している地帯に入りこんできた。頭上には何万トンとも知れない氷塊がかぶさっている。クレバスはいよいよ大きく

なる。危なげなスノー・ブリッジが、わずかに、これをつなぐが、渡ろうとすると、とたんに崩れて、クレバスに吸い込まれてゆく。氷塊は物すごい反響をおこして落下する。一体どれくらい深いのか、見当もつかない。

迷路は果てしなくつづき、すでに十二時ちかい。B・Cから見た、C1(第一キャンプ)予定地、五三〇〇メートル付近の小プラトーはもう遠くはないはずである。あのセラックを越せば、と思うと次のセラック。氷河上の雪は烈しい日射に腐ってきて、ヒドン・クレバスは容赦なくわれわれを落しこむ。

十二時の交信で、脇坂、中島らは、ついに登高をあきらめた。上から見ると、彼らの行く手は綿目のようなクレバスがならび、絶対にムリだ。われわれのトラバースの道を補修し、登路を固定するよう頼んで、さらに登る。時々ズシンと腹にこたえる音がする。どこか、クレバスが開いたか、セラックが崩れたか。われわれはハツとして立ちどまり、顔を見合せ、足ぶみをして空しく足もとを確かめてみたりする。

十三時、狭い氷の裂目を登っていた芳賀が、プラトーです、と叫ぶ。切り抜けて見ると、第一段のアイス・フォールは終り、広い雪面がひろがっている。アブルツチ公の本を読んでいるわれわれには、このアイス・フォールを一日で乗り切れようとは夢にも思っていなかった。運命が幸いしたといえる。(その後、このルートが悪いため、何回か他にルートを求めてみたが、これが唯一可能のものであ

った。)

ここから見る上方は、もはや今までのように荒れておらず、ただ、より巨大なセラック群がビル街のように立ちならび、C2予定地への登路は何とか切りぬけられそうだ。ともかく傾斜はかなりゆるくなっている。高度は約五四〇〇メートル、B・Cからの時間を考えて、申分ないC1だ。第一の扉はひらいた。

チヨゴリザには雲が去来して頂上は見えないが、北の方は快晴で、左からムスターグ・タワ一の奇峯にはじまり、K2、ブロード・ピーク、ガッシュャーブルムIV・III・IIと、八〇〇〇メートルの巨峯が立ちならび、そのはるか下は、二〇〇〇人のクーリーとたどったバルトロ氷河。あたかも都会のベープメントのように、美しい縞模様をなして流れている。

帰りは登路をできるだけ修正し、ヒドン・クレバスはたんねんにふみつぶして降った。午後の陽はますます烈しく、雪は完全に腐った。クレバスの氷柱が落ちるのであるう、美しい金属音がひっきりなしにひびく。アイス・フォールの末端に近くなると、小さなアフタヌーン・フラッドがいくどもなく流れ出て、早朝アイゼンの歯をきかせて簡単に登ってきたところに、やたらにパドルができている。雪はどこどころ腹近くまでもぐり、這ってゆかねばならぬところすらあった。」

(加藤泰安)

晩めしは、きょうの健闘をねぎらって、アルファ米。

七月十一日

快晴。ルートが見つかったので、早速C1の建設。山口ら三人が、全ポーターを指揮して荷揚げを始めるかたわら、ベイス・キャンプ、C1間のルートの整備。一方藤平ら三人は、C1以遠のルートの偵察。

きのうC1に予定した地点は、アイス・フォールの大きなブロックの角ついで、狭すぎる。それから少し上へ行くと、はるかに広い安全そうなプラトーが見つかったので、そこをC1とした。そのすぐ手前に越しにくい大きなクレバスがあるので、固定ロープをつけた。ポーターたちは、ベイス・キャンプ以上になると、頭痛などをうったえ、C1の整備もそこそこに下りてきた。

藤平の報告によれば、C1からさきの見通しは悪くないという。十六日までにC2の建設を終り、そのときの隊員の高度影響の様子を見て、全員一度B・Cに下るか、そのまま攻撃に移るか、を決定したい、というのが私たちの目算である。B・Cから上に揚げるべき荷物は、二二〇人日分として、食糧二五五キロ、装備一六五キロ、燃料九〇キロ、酸素六〇キロ、映画一一〇キロ、そのほかに個人装備一人約一〇キロとして、隊員二名、ポーター八名で一九〇キロ、総計八七〇キロと計算された。

七月十二日

快晴。ポーター全員でC1への荷揚げをやらせる一方、高村、岩坪はイスマイルとバクリーを伴ってC1に登り、そこに泊ってC2へのルートの偵察に当る。

七月十三日

きょう十日間連続の快晴つづき。これがいつまで続くことか。本来なら、きょう隊員の大部分は上へ上るはずだったが、荷揚げの計算に狂いがあった、一日休養となる。高村、岩坪は無電で、偵察は成功し、チヨゴリザ・サドルの近くまで行ったと報じてきた。(これはあとで誤りとわかった。彼らはコンダス・サドルの方に流されていたのである。)

加藤と藤平がこれからの荷揚げ計画、各キャンプの毎日の宿泊人員、各人の行動の予定表を立てた。まず第三キャンプからダッシュを試みようというのである。

C1の見通しもついたので、あすは加藤、今川の二人をB・Cの整備に残し、全員上に登ることにした。それを祝って晩飯は特別食とし、加藤、潮田の二人が自慢の腕をふるった。ある隊員のノートには「非常な御馳走」と書いてある。

ヤギのスープ。

ぎょうぎ。

ヤギ肉とアタ。

ビアンジェから持ってきた野生ネギ。

味付のり。

ハマグリのお漬物。

野生ネギの漬物。

デザート(紅茶、抹茶、ヨーカン、するめ、ミルク)

これが特別豪華なメニューなのだから、他の日の献立は想像がつくだろう。

七月十四日

朝は快晴。昼から雲が現われる。七時出発。ポーター全員も荷揚げで同行。

出発前から私はB・Cに踏みとどまる計画であった。B・Cにはキーパー(責任管理者)が不可欠で、それを連絡将校に頼むわけにもいかず、その上、荷をかつげない私が高いところへムリをして登ることは、攻撃能力を減殺すること、とわかっていたからである。C1以上の作戦は加藤副隊長に全権をゆだね、藤原と合議させることにしていたのだ。しかし、C1までのアイス・フォールの難関も突破できたので、そのルート開拓の苦心を察し、またC1で壮途に向う隊員を見送り

たいと思つて、そこまで上ることにしたのであった。

私は山口、藤平とザイルをつないだ。山口は一番ゆっくり慎重に歩くので、彼と組んだのだが、私は残念ながら、その山口にも何べんも休息を要求しなければならなかった。セラックの間をすりぬけ、ヒドン・クレバスに用心しつつ登って行く。一步ごとに展開する奇怪な、むしろ酷薄な氷塊の姿、それは今までヒマラヤ登攀記などを読んで感じたもの、さらに写真によって知ったものとは全く別であった。息を切らしてよじ登るときにのみ見える山の切迫した美しさだ。最後の巨大なクレバスを固定ロープに頼って越すと、そこは広潤と開けた広い雪のテラスであった。その端にまた小さなクレバスがあり、それを飛び越すと、そこから整然とたてたテントのところまで、数十本の赤旗が白雪の上きれいに二列に立て並べられてあった。副隊長がB・Cから無電で、隊長が上った、歓迎アーチを作れと指令したのである。赤旗は氷河の上の要所要所に立て、ルートを明らかにするために篠竹とともに日本からたくさん持ってきたのだ。

テントに坐ると、岩坪がバラ・サーブのためにと、とくに作っておいてくれた昼飯が出された。おにぎりののり巻き、梅干と紅ショウガ、私はそれを全部片づけた。かなり疲れたが、これだけ食欲があれば大したことではない。私はここに一泊とする。ワジー大尉と潮田、岩坪はB・Cに下った。大尉はB・Cにたどり着いたころは、すっかりまいっていたらしい。

狭いC1テントの中での夕食と歓談は楽しかった。

七月十五日

くもり。C2の偵察、ならびにその途中までの荷揚げに向う藤平、脇坂、平井、芳賀の出発と同時に、相互に挨拶を交わして、私は山口、中島とともにB・Cに下った。午前中はあまり雪も沈まない。ゆっくりした歩度で、ときどき長休みしながら、最後はくさった雪にもぐりながら、B・Cに帰り着いた。途中で登ってくる加藤らに会う。

きょうから当分、B・Cの日本人は私一人となるので、荷物のあり場所、ケロシン・バーナーの使い方などを、山口から聞いておく。やがて山口、中島は運び残しの荷物をうんとこさかついで、おそらく二〇キロを上回ったであろうが、岩坪と三人、C1に登っていった。これでC1への荷揚げは全部完了した。

夕方から小雨となり、やがて雪。

## 苦悩の進撃

人気がないベース・キャンプは静寂を通り越して、何か固定という感じすらある。

七月十六日

朝、テントから外へ出てみると、一面のふかい霧で、ほかのテントの上部だけがまるで小島のように浮んで見え、それが遠く感じられる。霧海の中の小群島。しばらくして雨、やがてあられ、そして雪。

C1からは、視界が全くきかぬので、全員一日休養、と報じてきた。

大尉は朝から頭痛で、テントに引きこもったきりだ。「望嫁亭」に一人ががんばっていても所在がないので、個人テントに引っ込む。するといつしかウトウトとする。無電の定時連絡を、きょうは一、二回ミスしてしまった。どうせ休養だから要件はあるまい、という気もあつたからだ。

犬や猫は、なぜひまがあると居眠りするのかわ、帰ったら生物学者に教えてもらいたい。きょうの

私など、飯を食い、排泄をし、あとはウツラウツラというのは、その食事や睡眠に文化的な道具を使っているにしても、行為だけでは犬や猫と変らない。きょうは本も読まなかった。とすると、生理的、自然的でないことといえば、喫煙とヒゲそりだけではないか。この二つが、文化をもつ人間としての自然への抵抗かも知れない。実はB・Cへ着く一兩日前から、私は夜スリーピング・バッグに入ると、セキが出て仕方がない。それは猛烈ではあるが、いわゆる高所ゼキというものではないらしい。私の母は喘息で死んでおり、私は京都にいても、時おり寢床へ入ってから喘息めいたセキを出すことがある。それと同じようなものだ。それなのに私はがんばってタバコをやめようとしなない。ばかげた不節制と思ったが、きょうのように一日仕事もなくじっとしていると、自分のあり方が自然現象に近づくような気がする。タバコとヒゲそりは絶対やめまい。

C1では、四人用のテントに八人すし詰めになって、談笑の一日を送ったようだ。「ポコ(平井の愛称)と恋愛」というのが主題だったらいい。

七月十七日

明け方、からだが何かほっこりと包まれたような、よい感じがする。目がはっきり覚めてみると、テントに雪が積っているのだ。一〇センチあまり。「望嫁亭」が無慚につぶれている。あとのテントも危い。大尉のテントへ行つて、雪でテントがつぶれた、といつて起すと、彼はしばらくしてノッ

ソリ写真機を下げて出てきた。ちよつと腹が立つ。コックとベアラーが出てきたので、手まねでテントにたまった雪を落させ、「望嫁亭」の建てなおしをさせる。

今川の手紙を持って、ポーターが三人戻ってきた。

「天候の悪変に鑑み、先のラッシュ・タクティクスに代えるに正攻法的持久戦態勢をもつてすることとし、C1以上の食糧補給のため、今朝シュクール他二名のポーターをB・Cに降ろします。」

明朝シュクール(赤シャツ)にはカンパン二〇食分、 $\alpha$ ライス四〇食分、ピース一箱(望嫁亭の中央ワイヤー・バンド・ボックス列の一番奥のものの中にある筈です)、小麦粉(分量はシュクールの任意にしてください)を荷物としてあてがひ、他の二名には黄色の食料箱二箇ずつ、どれでも結構ですから、お渡し下さい。荷物引渡しに際しては、大尉の助力を求めて勿論結構に存じます。

本日C2への道つけに七時一寸過ぎ、私を除いて加藤副隊長以下全員出発。ポーター六人は一四、五キロの荷を背負つて後を追いました。私は本日C1にてテントの整備です。

まずは取急ぎお願い旁々近況連絡。(A・M・七・四七)

C1から見たときは、アイス・ドームの根もとまで、まっすぐに登れそうだったが、そう簡単で

はなかった。プラトリーを過ぎると、たちまちまたセラックの迷路に入る。B・CとC1との間ほど急傾斜ではなく、またそれほど荒れてもないが、その代りセラックもクレバスも格段に巨大となり、その一つ一つを乗り越すのに非常な時間と労力を要する。きのうの雪で、前につけた偵察路はすっかり埋まり、ラッセルは膝までもぐる。若い隊員が先頭に立って精力的に進路をひらいて行くが、一向に高度は上らず、アイス・ドームからは遠ざかる。五八〇〇メートルのあたりで、やっとセラック群を脱してみると、彼らはバルトロ・カンリの真下をコンダス・サドルに向っているのであった。いつしか左に流されていたのだ。B・Cからの観察では、アイス・フォールを乗り切れば、分水稜線に出られるものと見ていたが、プラトリーから奥が意外に内ふところが広く、氷河は奥深かった。最初に分水稜線と思っただのは、中間の凸起にすぎなかった。

昼ごろまた雪となったので、彼らは五八〇〇メートル付近にデポを作り、約一〇〇キロの荷をそこに置いて、C1に帰った、と報じてきた。

「その夜のC1は全くユウウツな雰囲気であった」と加藤はノートに書いている。「ルートは横へズれてしまい。高度はさっぱり上らない。ポーターたちの輸送力は隊員より低く、すでに毎日からの故障をいいたて、計画を狂わせている。天候はいよいよ悪化のきざしを見せてきた。しかし、さいわいなことに隊員はみな元気で、まだ高所影響をうったえる者は一人もない。マナスル、アンナプルナ、スワートへ行つた者は、その経験がまだからだにきいているのかもしれないが、他のは

じめての隊員は、何ともないのがむしろ不思議だ。マナスルでもアンナプルナでも、五〇〇〇メートル付近で、隊員は多少とも頭痛、むかつきなどをうったえた。私はB・C付近で第一回、六〇〇〇メートル付近で第二回の高山病症状が現われるのでないか、と考えていた。B・Cの場合は休養がとれるが、あとの場合、うっかりすると隊の壊滅を招くおそれがある。六〇〇〇メートル付近をC2の予定地とし、そこまでは力攻めで一気に乗り切り、そのあと一たんB・Cに下ってから攻撃に移る作戦を持っていた。ところがバルトロ氷河をゆっくり登ってきたことがきいたのか、C2まで何の影響も出ていない。ともかくC2を建設し、そこへの荷揚げが完了するまで、あと数日を要するにせよ、力攻めをゆるめることはできない。」

ベース・キャンプでは午後日射が強く、朝の雪は大かた消えてしまった。便所は、私たちのテントから少し離れたところに、キャンパス・シートで囲ってつくり、狭いクレバスをまたいで用を足すようにこしらえてある。けき雪を踏みわけてそこまで行くのをサボって、近くですませた。大きなのが露出してきて苦笑する。

七月十八日

快晴。昨夜の天気予報は終日雪というのであったが、助かった。

きのう今川が注文してきた品を持たせて、ポーター三人を朝六時に出発さす。道がよくなったの

か、それとも彼らは高所が嫌いで、B・C住いが大好きなせいとか、ピッチをよほど上げたと思えて、正午にははや帰ってきた。

「今川より桑原隊長へ

ポーター三名、九時十分C1入りしました。早朝のポーター送り出し、大変恐縮に存じております。

明朝も今朝と同じ要領で、同じ三名を送り出して下さい。そのさい黄色の食料箱の他に魔法瓶（望瞭亭中の中央列のワイヤー・バンド・ボックスで、コック用テント側から二、三番目のものの中にあるスベアー全部）、ラジウスの側面カバー（どこにあるのか、はっきりした事は私たちにも分らぬので誠に恐縮に存じますが、このカバーがないと兎角スベアの火が風で消え易いので、一つでも二つでも、見付かり次第お送り下さい）、大型リュック二、三個（キスリングの袋の中に入れて、ポーター用テントの前か、隊員用大テントの前に、置かれてあるとの事です）、大ブリキ缶（コック手製のビスケットを入れて望瞭亭の一隅に置いてあるもの。雪を入れて日なたに置き、水を作るのに必要とします）、重ね重ね勝手なお願いを致しますが、何卒宜敷くお願い申し上げます。（A・M・九・三五記）

追伸 本日トランジスター・ラジオを持参させます。大変遅くなつて恐縮に存じております。バッテリーは新しいのと取り代えた許りです。十二分にお使い下さい。

草々」

上ではC2の建設を急ぎ、昼すぎ五九〇〇メートル付近に、テントをたてた。高村、芳賀、岩坪の三人は、前進ルート偵察のため、そこに泊る。三人は一樣に軽い頭痛がするようだが、新グレランがよくきいたと報じてきた。この辺からそれそろ高所影響が出てくるのでないか。

帰ってきたポーターたちは、手まねで、からだの調子が悪いので、薬をくれという。彼らは薬が大好きなのである。アスピリンを与えたが、念のために検温器を出してはからせると、全部平熱だった。もつとも、ちゃんと挟んでいたのかどうか怪しいが。

七月十九日

昨夜からの雪で、けさテントはまた雪におおわれている。しかし一昨日ほど多くない。四センチくらい。

ポーターたちは、からだがかげばっている上に、雪が積つたので、C1へはとても出かけられないという。C1からも吹雪で一日休養、と電話してきたので、休養させる。

C2の若い三人は元氣らしく、ライス・カレーがとてもおいしいです、といってくる。吹雪のテントの中で、朝から晩まで食事に専念しているらしい。このクリーム・カレーの大嫌いな加藤は、いつもひやかすが、うまいと思つて食べていれば、それでいいのだ。

きょうは無電の定時連絡もないので、退屈する。退屈といえは毎日退屈ともいえるのだが。ここにはワジー大尉とコックとその助手(ベアラ)だけだ。私の話を通じるのは大尉だけ、それも気軽にやま話がはずむほどの英語の実力がない。一、二回イスラム問答をやってみた。「片手にコーラン、片手に剣」という見方が広がりすぎたが、それはデマで、イスラムは少しの侵略的意図ももたないのだ、と大尉は力説した。過去と現在とにいささか混同があるのでないか。

彼は日本を高く評価している。それは他のアジア諸国の人々と共通で、チー・セレモニーといったことのほか、日本文化にとくに深い知識があるわけではない。出発前、英語で書いた日本語入門を至急送ってくれ、勉強しておくとのことであったが、勉強はしてなかった。第一その本をここへ持ってきていない。日本を評価するのは、明治維新以来短期間に西洋文明をたくみに移入して、近代国家になったという点につきる。つまり文化ではなく文明を買っているのだ。こういう人々に、日本をモデルにするなら、軍備だけでなく普通教育を至急に普及することの必要を説くのはよいが、日本の近代化はできそこないだ、などと謙遜するほどトボケタことはなからう。彼らのところでやれば、もっとできそこなう(西洋的正統的でなくなる)にきまっているのだ。

大ざっぱな議論も気が進まぬので、結局達意のぶつきらぼうのセンチンスを一日に二、三〇いうのが関の山となる。食事がすんで、テントへ帰って休息しましょうかね、という、必ず、それはいいアイデアだと答える。そして彼はテントで、ヘミングウェイの『武器よさらば』を読んでいる。

ポーターやコックに何かを命じようとすると、昼寝をしている大尉を起して、通訳を頼まなければならない。ベアラはウルド語も知らぬので、これに用を命ずるときは、コックがもう一人立ち会って、バルチスタン語に反訳しなければならぬ。めんどくさいから、「タンダ・パニ(水)」、「ガリン・パニ(湯)」、「カナ(めし)」などという単語をぶつつける以外、大ていのは自分でやってしまうことになる。

七月二十日

快晴。けさの温度マイナス九度。

荷揚げに行ったポーター三人が加藤の手紙を持って帰った。

「天候不良とC2の予定地チゴリザ・ザッテルの意外の遠さのため、当初のラッシュ・タクテックを改め正攻法としました。そのためC4を建てる事となりました。

本日、藤平、脇坂、中島、平井、山口がC2に登りました。一昨日C2に登った若手、芳賀、高村、岩坪の三名は現在の処、一応登頂メンバーより除外し、C4を建てるまでに使い潰し、本日登った者の内、藤平、脇坂、中島、平井の内より登頂メンバー二名を選ぶ考えです。そのため若手三名に登頂準備のため可哀想ですが一杯に働いてもらい、後の四名をあくまで温存したいと

思っています。若手がこの試練に耐えぬけば、登頂隊は三名になるかも知れません。山口はC2で連絡に使い、今川君はC1のキーパーとなつてもらいます。小生はC3が建てられたら、C2に登り、最終はC3で指揮をとるつもりです。

問題は食糧ですから、小生、今川、潮田はC2以上の食糧をなるべく食わぬため、適当の時期までC1で待機し、ポーターもC2以上には四名以上は登らせぬことにしました。C2が完全に整備され、C3が建てられるまでは、決定的な作戦はたてられません。天候さえ続けば明後日で登頂の準備を終わりたいと考えています。準備完了後一日休養して、C3より第一隊はスパートすることになるでしょう。即ち、登頂は二十五日前後と思います。

ベースキャンプの一人住いも退屈でしょう。今しばらく御辛抱願います。

#### 第二芸術御紹介

ラディウスの音を見つめる雪の宵

真夏にして真冬の途や氷河ゆく

セラックの陰にいて汗涼し

七月三十日 泰安

手紙のとおり、主力はこの日C2に入った。高村ら三人は、アイス・ドームのすそまで偵察に出

て引き返した、と通報してきた。

キャンプ三つでダッシュするという方法は不可能になつてきた。C4を作る正攻法に切替えたのである。

出発前、私はひろ子夫人から頼まれた。泰安は隊長のお相手にベース・キャンプにとめておいて下さい。そうは行きませんが、と答えておいたが、泰安はC3まで登ろうとしている。奥さんもこの元気をきいたら喜ぶだろう。彼に手紙をかく。第二芸術は粗製濫造で行くべし。咳こんで隣を見れば無住也。大氷河吸い消されたる夜半の咳。寝袋で無電接受の翁かな。クレバスの糞のたまりや山十日。わが糞かけさ深雪のありどころ。等々。

七月二十一日

快晴。C2への輸送は休みなく続けられる。一方、藤平、脇坂、平井は、C2から広い雪原を進み、アイス・ドームに近づく。昼前には、ドームから雪原につづく雪の稜線の末端に着いた。高度約六四〇〇メートル。ここがアブルツチ公のドームの南側を迂回するルートと、ブルーが取ったドームの上部を高くまくルートの分岐点らしい。藤平はここをデボ（C3デボと呼ぶ。後にC3となるので以下C3とかく）として、さらに強引に雪稜をよじ、ブルー・ルートへと向つた。

この稜線は、五〇度ちかくの急斜面の登攀のち、鋭いナイフ・エッジに出て、アイス・ドーム

の肩へとつづく。藤平はその肩のところにキャンプをたて、直ちに頂上にダッシュしたいという。加藤は六四〇〇メートルのデポをC3として、アブルッチとプールの両方のルートをもう少し偵察してからにしたい、と主張する。彼らは無電で激論と喋り合っている。それが私の無電に、そのまま傍受される。天候悪化のきざしがあるので、藤平の主張どおり六七〇〇に一本うキャンプはたてるが、ルートの最終的決定は、加藤がC2に上ったうえで、ということにして、藤平隊は標高差八〇〇メートル、長距離の上り下りの大苦闘を終えて、日没C2に戻った。彼らがドームのわき、いわゆるヌノビキ尾根を上下するのが、私の双眼鏡にはっきり映った。

七月二十二日

快晴。やむを得なかったとはいえ、C1からのルートが左へ左へと流され、C2からC3へのルートはいわば逆方向になり、C1からC3までは、三角形の二辺を進むことになったのは、攻撃路として大へん不利であった。加藤は「チョゴリザをやったら、あとでバルトロ・カンリに登るのに便利でよろしい」などといっているが、彼はただそう言っているだけで、その言葉には焦躁を感じさせるものがあった。

藤平は急に攻撃をかけようという作戦に出ている。この日、脇坂、高村、芳賀は、二人のポーターをつれて六七〇〇のところにテントを設営し、そこに泊まる。山口、中島、岩坪は、そこまで荷

揚げの往復。きのう登頂隊員と決定した藤平、平井は六四〇〇のデポまで荷揚げ。そして加藤、今川もC2に移動した。

この朝、脇坂隊が、深い雪とヒドン・クレバスに悩まされながら、三〇〇メートルの雪の急斜面をよじ、まさにアイス・ドームの肩に達したとき、彼らはそこに半ば雪におおわれた一つのテントを発見した。ヘルマン・プールの最後のテントだ。一年の風雪にさらされ、茶色の生地が桃色がかつた灰色に色あせているが、まるできのう建てたかのようにしっかりと建っている。一瞬、だれも近づこうとするものはない。不気味な厳肅な空気。三人は静かに黙祷を捧げ、この超人的な登山家の冥福を祈って傍を離れた。直ちに発せられた無電で、この知らせを聞いた私も、B・Cで深い感動的な一瞬を持った。

午後はやく登り着いた加藤と、デポから早く戻った藤平を中心に、C2で攻撃ルートの最終的検討がなされた。藤平はヘルマン・プールといえども人の子、よもや鬼神ではあるまい、最後のテントによってそのルートが確認された以上、こちらも同じ条件でやってみたい、というのである。平井は同調する。しかし、加藤はまだ不安を消せなかった。高度馴化は順調にいっているのか。それに五九〇〇のC2からいきなり六七〇〇をC3とするのは、その間に危険な約三〇〇メートルの急峻な登攀があって、体力の消耗を強いる以上、いささかムリがあるのではないか。それにアイス・ドームもここから見るとひどく痩せていて、そのトラバースは急である。これを通してサポートや

輸送が十分に行われうるだろうか。万一急激な高所影響を受ける者があつたさい、安全に収容できるだろうか。結局、次の条件づきで、攻撃路はブルー・ルートを探ることに決定した。

六四〇〇のデボをC3とし、これを前進ベース・キャンプとすること(その建設は加藤、今川、潮田が当る)。主力隊は六七〇〇のドームの肩にC4をたて、さらにドームと主峰の中間のどこかに、いま一つキャンプを作り、そこから頂上を攻撃すること。攻撃隊員は先に決めたとおり藤平、平井。攻撃日は二十六日と予定し、これに失敗した場合は、C3まで下ること。

午後、イタリア隊のポスト・ランナー(飛脚)二人が手紙を持って立ちよつてくれた。イタリア隊は裕福で、十日に一回、飛脚をスカルドとの間に走らせている。一般にヨーロッパ人というのは手紙なしでは暮らせぬものようだ。日本隊員ももちろん手紙がくれれば大喜びだが、それが届かなければ意気沮喪するというようなところは少しもない。それに第一こちらはそんな予算の余裕がない。ただスカルドの郵便局長が、私たち宛の手紙をも飛脚に持たせてしまうので、彼らはそれを持ってき、また私たちの通信を運び下ろしてくれるのだ。待たせておいて、急いで手紙を二枚書く。いかに便乗といつても、少しのチップはやらねばなるまい。大尉と相談して、二〇ルビー与えることにする。足りないという顔をしたが、大尉がそれで納得させた。ぼんやりしていて、私は会計から一ルビーの金も預つてないことを、このとき覚つた。二〇ルビーは大尉に立て替えてもらったのだ。

きょうも山稜に往來の隊員の姿がくつきり見える。彼らに、いまきた手紙をできるだけ早く届けてやりたい。

七月二十三日

いよいよ第一回攻撃を目ざして、藤平、平井は、きょうC2からC4へ移動し、そこに泊つた。昨夜C4に一泊したサポーター隊は、難路をC3まで下り、また登つて荷揚げ。

彼らに同行したイスマイルとハサンの二人は完全に高山病にやられ、C4のテントにつくと、そこからもう動くこともできなかつた。この二人は、弱いポーターたちの中で最も信頼のおけるものであつたが、それが倒れたのだ。チョビヒゲや大シユクールなどはとくにまいって、もっぱらB・C住まい。このあいだ、シユクールが手まねで血を吐いたという。無電で中島ドクターに連絡すると、咯血でしょうか、吐血でしょうか、という。それは手まねではむづかしい。それでもおよその意味がわかつたのか、けさ石の上にベトリ赤い血がついたのを、起きがけの私の眼の前につきつけた。どうやら咯血らしい。ただささえ食欲の減退しかけている私は、いささかまいつた。(あとでドクターが診察すると、まさに結核。こういうポーターをつれてきたのは失敗だつた。スカルドの病院では、P・Aの命令によつて、ポーター全員をレントゲン検査してくれたはずだが。)

ポーターの輸送力には、もう私たちはあまり期待をかけていなかった。しかし、この二人の発病

と同時に、高村の調子が少し悪く、脇坂、芳賀にも疲労が見える、という通報は、私を暗い気持ちにした。

七月二十四日

B・Cは晴。C2は晴れたり曇ったり。C4は曇り、のちガスと小雪。

あさ十時の交信には、C4の平井が出た。高村が今朝から病状悪化して意識を失い、ウワゴトをいう。「憂慮すべき状態です」という。私はいきなり、何をボヤボヤしているのか。早く下へおろすようにしろ。ドクターを急行させろ、とがなった。このとき中島は加藤、山口らとともに、今までたんなるデポであった六四〇〇メートルの地点に、テントをはって、しっかりしたC3とするために、C2から荷揚げの途中だった。同時に、今日はカメラマンの撮影に協力することになっていたので、それは中止して、ドクターは山口とともにC4へ急行した。潮田、今川は医療用酸素をとりてC2に取って帰した。

小雪のちらつく中をC4にたどりついたドクターの報告では、高村はウワゴトをいったあと、コンコンとねむり、今は言葉もハッキリし、決して危険といった病状ではない。注射をして、これからC3へ下ろします、という。私も加藤も「憂慮すべき」という形容詞を字義どおり深刻にうけとりすぎたのだ。平井はどうやら「大分ひどくやられました」というほどの意味に使ったらしい。あ

とで叱った。高村は二人にまもられて、夕刻C3へゆるゆる下った。足が少しフラつくが、気持はシッカリしていて、悪場もことなく通過した。一昨日から同じC4でへばっているポーターも下ろそうとしたが、テントから二〇メートルほどで、クタクタとくずれ、仕方なかったという。

高村の急変はケロシン・ガスの中毒だったらしい。いささか高所障害が出ているところをやられたのだ。キマジメな彼は、いつも人のいやがる仕事を買って出て、よく働く。今朝も、ひとを起さず、点火の悪いラデュースと格闘しているうちに、生ガスをしたたか吸ってしまったらしい。高所におけるケロシン・ラデュースの弱点は、マナスル以来わかっていたので、今回はマカルーのフランス隊にしろ、プロパン・ガスを併用した。しかし日本隊としては、ヒマラヤでの初使用だけに、B・C以上を全部これにする気にならなかったのだ。これは操作が簡単で、臭気もなく、よく燃える。ただボンベの風袋が重く、ゲージがないのが欠点だ。有効なプロパンを最後のために節約すべく、C4にはケロシンをもって行っていたのである。

この日、一方では、攻撃準備が可能なかぎり進められた。脇坂、芳賀が、C4からC5へのルート偵察と荷揚げを試みた。しかし、天候が悪化したので、二〇キロの荷を途中でデポして引返した。山口は七時前になってから、疲労をおしてフセンとC2まで下った。フセンは全くへばってしまったので、空身なのだが、荷をかついでいる山口によりかかるようにして夜道をやっとC2にたどりついた。ポーターとサーブの役割りが逆転したのである。

七月二十五日

藤平、平井は、頂上攻撃を敢行すべき最後のキャンプ建設に向う。彼らは脇坂、芳賀のサポート隊（荷物各々二〇キロ）とともに、まずアイス・ドームを二〇〇メートルほど登り、左へトラバースした。ここは五〇度ちかい急斜面で雪崩の危険は十分ある。彼らは慎重に進んだが、サポート隊は連日の過労で、七〇〇メートル付近の岩稜に達したころ、もう進めなくなつた。脇坂は朝から食欲なく、何もたべていないのだった。登頂隊は、そこに荷をおいて、さらに偵察をこころみだが、雪に視界をさえぎられ、四人とも荷をデポしてC4にもどつた。

午後四時の受信に、藤平曰く、サポート隊疲労の極に達し、C5建設の見込みなし。よつて明朝平井と二人、C4から酸素を使用して、ダッシュしたし。コルまで四時間、コルから頂上まで六時間、帰り六時間、合計十六時間の予定。加藤もこれを諒承し、決定する。私はそこに悲壮なるものを感じ、ただ明日の好天を祈るのみであつた。

この日、ドクターはC4でべつたポーター二人を下ろしに、早朝C3を出て、往復した。雪の急斜面を三人が下るのが双眼鏡にみえる。どれが中島かまでは判然としないが、二人の病人が滑り出しはせぬか、ヒヤヒヤしてその通過をまつ。それがドクターとしての職分ではあるが、毎日あの急斜面を上り下りする彼の姿に、私は感動をおぼえる。

荷揚げは山口の指揮で着々とすめられ、この日C3は完成された。

私はいつしか全く咳が出なくなっていることに気がついた。そして頭が少しよく働くようになった気がする。つまりテントで色々空想にふけるのだが、それが京都にいるときとさほど劣らぬ連想活潑性を示すのである。気分も爽快だ。

バルトロ・カンリの断崖から終日雪崩の音やまず。

七月二十六日

上は雲のち雪。B・Cは午後から細雪。

六時の交信によれば、藤平、平井は四時三〇分、酸素マスクをつけて、C4を出発した。しかし、八時の無電で、彼らが途中から引返し、七時半にキャンプに帰着したことがわかつた。天候悪化と、藤平の酸素マスクが不調だったためである。

この八時の交信で、加藤は陣容をたてなおすのため、C4の藤平、平井、脇坂、芳賀はただちにC3に下り、C2にいる隊員も全部C3に上り、協議の上、今後の方針を決定したい、というのになし、藤平らはこのままの体制で好天をまつて、もう一度攻撃に出たい、といい、激論しているのが、B・Cではつきり傍受できる。

——それじゃ、もう十五分考えさせて下さい。十五分後にレンラクします。

— そんなこというな。ひとまず下りてこい。話はここでゆっくり聞こう。

— いいか。下りるんだよ。脇坂はどうだ。弱っているんじゃないか。

— 彼は相まいいってますがね。……じゃ、ともかく下ります。

— わかった、わかった。脇坂は下ろさなくちゃいかん。C3でよく話し合ってくれ。

— そういつて私は無電のスイッチをきってしまった。(あとで私がかおこっていたのじゃないか、と

上で心配したそうである。京都にいても、私の電話はソッケナイといわれることがある。内容はわかっている。

疲れている隊員に同じことを二度くりかえさせる気はしない。そして、さぞ辛いことだろう、もう少しガンばってくれ、などともいいたくなかったのだ。しかし、不必要な心配をかけたとしたら、私も反省を要するだろう。)

脇坂がドクターに附添われてC2まで下った、という報知を、私は痛ましい思いなしに聞くことはできなかった。彼は今度の遠征計画のために一昨年かから執拗にがんばりつづけてきた。幾度か流産の危機にのぞみながら、決して希望をすてず、若手と先輩の間をよく連絡して今日あらしめたといつてよい。キャラバンに入ってから藤平とともに先頭にたつて困難を打開してきた。その攻撃主力の一人が戦列をはなれようとしている。元気そのものようだった高村もC2で休養中。天候もくずれ勝ち。前途多難を思わせる。

## B・C 孤立そして勝報

B・C設営以來ちようど二十日目。

今日はC3で全員休養のはず。そのためか、朝八時の交信不通。午後二時のときは、はじめC2・C3間の交信が断片的に入ったが、当方へはいくら呼んでも応答なく、やがて全く不通となつてしまった。これでは今後の攻撃プランもわからず、ツンボさじきにおかれることになる。大尉もあわて、一しよにさがして、別の電池を見つけたが、入れかえてもダメ。以後B・Cは全く孤立することとなる。使者を上げようにも、病身のシェクル一人では、いかんともしがたい。

C4へ往復する人影が見える。誰々が、何のために動いているのか、わからない。

七月二十七日

七月二十八日

終日まさに何のすることもなし。

ねころんで『白痴』を読了した。B・C生活は単純素朴そのものだろうから、少し異常あるいは深刻なものを、と思ってもって来たのだが、大して面白くなかった。前はもつと引入られたのに、もつともそれは、ずい分昔のことだが、あの饒舌が何だか空々しく感じられ、じれったい。

大尉は無電交信が杜絶して以来、ひどくめいっした顔つきをしている。交信には時として彼も出て、英語で短いあいさつをしたこともあるが、私は交信後かならず、かいつまんで隊員の行動と今後の方針を説明していたのである。彼と会話する機会は一そう少なくなった。

私は孤独なのか、とテントに寝ころびながら考えてみた。どうもそうではなさそうだ。孤独とは、多数の人間社会の中にいて、コミュニケーションが可能な状態にありながら、デイス・コミュニケーションに陥った心理状態をさすもの、パリの真中で暮らしているルソー、というのがその典型的なイメージだろう。都会なしに孤独という感情は成立すまい。

ポードレルは《Anywhere out of the world》(「どこにせよ世界の外に」)と歌った。彼はこういうところへ来たがっただろうか。いな。ここは「世界の果て」だが「外」ではない。彼はバリで誠実に死の思想にとらえられていたのだ。世界の極限、つまり一ばん生命力を要するところだ。

私はいま物理的には大自然の中に孤立している。しかし、無電で仲間と日本語をしゃべり、その内容はほとんど感情抜きの実践行動のことばかりだ。そのうえC1とC2は見えないが、C3から

C4へ進むルートは、ここから見るドームの左手のスカイ・ラインにくつきり見え、双眼鏡を使うと、いま聞いた交信どおり仲間が上り下りしている。これでは孤独になりようがない。無電機が故障してからは、つんば棧敷に置かれたようなもので、前進キャンプの行動はさっぱりわからない。しかしスカイ・ラインの人影だけは好天の日には鮮やかに見える。コミュニケーション杜絶とはまことに困った状況だが、これも孤独の心境とは異質なものだ。私はB・Cに一人ぼっちの生活をしている。楽しいなどとはもちろんいえぬが、孤独に悩むというのではない。強烈酷薄な自然の中では、孤独といった近代文化的な心理は起りにくいのか、それとも高度の影響を受けて、いつしか私の神経は鈍感になったのか。

夕暮、モレーンの上を一時間ばかり散歩する。上の仲間のことか頭にうかぶが、私がなにを考えたも、何の効果もない、と思うと、あまり気にならなくなってくる。時おり降雪はあっても、このあたり残雪はひどくへってしまった。そしてモレーンの両側にたまった水は湖水のように大きく、青々としてきた。

七月二十九日

晴。あさ九時、山稜をC4に向かう人影見ゆ。ひるまえ今川の手紙をもって、ポーターが下ってきた。

「シユクールとグラーム・フセインをB・Cに帰します。兩人の到着の翌日直ちに、マッチ小箱六〇ヶ並に粉乳五缶（いずれも望郷亭中のワイヤーボックスの中にあります）を持たせて、C1迄上げて下さい。C1からC3への運搬にはイスマイルとハサンが従事します。

C2には今脇坂、高村、今川が居ります。高村はほぼ平状に戻り、数日後にはサポート隊に加わる事を得るでしょうが、脇坂は今尚疲労甚だしく、食欲も不振で、近日内恢復の見込みは残念乍らありません。しかし、もう山は越し恢復に向う一方ですから御休心下さい。今川はこれ迄通りの調子です。

一九五八年七月二十八日 於C2 今川

追伸 お送りの米と乾パン、本日確かにお受け取りし、その半分以上をC3の下のデポ地に届けさせました。ありがとうございます。」

注文の品をととのえていると、誰か下りてくる、とポーターが知らせてくれた。連中の目のよいのには毎度おどろく。やがて高村とポーター三人とわかる。

元氣そらな高村を見て、うれしかった。あの無電のときは、どうなることか、と思ったのだ。もちろん疲労のあとはあるが、「ほぼ平状に戻り」という今川の表現にいつわりはない。せきこんでたずねる大尉と私に、彼は上の様子を知らせる。C5もきょうあたりできるはずで、頂上攻撃はも

うすぐ、天気さえよければ、明日にでもやる。加藤らがヘルマン・ブルーのテントで遺品を見つけたらしい。上はみんな元氣だというが、一ばん弱ったはずの高村がこれだから、大したへばり方でもないだろう。少し心配しすぎたような気がしてくる。

彼は、せっかくここまできて、頂上攻撃のサポートができぬのは残念だから、明日帰らせて下さい、もう間に合はんかも知れませんが、という。それはもつともな考えだが、からだは大丈夫か、というと絶対大丈夫、と答える。

——それじゃ、そうしたらいい。しかし、休養に下りてきたんだから、きょうはもう話はやめて、自分のテントでゆっくり寝ろ。

ところが小まめな彼は、ちっともじっとしていない。荷物の整理をしたり、コックのテントへ行ったりきたり。

——今晚はゴチソウを作しましょう。冷やしラーメン、これは上でぼくが作って加藤さんらに大好評だったんです。

大尉は異教徒の手料理にもともと興味はない。私も腹の調子が思わしくないので、用心して余りくわず、わざわざきれいな残雪を取り行ってウント冷やしたのを、またバーナーで煮たりした。

本人だけが、うまいうまい、といってモリモリ食べている。私はおしゃべりが大好物。それを満足させる機会を全くうばわれている。しかし、まだ戦闘中だ。食事がすむと高村をテントに追いやる。

(加藤らが、一昨二十七日、ヘルマン・プールのテントを整理したときのノートを、ここに挿入しておく。)

148

「胸をつくような急斜面に二時間の苦闘の後、ドームの肩に出た。C4は目の前にある。雪は小やみなく降っており、視界はまったくなくなった。偵察は中止して、ヘルマン・プールのテントの後始末にかかる。

一年間、氷雪の中に半ば埋れたままのテント。まだ隊員は誰も手をふれていない。

前に立ったが、中にプールが眠っているような気がしてならない。落ちた氷壁から這い上って、テントに辿りつき、そこに眠っていたらどうしよう。遺体を下ろすべきか、遺髪をとるか。ついテントを開く手がにぶる。

テントの型はわれわれのと同じ吊下げ式のウインパーで、入口も吹流しの絞り口である。布地はグレンフェル地のような上質の木綿らしく、化繊ではない。やっとあけてみると、下は一面の蒼氷で、青いスリーピング・バッグがその中に氷づけになっている。そしてまるで人が入っているように、ふくらんでいるではないか。ドキッとして思わず手をとめた。氷ついていて、どうしても中に入れない。テントごと掘り出そうとしても、氷が固くてとても不可能なので、片面を切り裂くことにした。

スリーピング・バッグの胸の上には、黒い小さなノートが二冊のっている。走り書きのドイツ

字でなかなか判読できないが、一冊はブロード・ピークの登頂日記。登頂の翌日で日記は終わった。これによると彼らはブロード・ピークをまるで駆け登ったという感じだ。今さらながら彼の超人ぶりには驚くほかはない。他のノートは、パッキング・リストらしいが、ほとんどが符号で解らない。ともにヘルマン・プールと力強い字で署名がしてあった。

その他には、三食分くらいの乾パン、サーディンの缶一個、ポリエチレンのビンに入った蜂蜜少量、防暑帽、小さな空缶に入った化粧品とロールフィルム一本、食器、ガソリン・バーナー、これだけが全部である。同行したディームベルガーがかつぎ下したのであるが、実に簡単な装備しか残されていなかった。しかし、ディームベルガーもそんなにかつぎ下せる筈がない。恐らく、このほかはプールが攻撃にさいして背負って行ったものだけで、まったくの軽装備で登攀を敢行したのではなからうか。ここにプール一流の登山のやり方がうかがわれる。

それにもまして感心したことは、テント内が実にきれいに整理されていることだった。こうしたアクシデントに、われわれがもし遭遇したとしたら、ここまでちゃんとできたろうか。傷心の身でこんなきれいに片付けていったディームベルガーの人柄がしのばれる。さすがに彼もオーストリア隊の豪の者である。

かねて用意してきた聖柳の杖で十字架を作り、ささやかな慰霊祭を行ったのは、すでに雪空もたそがれ近い頃であった。(加藤泰安)

149

この聖柳の杖というのは、バルドマルで加藤が、キャンプわきのヤナギの枝を切って、私のと自家用と二本の軽い杖をつくった、それである。私たちはそれをB・Cまで使った。テントのことで考えなかったが、主稜のプールの落ちた地点に、これを組合せた十字架を立てよう、と上にもって行かせたものである。

七月三十日

好天気。早朝、高村はポーター五人をつれてC2に向かった。すっかり疲労は恢復した、という。モレーンの上を進む足どりもたしかだ。それにしても彼はなぜC2から、たった一泊のためにB・Cまで下りてきたのか。一〇〇〇メートルを一度下るといことが、どれだけ効果があるのだろうか。きのう彼は私にいった。

——このあいだ、先生なにか機嫌が悪くて、怒ってられたんと、ちがいますか。無電のとき、あんまり話をされないし、上で大分心配してたんです。

思いがけない質問に、こちらが驚いた。そんなことは全然ない。ただ要件以外に、そうべたべたしゃべっても仕方がない、と思っただけだ。しかし、心配をかけたとしたら、すまん。そう答える、と、彼は安心して、そうですね、先生は元氣そうだ、といった。あまり私を一人ぼっちにしておいたので、参っていはしないか、加藤の指金で高村が好意の偵察にきてくれたのかも知れない。

きょうは天気もよい。攻撃を敢行したかも知れない。コックらに山稜に気をつけるように命じ、大尉と私は時々双眼鏡で見えるのだが、何も見えない。一度、大尉が、高いところまで登った、というので見ると、それは主稜線に露出した岩頭である。彼は岩ではない、隊員だ、としばらくがんばったが、いつまでも動かぬので、がっかりしたようだ。どうしたのか。C5の建設がまだうまく行かぬのかも知れない。あきらめて本でも読もう。

無人島へ行くとしたら、どんな本をもって行くか。そういうアンケートがときどきあり、バカバカしくて答える気もなかったが、こんどはB・Cで一人ぼっちになる。何にしようか、と少し考えて、『白痴』と『芭蕉俳句集』、それに手ごろな中国古文選という意味で、小川環樹・西田太郎著の『漢文入門』の三冊にした。西洋、日本、中国というわけだ。

芭蕉の俳句集は、春の部から一句一句読んで行った。暗記している句が出てくると、ふと中学の同窓生に出会ったような懐かしい嬉しさを感じるが、じゃ、これから一ぱい飲みに行こうか、というほどの気持にはならない。そして今まで知らなかった句で感動するのが少なくない。

ゆく春を近江の人とおしみけり

これは口ずさんで口調がよい。母音連続のせいではなからうか。UUAUO・OOIOIOO・OIEIEI。そして春がすみ、水蒸気、湖水、近江、なかなかよろしいな、とまでは思うが、しみじみと日本をなつかしむというまではいきかねる。日本という地球上の一地方の特殊性にあまりに

も強く結びついていて、とうてい回教徒の大尉さんに説明してやろうという気が起らない。私があり  
まり自分の食物の料理に熱心でないという話が出たさい、「君子は庖厨を遠ざく」でうまく説明し  
たようなわけには行かないことが明らかだから。

山路きて何やらゆかしすみれ草

というのは、逢坂山の句だと思うが、すべて芭蕉の句は、標高でいくと一〇〇メートルを越えな  
い世界ばかりだ、ということを見つけた。そしてそんな発見をした自分がおかしくひとり笑った。  
ともかくこの七月にふと目を覚ますと、雪が積っており、隣りの大テントがつぶれたりしている所  
では、芭蕉の繊細さは自然の酷薄、強烈さに圧倒されてしまうような気がする。夜半用を足してテ  
ントの外へ出ると、半月と満天の星、周囲の巨峰と水河は不気味に静まりかえっており、冷たい空  
気に触れて連発する私のしわぶき、それは喘息めいて大きな咳なのだが、この大自然の中でそれが  
いかにかすかなものとして消えてしまうことか。そうしたときにふと何か感じるもの、そういうも  
のは芭蕉の中に求めてもなきそうさだ。そういう満ち足りなさを感じて、夏の部でやめた。

その点一番しつくりと来るのは、『漢文入門』の簡潔で骨格の太い中国の古文だ。私はB・Cで  
じっとしているにしても、仲間は苛酷な自然と戦っており、その状況は無電で私にも伝わる。単純  
で、しかし壮烈な自然への挑戦、それを記述するには、もちろん科学的な精密さを必要とするのだ  
が、しかしここに収められている『資治通鑑』の『赤壁之戦』や『左伝』の『晋公子重耳之亡』な

どという叙記の文体なら、その行動を巨視的にピタリと伝えうるもののような気がして、私は所  
所音読して楽しむ。遠征というような仕事は決断を必要とするが、それは感情的ではなく論理的で  
なければならぬ。ところが『説苑』からのいくつかの短文をはじめ、ここにはそれを満たすよう  
なものがある。

こうした感じ方は戦争中に、『万葉集』より『唐詩選』の方がはるかに面白い、だいいち芸術的に  
高級だ、と中国語の発音も知らずに、放言していた私の昔からの考え方のヴァリエーションにすぎ  
ぬかも知れない。

七月三十一日

快晴。朝イタリア隊のポスト・ランナーが手紙をとどけてくれた。十日に一ぺんずつ家信をうる  
とはゼイタクなことだ。待たせておいて「朝日」と自宅に短文。近藤良夫から細野重雄の急死を伝  
えてきた。あの元気な男が。暗然とする。彼は私より二級下だが、鈴鹿や笹ガ峯へよく一緒に行っ  
た。去年久しぶりに酒をのんだが。

フォスコ・マライーニ君からの英文の手紙もある。

「親愛なる桑原教授

七月七日の親切なお手紙、深謝。チヨゴリザへうまく進んでおられることと希望します。私たちは七月十五日、ガッシュヤールムIVの頂上から六〇〇フィートのところで食いとめられました。そのとき天候が変り、嵐が引きつづき起ったのです。いま私たちは第二回攻撃をはじめましたが、天候が再びじゃましないことを望んでいます！ 万事うまくゆけば、八月十日ごろ帰途につきませう。そのときあなたの方のB・Cへ立寄れるよう熱望しています。

この手紙をかくのは、あなたに大へん御面倒なことをお願いしたいからです。御存知のように、昨年偉大なオーストリアの登山家、ヘルマン・ブルルがチヨゴリザで死にました。ブルルの未亡人が、私たちの隊長カシン氏に手紙をよこし、六七〇〇メートルにある彼の小キャンプ（巻頭写真参照）に残っている、ブルル氏に属する品々を集めて欲しい、と行ってきました。その品々というのは、テント、手紙数通、写真器とフィルム若干、スリーピング・バッグです。

そこで、もし貴隊員が六七〇〇メートルの、このキャンプIIを通られたならば、これらのヘルマン・ブルルのものをまとめ、あなたのB・Cへ下ろしては頂けないでしょうか。もし、そうお願ひできるのなら、私たちの帰途、八月十日前後に、それらの品物を取りにゆき、ヨーロッパへ持参したいと思ひます。

大へん御迷惑をかけ、大いに恐縮です。しかし、ブルル夫人の心を、その不幸な夫に属する品

品のこと、安んじさせて上げることについて、私たちに進んで御協力下さるのではないかと存じます。

わが最上の敬意をもって、デハ・サヨナラ。

博士 フォスコ・マライーニ

（京大でイタリア語講師をしたことあり）

同封のバルトロ側から見たチヨゴリザ全景写真には、ブルルのルートが記入してある。五五〇〇にビヴァック、六三五〇にC1、そしてC2から七三〇〇メートルの地点まで突撃し、帰路七二〇〇のあたりから落ちてゐる。B・Cは私のいるところだが、彼はそれを五〇〇〇メートルとしてゐる。ともかく猛烈な登り方だ。ポスト・ランナーは、もうイタリア隊へは戻らずに下へ走るのだから、返事は出さないが、遺品は見つかったのだから、早く下ろすようにさせよう。

夕刻、脇坂がポーター二人をつれて下りてきた。「しばらく休ませてもらいます」という、その顔はひどく憔悴している。なぜ、もっと早く休養に下りてこなかったのか。そう思ったが、疲れている人間に文句をいう手はなからう。胃をひどくやられたらしい。胃酸過多でノルモザンばかりのんでいる。そうきくと、私も一昨日あたりから軽い胃痛がする。試みにノルモザンをのんでみると、具合がいい。同病だったのか。ともかく彼も私も食欲があまりない。

昨日の攻撃は、あき風がひどかったので取りやめになり、きょう決行中だという。天気はこんな  
にいい、成功は疑いない。

脇坂が無電の新しい電池をもってきた。入れかえてみたが、何も聞えぬ。機械そのものがダメに  
なったのか。脇坂にもよくはわからない。隊員中、どこが故障かすぐわかる者が何人いるのか、あ  
やしいものだ。(後記、このとき、上方でも無電はダメになり、交信は一切やめになっていたのだ。)

八月一日

快晴。きのうよりも一そうよい天気だ。上からのレンラクを今か今かと待つが、だれ一人下りて  
こない。どうなったのか。

一人ぼっちを辛いとは思っていない。しかし話相手のできたことは嬉しい。アイス・ドーム  
をからむC5へのルート、それからさきも、かなり悪いところらしい。天候がよければ必ず成功と  
もかぎらぬ。きなきなすることは何の益もなし。

八月二日

きょうも絶好の天気。モンズーン到来と、あわてすぎた感がある。ゆっくりやるべし。

午後、アイス・フォールを下りてくる人影。いやにテンポがおそい。双眼鏡で、やがて岩坪、芳

賀とわかる。ひどくフラフラした足どりだ。岩坪は平生から元気なときでも、ジャマクサソウな歩  
き方をする男だ。しかし、芳賀も同じ歩き方をしているでないか。脇坂が、何か食いものをこしら  
えましょうか、という。

——待てまで。あの歩き方じゃ、よほどまいり方がひどい。あれ位へげると、すぐに、ものは中  
中のどを通るまい。着いて、様子みてからでいいよ。紅茶、ミルクをうんと入れてね、その用意だ  
けしたらいい。

二人の顔を見て、私はドキッとした。顔にむくみがきて、まん円く、目がどこにあるのか、汚れ  
たお月さんのような顔だ。握手した手も、若い女の手のように円い。

——三十一日の攻撃は失敗でした。もっと上にいたかったんですが、加藤さんがB・Cへ下りろ、  
文句をいうな、というんで……

あたり前じゃないか、これを下ろさなければバカじゃないか、そう思いながら、

——まあ、テントへ入れよ。紅茶がある。

二人は、それをさもうまそうに二、三ばい飲んだ。そして

——今晚のオカズはなんです。

この分なら大丈夫だ、と私は思った。二人のもってきた加藤、藤平の手紙をよむ。

「昨七月三十一日の攻撃は藤平、平井の十八時間に及ぶ健闘も空しく失敗に終わりました。即ちC5よりコル迄が意外に悪場の連続で七時間を要し、それから後は快調であったが、時間なく、頂上直下で十六時を過ぎ、遂に引返すの止むなきに至りました。帰路彼等はC5への悪路が夜道となることを考え、C5とC4、即ちアイス・ドームの道を避け、南面を下り直接C3に二十一時到着しました。」

彼等の意見を総合しますと、現在のアイス・ドーム路は非常に危険で、ヘルマン・ブルが引返した訳がわかった程であり、この道は放棄し、遠廻りにはなるがアブルッジの路をとる方が、登路、並びにトランスポート路としても有利、確実であることに一致しました。

小生は今晝、藤平、平井が寄らずにとばしてきたC4に登り、兩名の消息を伝えると共に、C4、C5を撤収します。

今後の方針としては、現在のC3を起点とし、南面を迂廻し、C4を建設、コル付近にC5を建て、攻撃を再開したいと思います。

C4の予定地はC3よりなだらかな登りであり、クレバスもなく、人夫も充分に使えますので、小生、高村、今川、潮田がこれに当ります。その間、他の隊員はC3以下に下ろし、休養をさせます。

次期攻撃再開を四日後と予定します。攻撃隊員は現在の所、藤平、平井共に非常に元気ですか

ら、再び起用したいと思います。

以上の状況ですので小生はまだ下る事は出来そうにもありません。しかし、老体まだまだ使えそうですから御安心下さい。

隊長殿

八月一日払暁、C3にて 泰安」

「バラ・サーブ

腑甲斐ない結果に終って申訳有りません。未だ打つ手は有ると考えたので無理を止めた次第です。次回のアタックには、必ず頂上を打ち取って御目にかけます。昨日も頂上でビバークする積りなら登れましたが、ビバークの用意もなく、平井と二人で相当論議しましたが引返すことに決めました。さすがに心残りでも何回も振り返り、ぐちり乍ら降った次第です。

C5からコルの途はコル直前で猛烈に悪くなり、二人も無我夢中で突破したものの、コルから眺めて吃驚して二度と通る気が起きなくなりました。次回攻撃のルートは裏に凶示致します。」

その凶は、巻末に挿入したものと大異がないので省略するが、アイス・ドームからコルへの下りのところには「この間悪し。恰度ヨーロッパ・アルプスの写真で見ると似ています」とあり、昨夜二人の通ってきたルートには「月夜で全く気分良く、サルトロ・カンリが見え、これで頂上へ登

つていたら申分ない所で、月明星稀といたいところでした」と記入し、七〇〇メートルの無名峰(のちカベリ・ピークと命名)には「この無名峰大いに魅力あり。さながら処女の如く、真丸い真白なピーク。帰路には絶対登りたい山」とある。

これを読んで、私は安心した。これならやれそうだ。彼らは落着いている、余裕がある。岩坪、芳賀にきくと、藤平、平井はとも元氣だという。もともとからだもいいが、温存してもらっていいのだ。それにしても、岩坪、芳賀は可哀そうだった。ポーターの弱いところで、やむをえぬが、まさに使いつぶされたのだ。七月十二日にB・Cを出てから、実働十八日、とくに最後の九日間は六七〇メートル以上で休みなしに働いている。芳賀は痔を悪くしている。サボるつもりでいたのではないのに、ドクターは、そんなもの何でもない、と相手にしてくれないし、藤平からは、痔なんかはキャラバン中になっとくものだ(彼は私の持参の特効薬ですぐよくなった)と注意され、加藤からは叱られただけだ、という。

——きのうの朝は、ぼくら、C4でほんとにへばっていたんです。そこへ加藤さんがきて、すぐC5へ行け。ちよつとグズグズしてたら、こらコス芳賀、ズル五郎! っってガナるんです。

そしてやっとC5までたどりつき撤収しかけてみると、山口、中島の二人が帰ってきた。彼らは藤平、平井が別ルートから直接C3へ下りたことを知らず、いつまで待っても帰らぬ登頂隊員を案じて、夜ふけまで発光信号したり、コールをかけたりましたが、八月一日の朝も早くから、コルへの

ルートをさがしに出かけ空しく戻ってきたのだ。そして、いきなり罪もない芳賀と岩坪の二人を下りつけて文句をいった。あれもつらかった、という。

二人は実家へ帰った嫁のように、安心していろいろ打明け話をする。私は笑いながら、

——まあいいさ。みんな六〇〇〇以上に長いこといて、疲れもするし、気が立っているだけだよ。誰もコスいとか、ズルいとか、本気で思う奴はないさ。

八月三・四日

両日とも快晴無風。第二回攻撃は五日。新しい、C4・C5つくり、上は忙しく働いているのだろう。こんなにいい天気だから、それはうまく行ったに違いない。もう一日の晴天をのぞむのみだ。新しいルートはアイス・ドームの裏側だから、ここからは何も見えるはずはない。気にするよりトランプでもしようか。

トランプは、スカルドで後発隊を待つ間、連日やった。タバコ一本ずつかけて、勝者がそれを巻き上げるのだ。ワジー大尉もさそう。彼は若手が帰って大いに元氣になった。トランプも大喜びで参加。ツイ・テン・ジャックとファイヴ・ハンドレッド・ゲーム。彼はこれらを知らなかったのだが、ポーカーは強いので、たちまち覚え、よく勝つ。ではまた午後、といってやめると、昼めし後わざわざ呼びにくる。

芳賀は三日のあき、三時から八時までの間に十七回小便した。うとうとしたと思うと、行きたく

なるのだという。そして二日目には、二人ともハレが少し引いたようだ。私は芳賀がトランプでミスすると、おい、頭がボンヤリしたんじゃないか、一べん小便にいつてこい、とよくひやかした。すると彼はすなおに笑ってテントから出てゆく。行けば出るらしい。それにしても、あのハレは一たい何が原因で、どこが悪くなっているのか、研究を要する。彼らの見事な食欲には感心する。それにシゲキされて、私の食欲もどうやら恢復してきたようだ。

ココアを飲んでいるときに、岩坪が、イギリス海軍でたべるココアは、濃厚で、サジがチャンと立つくらいだと「文藝春秋」に書いてあった、と知ったかぶりをいう。もうココアはたくさん残っていない。それじゃ、いいことをしてやる、といって私はココアにカタクリコとミルクと砂糖を入れて、固いのをこしらえた。「プリティッシュ・ネーヴィー」という名がついた。中々うまくて毎日食いたくなる。いつも私がつくる。若手二人は最初うまいといっていたが、やがて甘味が足りぬとらう。

——味のことをトヤカクいうなら、棄権してくれ。

そう冗談をいったが、彼らの甘好きには驚く。うちの小学生とちつとも変わらない。私が砂糖をたくさん入れぬのは、ストックが少ないことを知って政策的にやっているのじゃない。すると趣味か。趣味の押しつけは感心せぬ。好きなだけ入れろ、というと、一、二サジ入れておいて、もう少し入らう。

それでもよろしいか、と私の顔を見る。何と可愛い若者たちだろう。

八月五日

晴。朝から山稜ばかり見ているが、何も見えない。どうしたのか。

午後、アイス・フォールを下ってくるものが一人。今川らしい。三時半着。

——やりましたよ！

予定を早め、昨日、藤平、平井が登頂に成功したというのだ。私は不意をつかれ、喜びがスラリと出てこなかった。嬉しくなるのにひまがかかった。とっさに「万歳」と叫ぶものもない。握手するうちに嬉しくなり、

——おい、みんな大テントへ行こう。乾杯だ。

ウイスキーを、まずC3から一日で飛ばしてきた今川につぐ。C3から、二人の登ってゆくのが望遠レンズでよく見え、頂上に立ったところもハッキリわかった。それを潮田がすっかり映画にうつした、という。それだけ知らせにきたので、詳細は不明だが、加藤の手紙がある。

「隊長万歳!! A A C K万歳!!」

本四日十六時三十分、藤平、平井両隊員は見事チョゴリザ頂上に立ちました。隊員全員及全A

A・C・Kと共に悦びに耐えません。

しかしながら、この間の作戦指導まことに拙劣を極め、特に三名の隊員を疲労のためにたおし、登頂時に間に合わず、一発玉の攻撃によつたことは副隊長として慚愧にたえず、深くお詫び申します。登頂成功したのですから六五点かと自ら甘い点をつけて慰めています。

尚追撃戦、カベリ・ピーク(七〇〇メートル)は今日中に中島、山口、高村がやると思います。コンダス・ピーク(六七五メートル)は昨日加藤、今川、潮田で登頂しました。残るバルトロ・カソリですが、全隊員が揃ってからやった方がよいと思いますので、全員一度B・Cに集結してから決定しようと思います。

撤収は明五日から開始して四〜五日と考えています。その間に潮田君のため隊員二名程を割いて、ロケーションをせねばならぬし、バルトロ・カソリをやるとなれば一週間は必要と思います。故に苦力の招集は此処二〜三日待っていた方がいいと思います。

小生も、全隊員がC3に集結して撤収の方法が決まれば、直ちにB・Cに下ります。

桑原隊長殿

八月五日

草々  
泰安

加藤は、藤平、平井の苦闘をたえず見まもり、雪庇の上に乗り出すと肝をひやし、深い雪にはばまれて進度のあがらぬときは、やきもきしていたが、最後に逆光線の中に頂上の二人を見たとき、

全身の力が一時に抜け去り、雪の上にくたくたと腰をついてしまった。それを見て今川も感動したという。

そうだろう、加藤は。そしてみんなよくガンバった。だがB・Cで私たちは、何をしていたのか。攻撃は五日と思ひこんでいた。だから、登頂隊員が危い雪庇をさけて深雪の中をよじているときは、ツ・テン・ジャックか、ブリティッシュ・ネーヴィーだ。頂上からは、ここが見えたはずなのに。

——悪かったなあ。

ほかの三人もうなずく。だが、そんなこといつてみても始まらない。それより、今川にブリティッシュ・ネーヴィーでもこしらえてやるう、うんと砂糖をきかせて。夕食後、おそくまで談笑。

個人テントに帰って、スリーピング・バッグに入ると、からだの内からぬくもってくるように、私は幸福だった。



登山前記

平五夫

七月二十九日

朝から曇り空である。このところ天候は不安定で、何かしら毎日降られているような気がする。今日はC4にいる山口・中島・岩坪・芳賀が、ドームをトラバースしてC5を作る予定である。出来ればコルまで伸ばしたい。

私と平井はC3から出て、C4隊の作ったC5に入る事になっている。

平井と二人でC3を出る。荷物は極力切りつめて個人装備のみとした。雪は堅くクラストしていて、アイゼンが快調にきくので楽だ。ふくらみを巻くところは、依然としてしまっていないで、粉雪のラッセルが深い。やはり風下で稜線から外れると、こんな所が多いのかも知れない。稜線のクレバスは割れ目が相当開いてきて、渡り難くなっている。少し上へ上ってまいたら案外簡単だった。一時間四十分でC4へ着く。非常に快調なスピードで、コンディションは上乘だ。

後前頂登

上をみると山口隊は、ドームの直登が未だ終わっていない。あまりピッチがあがっていない。この間から働き続けて相当ヘバリが出ているのではないか。岩稜寸前にデボがしてあるから、大して重い荷物ではないから、普通ならもっと早く行けるはずなのに。もっとも風と雪でシュプールが全部消えているので、ラッセルのやり直しで苦労しているらしい。

平井が山口隊が遅いといつてコボすが、あまり慌てて行ってもくたびれるから、C5を作るのは彼らに委せて、俺たちはC4でゆっくり一休みしよう、とだだめてテントへもぐり込む。ジリジリしているのは、平井だけじゃない。実は私も、山口隊のピッチをみていると、コルにC5を作る希望がうすれて行くのが判り、腹立たしくなってくる。前回の脇坂隊の二の舞を踏みそうな気がしてならない。

一時間休んで外へ出てみると曇り空がくずれて、雪がちらつき始めている。山口隊はトラバースを開始したのか、シュプールが斜面を横切つて姿が見えなくなっている。

私たちがトラバースの途中にかかった頃、吹雪になってしまった。トラバースの角度が少し鈍く、下を横切つているような感じである。これでトラバースは二回目だが余り良い気分のところではない。上から下の氷河まで何の障害物もなしに一気になぎ落ちてくる雪の急斜面で、新雪がつもると雪崩がこわくて通れそうもないところだ。

シュプールはやはり下についていたようだ。岩稜の寸前で三〇メートル上方のデボに中島と芳賀

がうずくまっている。山口と岩坪はどうしたのだろう、と見廻すと岩稜に腰を下ろしている。何か途方に暮れているような感じた。

急いでデボへ雪面を直登して事情を聞く。デボを見つけるのに二時間近くかかったらしい。こんな見つけやすいデボなのに何をしているのか、ときびしく言って、平井と二人で岩稜へトラバースする。岩稜から先へトラバースするには私たちの着いたところからしかできない筈だ。そのほかのところは急でダメなのだ。平井と岩稜に腰をおろして、下にいる山口にデボまで登つてデボの荷物をかつぐように言ったら、二人は岩稜を登らず、雪の斜面を直登してきた。激しい吹雪の中でデボと声を交わして聞くと、中島と芳賀の荷物が岩稜に残してあるらしい。山口と岩坪が再び岩稜へ引返して担いでくることにして、平井と二人で昼食にするが、吹雪の中では食欲もあまり起らない。

叫び声にハッとしてみると、デボ直下で岩坪がピッケルにしがみつき、ロープがピンと下へ伸びている。山口が頭を下にして斜面にぶら下っている。とっさに何が起ったのか判らなかつたが、スリップしたらしい。クレバスに半分つっこみかけて一人で起き上れぬようだ。芳賀が何か岩坪のところへ行つてもたもたしている。中島が二言三言声をかけていたが、吹雪に打消されて聞えない。そのうちたまりかねたように芳賀のところへ行つて、二人でピンを作っているらしい。中島が下へ伸びているロープにつかまって下り始めた。山口を引張りあげて、ともかく全員岩稜に集結する。

私は山口のスリップをみた時すでに、C5をこれ以上先に伸ばせないと覚悟を決めた。平井は是

非ともあと二時間ぐらい進んで、先日の引返し点まで行こう、というが、岩稜に集結したサポ

隊を見ると、これ以上前進しろという気が起らない。中島はまだまだ元氣だが、他の隊員の顔には

激しい疲労がありありとうかがわれる。吹雪もますます激しくなってきた顔も向けられない位だ。

不満ではあるが、岩稜上にC5を設営するより他に方法はない。サポ

二人で岩稜を上下してキャンプ・サイトを探すが、うまいところは中々ない。

ようやく氷の張っている半坪ほどの平らを探し出して、キャンプを張り出す。氷を切ったり岩を

おとしたりして、ようやく二人用テントを一杯に張り終る。その間にサポ

隊がデボから荷を運んでくれる。サポ

二人で岩稜を上下してキャンプ・サイトを探すが、うまいところは中々ない。

夜は吹雪もやんで良い月が出た。このところ毎日、夜は天候が良くて昼間になると吹雪くので、

あまり安心もできないが、一応明早朝アタックすることにす。

七月三十日

午前四時出発のつもりで三時に起きて、すぐ外へ顔を出す。夜中の月夜はどこへ消えたのか、辺

り一面雲が出て今にも降りそうにみえるので、支度だけ済ませて暫く天候を待つことにす。七時

過ぎになって漸く雲もなくなり、晴れそうになってきたが、すでに時間がおそすぎる。風が強い。私は元来あまり風は好きでない。アンナプルナでいたためつけられて以来風がこわくなった。天気は良いが寒い風を思うと一寸出る気が起らない。今日のアタックは見送ろう。慌てることはない。最も条件の良い時にアタックを掛けよう。

そうと決まったらゆつくり昼寝でもしよう。外を見れば晴れているのでしゃくにさわる許りだから、シュラフにでも入った方が一そ諦めがつく。

平井は諦め切れぬように時々天幕の外をのぞく。やはり、今日は思いきってアタックするんだっ

たかな、と口惜しくなってくる。正午頃小便に外へ出た。狭い場所なので支柱に片手を掛けて用を足していると、デボの下の雪面を横切ってサポ

隊がくる。今日アタックに出なかつたのが後めたく感じられる。中島、山口、岩坪の三人だ。テントの中へ入って暫く話を交わす。外は猛烈に寒い風が吹き上げてくる。

中島の話では、もちろんアタックしていると思っていたのが、テントの前に私をみたので、頂上へ登ってきたのかとびっくりしたそうだが、よくよく見ると横の岩稜に置いてあった酸素の位置が昨日の儘だったので、がっかりしたそうだ。

お茶がないのでドロップをとかして一しよに昼飯をたべる。飯といっても乾パンをかじるだけだ。

山口や平井はうまそうに食っているが、どうも余りうまいものではない。平井は食料係で、自分で設計して京都の進々堂で無理につくらせた苦心の乾パンである故か、又そう思っただけでもうまくなるたちらしく、この乾パンは中々傑作ですよ、と賞めながら何枚でもたべる。

明日のアタックとサポートを打合せて、三人は帰って行った。

明日に備えて午後五時頃から寝袋に入る。平井はすぐねつくが、私は何だか容易にねつけない。私は元来ねつきには苦勞しない方で、一しよのテントにねる連中から例外なしに文句を言われ続けているのだが、どうしたことか頭が冴えてねむれない。

一つのことを考え出すと、次々に考え出して、良い加減にねむらなくてはと思ってもだんだん頭が冴えてくるばかりだ。

七月三十一日

三時間ほどとうとうとしたと思ったら、もう十二時になっていた。

午前三時出発の予定だから、今から支度にかからねばならない。狭い寝袋の間でプロパンに火をつけて炊事をする。

アルファ一米にスープ、佃煮やデンプで食事にする。テルモスに紅茶をつめようとすると、紅茶を忘れてきており、砂糖も忘れてきたのに気がついた。仕方がないのでドロップをとかして、何と

なく甘いものを作つてテルモスにつめる。

重い物は一寸でも少なくていい。平井は羽毛のズボンも要らぬと言ひ出す。ツェルトも重い。出来るだけ軽くした積りだが、酸素をかつぐと結構重い。二〇キロは充分ある。

キャンプ出発午前三時。

背中の背負子よかこがずしりと重い。ともすれば身体が後へ引かれる。一日中狭い天幕の中にいたせいか、身体がこわばつてバランスが悪い。

素晴らしい月夜でライトがいらない。

黒い岩稜を五〇メートルほど直登するが、えらくつらい。トップの平井が時々バランスを失い、ぐらりとしてドキリとする。息がはずみ、私も岩にしがみついたことが何度もあった。

左へブルー・アイスの斜面のトラバースにかかる。月光に照らされて青黒い。

アイゼンの歯が漸く引掛っている。下は南側の氷河まで五、六〇〇メートル一気になぎおちている。コンティニアスでトラバースを続けているうちに、だんだん夜が明けてきて青黒い氷が白っぽく変ってくる。

いよいよドームの下りが近づいてくる。稜線の南側に黒い岩壁がみえてきたが、巻くとすると左側の急な雪稜を下って南側の氷河まで下りねばならないので、ドーム目指して登って、忠実にドームからコルへ下りている稜線を下ることにする。コルへの下りは鋸齒のような小突起を二、三こそ

ば後はコルまで雪の斜面らしい。大した苦勞もなしに行けそうに見える。ところがいよいよ下りにかかってみて、おどろいた。コルまではほとんど鋸の連続で、特に初めの部分は左手が岩壁で雪庇との間の狭い雪の部分を通るところが、えらく難しい。

ワン・アット・ア・タイムで下り始める。雪庇との間はグサグサの蜂の巣のような穴が沢山あいていて、雪庇とも稜線とも判断がつかない。多分グサグサしているのは雪庇のクレバスだろうと思いが、それから下は急でトラバースが殆ど不可能と云ってよい。

鋸の歯を二つ三つと越える。処々ブルー・アイスの斜面にぶつかり、ステップを切らねばならない。二〇キロの荷がこたえて、バランスを保ってピッケルを振るのがきつい。足首がガクガクになつてくる。歯が次々と現われてくる。ワン・アット・ア・タイムが無限に続くように感ずる。ともかく右側（北面）には大きな雪庇が出ている筈だから気をつけねば、と絶えず自分に言いかけせる。まかりまちがって雪庇に登ったら大変だ。このクレバスなら落ちる可能性が充分にある。

漸く歯を越し終ったらしい。コルへ続く氷の急斜面が展開する。ほっとしたもの、もう足首のふんばりがきかなくなっている。時々トラバースの足首がそのままガクツと下の斜面へのけぞりそうになる。全身の力をこめて片足で立つ。

コルへ下り切ったのは午前十時であった。予想では、三時間くらいの積りだったのが、七時間かかったのだ。この調子では今日のアタックは失敗らしいな、と少し諦めの気持が湧いてくる。

一時間の休憩の後、十一時にコルを出発する。背中の酸素は強情に担いだままである。

コルは広そうに見えるが、到るところクレバスである。踏み出すと腰まで落ち込む。ようようの思いで這い上り、一步踏み出すと、またズブリとはまり込む。南寄りに岩が出ている。やむを得ない。岩を伝うより手はない。スレートを積み上げたようなガラガラ岩である。南側は氷河まで二〇メートルほど一気に落ちこむ雪面である。両手を使って岩場を上り下りするのは、横に広い雪面があるだけに馬鹿々々しくなるが致し方ない。

コルの部分を過ぎていよいよ頂上へ続く雪稜にとりかかる。

最初は急な雪壁の上りになる。最後は七〇度近い斜面になり、ピッケルを差込んでキック・ステップで上る。中々きついアルバイトだ。後はさして急でない斜面の上りになる。酸素をつけてみることにする。大分ラッセルが深くなり、膝までは確実にある。酸素をつけると流石に楽になって三十分に五分くらい一休みのピッチで歩ける。平井と顔を見合せて、やはり酸素は良いな、と笑い合う。二人とも酸素は余り使いたくない方だからだ。

そもそも私のプランでは、第一回攻撃には酸素を使わず、もし第一回が失敗したら第二回攻撃隊員は酸素を極力使用して、どんなことがあっても頂上を仕とめるというのであったが、このプランに対しては加藤副隊長が猛烈に反対して、ともかく頂上を打ってからなら、酸素を使わずにでも、あるいは全員登頂を狙おうが、好きなことをしても良い。ともかく如何なる手段を使っても良いか

ら、AACKの面子にかけても頂上をうつことが先だ、という次第で、残念ながら第一回から酸素を使うことにした。

もつとも最初は第二回の攻撃は別パーティの積りだったが、現状では率直に言って、私と平井以外は相当に疲労の色が濃く、サポートに動員されることを考えると、別パーティによる二回の攻撃は無理であると判っていたからでもある。

また酸素を使いたくないという私と平井だけの個人的な欲望のために登頂のチャンスをなくしてしまうことは慎しまねばならぬことかも知れない。私はあくまで七〇〇メートルの山は酸素なしでやるべきであるし、また充分可能だと思っていることには変りはない。しかし、そうした自分の主義主張に忠実であつても、そのために登頂を逸したら一体AACKの人々に、どう言訳が出来るだろうか。あの時に酸素があつたら、という後悔は先にたたないのである。

頂上へ続く山稜の中ほどにある岩場が大分近くに見えてきたが、目の前には大きな雪のこぶがある。相当な急斜面である。どうも距離に対する錯覚があるらしく、正確なところ自信がもてない。一体どれほどあのこぶを越せるだろうか。天候もしだいに悪化してガスが包み始めた。

時刻は二時半。あと三十分登って、引返すか、頂上へ向うかを決めようと考えた。

三十分後でもこぶは全然近くなったような気がしない。午後三時だ。この調子では日のあるうちに登頂するのが困難なことは、はっきりした。とすれば今むりにこれ以上登ってみても数少ない酸

素を無駄使いするにすぎない。酸素をデポして次回のアタックに備える方が、この場合の良策ではなからうか。

平井に引返しを提案すると猛然反対する。頂上は近いですよ。あと二時間位で行けますよ、と頑張る。

なるほどガスの中に隠見する頂上は驚くほど近く、誇張すれば手をのばせばとどくように見えるのだ。だが第三キャンプからの遠望によれば、岩場は頂上稜線の中程だつたと思つたので、二時間では絶対無理だ。頂上で日が暮れるだろう。日が暮れても構わない。ビヴァークすれば良いではないですか、と平井は言葉鋭く迫る。

たしかに今の二人のコンディションは上乘で、ビヴァークしても大事に到ることはないだろう。私としても充分に自信はある。ビヴァークしたって死にそうもない。平井のいうところはたしかに一理ある。千載一遇のチャンスであるとすればだ。

もし、我々の隊があらゆる可能性を失って、万策尽きた状態だつたら、私は平井に突撃を命じただろう。指はすでに五三年のアンナブルナのたたりで中指の先がなくなっているが、あと二本や三本落したところで、私の人生に一体何の影響があるだろうか。

しかし今は違う。千策尽きた訳ではないのだ。二段、三段の打つ手は有るはずだ。今ここで相当不確実な可能性に踏切るところまでは追いつめられていないのだ。引返すべき時に引返すべきだ。

超人といわれたヘルマン・プーブルですら引返すことを知っていたのだ。しかも私達はプーブルの出発点とは殆ど変らぬところから出て、同じ位のところで引返すのだから、もうプーブルに対する挑戦といった気持には充分満足した筈だ。

——引返そう。俺は、もう一本指を落すのは嫌だからな。

と最後の宣言を下す気持で、むしろ自分自身を納得させる気持でいい放った。

——判りました。無理をいいました。

と素直に私の気持を受け取ってくれた。良い男だ。こんな立派なパートナーと組めたことは嬉しい。私はたとえチヨゴリザに失敗しても、こんな素晴らしい山男を見つけたことに誇りを感じるだろう。

一休みして引返し始める。もう午後三時半だ。途中で岩の出ているところを見つけて酸素をデポする。

だがドームの登りをどうしよう。あれにかかる頃は日は暮れきっているだろう。強行すればアクシデントは避けられない。疲れたからだで一人のスリッパを食い止めることは難しくなっている。

二人で相談してドームの南側の氷河に下ることにする。コルの手前の雪壁の上から下りる方が楽らしい。

コル発午後五時。中々の急斜面で、ばらばら雪面が板状に割れて落ちる。一カ所クレバスがあつ

て一寸でこずる。氷河へおりるところに大きなクレバスが出来ていたので、右側に大きく廻り込んで氷河におりたつた。広くてスノー・レークのように、漸くほつとする。後は何時間かかろうと、もう難しいところはない。ただ歩けば第三キャンプに着くはずだ。

月が出はじめて、カベリ・ピークとサルトロ・カンリが美しい。

案外クラストしていなくて、足首までもぐつて歩きにくい。クレバスは殆どない。大分へばりが出てきた。時々雪の上にひっくり返って、サルトロ・カンリを眺めて、ドロップをしゃぶってサボる。

第五キャンプの下らしい所でコルをかけてみるが、全然応答がない。五、六〇〇メートルも下だから、とどかないのかも知れない。いろんな形のセラックがドームの壁に突立っている。

第四キャンプも応答がない。数回叫んでみたが応答なし。寝るのにはまだ早いし、起きている筈なのに、やはり聞えないのか、と思って諦めて、第三キャンプを指して歩を運ぶ。二人共疲れてきてシュプーブルが千鳥足だ。

第三キャンプの黒い影がみえてきたので、コルをかける。キャンプから電燈を照らして人影が出てきた。何か喋っている。

——時間切れですよ。

と平井がいう。時間が無くて登頂に失敗したという意味だ。

潮田さんがフライヤーをたいて、シネを廻している。

午後九時十分、泰安、潮田の二人に迎えられてテントに入る。何でも二人がもう寝るつもりで、灯を消したところだったそうだ。

きょうの経過を話す。

ともかく腹が減っているので早速食事にする。潮田氏手料理の釜飯と称するものだが、老頭兎組は中々料理がうまい。さすが口やかましいだけある、と妙な感心の仕方です。食事を済ませます。

寝袋を私と平井が持たないので、雑魚寝にする。割合寒くないので、シュラフなしでも大してこたえない。

加藤さんと今後のタクティクを協議する。ドームを経由するブルのルートはその困難さと、サポート能力から見て、殆ど可能性なしと判断する。きょう帰ってきた氷河ルートをたどるより他に手段はない。或いは雪がしまらず、ラッセルがあるかも知れないが、危険性はなく、確実にコルまで接近出来ることは明白である。

明日は第五・第四キャンプを撤収して、陣容をたて直し、氷河ルートにかかるべきである。新ルートに最大限前進テントを二つ出すことにする。装備、食料も大体計算する。現在の動ける隊員、ポーターの担げる重量内で滞在日数も限定してしまう。最後のキャンプは二日間位の食料、燃料に限定して、もし予定日の八月五日に天候が悪化したら、第三に下って、徹底的に待機戦術に出るこ

とに決めた。

こうなれば、あわてた作戦は考えずに、じっくり腰を落着け、成功する迄、ねばりつづけようではないか。

八月一日

晴。加藤さんと潮田さんが第四キャンプへ上る。第四と第五キャンプ撤収のためである。第五キャンプの中島、山口の二人は、昨夜私ら二人が帰っていないので心配していることだろう。

平井と二人でゆっくり昼寝する。

午後になって全員撤収して来る。岩坪、芳賀の二人の疲労が甚だしい。山口、中島はまだ使えそうだ。大分怒っていたらしい。夜おそく十一時頃まで、ドームの辺りを探したり、コールをかけた。りして、今朝も五時頃から探しに出たらしい。済まぬことをしたが、どうにもならなかったのだ。

高村と今川が第二キャンプから上ってきた。岩坪と芳賀を第二へおろすことにする。二人とも、なぜ第二へおろすのか判らない、といってごねるが、どうも自分達がどれ位位へばっているか自分でよく判らぬらしい。ヒマラヤでの疲労はこんな場合が多い。自分で気付かずについて急にガックリとくる。アンナプルナの時の脇坂が丁度それだ。若い連中は中々自分のコンディションがつかめないらしい。

第二回攻撃の体勢を決定する。

アタック・パーティ 藤平・平井

サポーター・パーティ 山口・中島・高村

ポーター 三名

荷物はアタック・パーティを除き各人一五キロ。アタック・パーティは個人装備のみ、約七キロ程度。

加藤、潮田、今川は、第三キャンプに待機し、できればコンダス・ピーク(六七五メートル)に登る。アタック時は潮田はカメラ、今川はベースへの伝令を受持つ。

加藤さんが、私と平井に再度のアタックを命ずるのが心苦しいようで、

——どうだ、もう一度やるか。何なら変えようか。

と聞いたが、私は言下に言い切った。

——いや、もう一度二人でやりませよ。

何も頂上を踏む光栄を是が非でも自分で得たい、という意味ではない。私も疲労している。二度目のアタックに対して、決して万全の自信がある訳ではない。六年前に胆のう炎を患ったことがあり、疲労が重なると局部に鈍痛を感じてくる。今が丁度それだ。大分へたばっているな、と自分でも判る。果してこの状態で七〇〇メートル以上の骨身を削るような苦闘に耐えられるだろうか。

だが、他の隊員は、どうだろうか。脇坂、岩坪、芳賀の精銳が疲労し切ってベースへ下りており、残る山口、中島、高村にしても相当使い切っておることはかくせない事実である。とすると、アタックしうるのは、私と平井しかない。平井の強さは抜群で、未だにへばりのかけらも見えていない。といって彼一人をやるわけには、もちろんいかない。

もし、ここで私が、自信ないという理由で、休むことをいいだせば、一体誰がアタックするのだろうか。

この第二回目のアタックを逸すると、三回目のアタック・チャンスは非常に不確実なものになることは、判りきったことである。

八月二日

きょうは惜しいくらいの晴天だが、全員休養とする。昨日、今日と好晴が続いているが、モンソンはすでに来ていて、天候は不安定だ。この快晴のベースが果して予定のアタック日、五日までもつだろうか。今日一日の休養が、後でホゾをかむことになるかも知れない。

何となくいらいらして、余りのんびりする気にもなれない。しかし、ここであわててみても始まらない。この疲労状態でアタックをかけられぬことははっきりしている。

きょう一日は無心に休もう。

テントの前で日向ぼっこをしながら、午後をたのしむ。他愛のない冗談が飛ぶ。こういう時、いつもサカナにされるのは、きまってる。平井である。皆のうちひしがれた心があたたかくほぐれていく。

八月三日

きょうも快晴。予定通りの人員で出発する。クラスト歩いて歩きやすい。予想では相当のラッセルを覚悟していたのだが、ここ数日の晴れ続きで、クラストしたのだから。

トップの歩調がおそいのでジリジリしてくる。疲れているのだから、今日中にできるだけ高い所へ、アタック・テントをあげたい。あまりゆっくりしたピッチで歩くと、また第一回のアタックと同じに、予定地へキャンプを作れなくなりそうだ。トップを入れかえてアタック・パーティを出す。平井は疲れも見せず、快調にピッチをあげて行く。ついてゆくの辛い。

第四キャンプの裏側を廻り込むと、カベリ・ピークが全貌をあらわしてくる。ふっくらとした、きれいな曲線をもった山である。この山がどの地図にもっていないのが不思議である。

ルートは平たんで、ドーム尾根寄りにすすむ。ポーター連も珍しく調子良く、文句も出ない。カベリ・ピークを過ぎたところに、テントを一つ張ることにする。サポート・パーティ用である。カベリに近いのが味噌で、アタック後にカベリを攻撃するのに都合が良いからである。午前九時。ここで荷を軽くして先に向う。

段を二つばかり上り切った所が、コルへの上り口になる。十一時に着く。予想外に早いので気を良くして昼飯にするが、ポーター達がぐずり始めた。彼らは昼飯を持ってきていないので、これら帰らせてくれ、というのである。今日は時間が掛かるからと念を押しておいた筈なのに、今になってこんなことを言い出す始末に、みんな怒るが、どうにも仕方がない。コルまでの二〇〇メートルばかりの急登が恐いのが本心らしい。また確かに昼飯を持ってきていない。こんな時にシエルバがいたら楽なのに、とついぐちも言いたくなる。

これではコルまでキャンプをあげることができなくなったので、六七〇〇メートルのこの場所に、アタック・キャンプを作ることにする。平井と二人でテント張りをし、山口、中島、高村はコルまでルートを作り直すことにする。何しろ私と平井の降りてきたルートはひどいもので、下部は殆どステップの態をなしていない。滑り落ちてきたみたいである。

コルそのもののキャンプ・サイトはあまり感心したものではない。非常にクレバスが多く、風が吹き抜けたりでするので、むしろ現在の六七〇〇メートルの地点の方が良いと考えられる。明朝凍結した二〇〇メートルの登りだったら、そう大したアルバイトでもない。

サポート・パーティには申訳ないが、二人でテントの中へもぐりこんで昼寝とする。

六七〇〇から七六五四の頂上を一気に登るのにあまり自信がないが、五日頃は南にみえるモンソーンの雲がチョゴリザへやって来るのではなからうか。ここでもう一つ上にアタック・キャンプを

上げれば申分ないが、ハイ・ポーターの限界はここまでであり、これ以上にあげるとなるとアタック・パーティー、サポート・パーティーがフルにかつがねばならぬ、とすれば今までアタック・パーティーを出来るだけ温存した意味がなくなり、またサポート・パーティーにしても、もはや限界的な努力をしており、これ以上の要求はアタック後のアタック・メンバーの収容と第三次アタックの余力を零にしようことに他ならない。

一〇〇〇メートルの高度差の一日上下は、この大高度においては、或る意味での正統派をもって任ずる人達からは御叱りをうけるかも知れぬが、少なくとも私と平井は充分可能であり、自信もある。

完全にモンスーンになっている現在、最終的な決断のファクターは天候だけではなかるうか。

登頂のチャンスは明日アタックすることに絞られてきているのだ。

サポート・パーティーが帰ってきた。しばらく明日のサポートについて打合せして、カベリのキャンプへ降りて行った。

八月四日

昨日は五時頃からスリーピング・バッグに入ったが、中々眠れない。平井は暫くしてあつさり眠ってしまったが、頭が冴えてどうしても眠れぬ。いろんなつまらないことを考えてしまう。平井が

寝返りをうって私によりかかってくるが、私は眠れなくてむしゃくしゃしているの、つい邪慳に押しやる。

時計を見ると、もう十二時になっている。うとうととして目が覚めると午前一時五十分である。平井を起して支度にとりかかる。飯をたいたり、酸素をセットしたりで三時間位かかってしまう。テントの中の整理はきちんとしておきたいので、スリーピング・バッグをたたんだり、片付けをする。

靴をはいてテントの外に立ったのが午前四時五十分。まだ暗い。しかし、今日の天候は絶対確実らしい。

頂上は間違いないしに頂戴できる、という確信が湧いてくる。

コルまでは酸素を使用せずに一気に登り切る。クラストしているので快調なピッチ。荷物は各自約二〇キロ。大分切捨てた積りだが、やはり重い。コル着五時四十分。

一休みして六時出発。酸素を使い始める。一分間二リットルの使用。前回のアタックの酸素デポの補給を合わせると各自二本半となり、六時間もつことになる。やはり酸素を使うと柴でピッチもあがる。最初の雪壁もシユプールがあるから簡単にコンティニアスで乗切れる。十三分に五分の休憩で、内地の山を歩くスピードとピッチで進める。

第一回攻撃の引返し点までは難しいところもなしに快調に進む。いよいよ岩尾根の下の大斜面に

かかる。雪庇が大きく北側に張出しているので注意せねばならない。昨年のヘルマン・ブルのアクシデントは、この雪庇の上へ乗ったためらしい。段々雪面が急になってくる。クラストしてステップを切るところと、膝までおちこむ深い雪のところとが、交互に出てきてなかなか歩き難い。しかもこの斜面が長い。岩尾根までは相当あるようだ。

平井に、頂上に正午前に着くかどうか、のかけを提案するが、  
——それは間違いなく昼前ですよ。

と相手にしない。私も昼前には登頂できるだろうと思っていたので、かけを止める。

ところが岩尾根に近づくとスピードが遅い。いつまでたっても尾根が前と同じところに見える。決して二人のピッチがおそいのではない。この斜面が予想よりも遥かに大きく、急で、雪の状態が悪いからだ。

いよいよ岩稜の下にかかってきた。ここで一休みとなった時に、岩稜左のルンゼ上方の水壁が崩れて、あっと思う間もなくルンゼを飛びこえて、岩稜を斜めに横切り北壁へ落ちて行った。私たちのルートはこの雪のつまったルンゼしかないのだが(岩稜の直登はできぬことはなきそうだが、相当難しそうだ)、これがブロック雪崩におそわれるのを眼前に見たのは、二人にとって大きなショックだった。大きく左を廻りこめば雪崩の危険はないかも知れぬが、時間は問題なく数倍を要するだろう。現在までの所要時間をみても酸素は頂上までもちそうにもない。途中で切れることは必定なので、

とても数倍の時間を費して廻りこむ訳には行かぬ。それも決して簡単にできそうもない。凄く急な氷の斜面で、下は遙か氷河まで七、八〇〇メートル一気になぎおちている。

崩れた水壁を仔細にながめてみると、あとは一寸崩れそうなのが見当らない。またベース・キャンプ出発以来、毎日のように双眼鏡で眺めていたが、この稜線上の雪崩は一度もみていない。非常に少ない確率で発生し雪崩を偶然にも、われわれはみたのではあるまいか。これが一つおちたら、そのあとはそれこそ殆んど起らないような確率に減っているのではなからうか。まして、私達二人には今さら引返すことなんか考えられもしない。

既定方針どおり、岩稜の下から左へトラバースしてルンゼに入り込むこととして出発する。岩稜下までの斜面は益々急になってくる。稜線寄りが幾らかぬるくて登りやすいのだが、雪庇に乗っかることになるので危い。右手の稜線の傾斜工合に気をつけながら進んでいると、トップの平井が稜線に寄りすぎているような気がするので注意する。

前の斜面が急になっているので左へ切りにくいのが、どうにも雪庇がこわいので、トラバースを始める。左手にクレバスがある。明らかに雪庇の割れ目である。やはり雪庇の上に乗っていたのである。慌ててトラバースをしようとするが悪くてたまらない。ふわふわの不安定な雪面をワン・アット・ア・タイムでなるべく雪にショックを与えないようにして進む。二ピッチのトラバースの後、岩稜の根本を目指して直登する。胸につかえる急傾斜である。

岩稜の根本からルンゼヘトラバースして入り込んだが、雪はみた目ほどには積っていない。下は岩稜と同じスレートのような岩盤で、三〇センチばかり粉雪がつもっていて不安定で、時々サラサラとチリ雪崩みたいのがおちる。アイゼンをはいたまま、時々外側へ傾斜した岩に乗つかるのが、あまり気持良くない。傾斜は四五度から五〇度位はあるだろう。岩稜そのものは一寸登る気にならない代物である。大して難しいことはなさそうだが、ガラガラして不安定である。上部になると岩の上になすく氷がついている。ところによっては氷を割って岩をほじくり出して、手がかりを作らねばならなかった。約一〇〇メートル近い登りの後、漸く雪の斜面にたどりついた。もう酸素は切れてしまったが、頂上は驚くほど近くみえる。

午後一時、大休止、昼飯にする。大して食欲が起らない。平井は乾パンと兵糧丸、私はヒットBを一箱食べる。

——あと何時間で頂上へ行けるかな。

——一時間半で行けませんか。

——この雪の状態では何とも言えない。朝から時間の間違いどおしだから、時間を考えるのはよそうよ。

全くここでは時間を考える必要はない。頂上を目指すことだけが残っているのだ。

酸素がなくなっても別段、急激に弱ることはないらしい。大体七〇〇メートルの山で酸素を使

うなんて、ぜいたくの部類に入るのはなからうか。早期のヒマラヤ登山者は酸素なしで八〇〇〇メートルへ登っているではないか。

午後二時登高再開する。

依然雪が深い。腰までたつぶりもぐりこむ。内地の冬山のラッセルと同じだ。ピッケルで雪面をおさえて膝で雪を押しつけねば前へ身体が出ない。

一時間半なんてとんでもないことになった。ともかく一步進めばそれだけ頂上へ近づいているのだ、としか考えぬことにする。

果しないラッセル。みるみる時間が過ぎて行く。酸素なしでも大して苦しくない。

頂上に続く岩稜下の斜面では傾斜の急なせいもあって、胸近くまでもぐり込む。しかもサラサラの粉雪でステップがかたまらない。一步のぼるのに二、三回ずりおちる。

頂上稜線についた時は、すっかり息がきれてしまった。

頂上稜線の雪も案外やわらかくもぐる。身ぶるいするほど風が冷たい。今まで全然風に当たっていないので、あたたかだったから余計寒いのだろう。五本指の毛糸の手袋が凍りついてしまう。

荷物をおろし、皮手袋にとりかえて、日章旗とパキスタンの国旗をとり出して、ピッケルに結びつける。平井は十六ミリを出した。

午後四時頂上に向う。すっきりした岩稜、驚くほど堅い岩で、今までの不安定な雪と、時たまぶ

つかった岩は、全部ガラガラだったので、嬉しくなる位である。アイゼンでガッチリ岩の上に立ち上ると、何だか内地の山で岩を遊んでいるような楽しい気分になる。

一ピッチで頂上ピナクルの下につく。平井がトップを代ってくれといひ出す。先輩の私に花を持たせて、先に頂上を踏ませようというのだ。しかし、今日の平井の奮闘振りは大したものである。

——頂上を最初に踏む資格は君にあるんだから、そのままで行け。

そう言ってもひっこまない。二、三回押し問答をしたが、こんな所でいざこざ言ってみても始まらない。私が交代してトップに立つ。

ピナクルの右側に雪が張りついているので、それを登ろうと二、三步踏み込んだが、表面クラストしているが下は穴があいていて、岩の間に足首がはさまりこんで危い。まっすぐ岩を登ることにする。一〇メートル位の垂直に近い壁であるが、ホルドがうまい工合にある。アイゼンが岩に音をたてて食い込む。両手に力をこめて這い上ると、眼の前がぱつと開けて、頂上である。

一坪ぐらいの小さな頂上で岩屑で被われている。北側に三〇センチ位の高さの岩がでてゐる。それが最高点らしいので、近寄ってみると、向う側は北壁へ落ち込んでいる。頂上の岩の一足長手前で立止まって、平井を確保する。坐りこんでザイルをたぐりながら、ドームを見るとブロックンがでてゐる。

登っている間に、何時のまにかガスが出ていたらしい。うすいガスがドーム前面にかかつて、丸

い虹が出ていて、立ち上った私の形がうつっている。

一瞬プールのことが頭に浮び、不気味な感じがした。

平井に早く十六ミリを持ってこい、ブロックンだぞ、と怒鳴るが、彼は中々現われない。これが天然色の映画にとれたら大収穫だと思ふが、平井の頭が頂上の端に現われた時は、もううすれかかり、ガスが流れ始めて、かき消されて行つた。平井にブロックンが出たことを話しながら、頂上に近づく。

一歩前で二人は並んでたつた。平井がだまって右手を出す。

——おめでとう。

と同じ声が出た。しつかり手を握り合ふ。

胸がぐつと迫ってこみあげてくる。眼のふちが熱くなった。

平井が足をあげて頂上をアイゼンで踏んだ。私も同時に踏もうと、あげた足の間から頂上の岩をみた。小さく可愛い岩である。トゲトゲしたアイゼンで踏みつけるのは可哀そうだ。

——花嫁は足でふむものではないよ、手で抱くものだ。

思わず、こう口走った。

平井はげげんな顔をして、聞きかえす。

——何のことですか。

——ブライド・ピークだからだよ。

平井は始めて、判ったという顔をする。

私はそこに腰をおろして、左手で岩をしっかり抱きしめた。

皮手袋を脱いで素手でさわってみた。冷たい。ジーンと冷たさが身体中に伝わってくるみたいだ。岩はザラザラしていた。

立ち上って北側へ出てみた。

ベース・キャンプが眼下にみえる。モレーンの上に黄色い天幕がみえる。

ここにくる迄の何十日の辛苦。ベースで一人待っているであろう桑原老隊長を思うと、ひとりで「バンザイ」が口をついて出てくる。ピッケルを振りまわした。ヒョッとすると、ベースから見えるかも知れないと思った。

今まで高いと思っていたヒドン・ピークが、何だかこと同じ高さのようにみえる。左手にはマッシュルームが素晴らしい尖塔になってみえる。屏風をたてたように何時も圧迫感を感じさせられたK2、ガッシュルームの連峰も、もう大したものにもみえない。

南側には雪のナイフ・エッジがすーっと伸びて、白いきれいなチヨゴリザ第二峰がみえている。

あそこまでの往復の時間はもうないな、と考える。サルトロ・カンリをはじめ、コンダス、シアチェンの山々が見渡す限りひろがっている。

十六ミリの撮影準備にかかる。頂上が狭いので、旗を頂上に立てた私の姿が全部入らないが、仕方がない。平井がとり終ってから旗をみると、パキスタンの国旗の天地が逆になっているのに気がつく。御苦労だが、もう一度とり直しだ、と旗をつけ直す。AACKと学習院のペナントをとる。十六ミリで頂上のパンをとってから、思い思いにカメラを振りまわす。私は先ず第一の敗退のドームをとった。

三十分間は夢のように過ぎさった。

何か記念にと秘かにもってきた、子供が書いて送ってきた私の似顔絵を、布で作った小さい女の子の人形と一緒に、頂上の岩の下に押し込んだ。何時になるか判らぬが、誰かが再び頂上に登った時に発見するだろう。色あせて何だか判らぬかも知れぬ。私のところへ照会がくるだろう。どんな回答を書こうか、などと考えると楽しい気持ちになってくる。

——平井、君も何かうめないか。せめてガール・フレンドから何か貰ってきているだろうから。

——残念ですな。キャンプに忘れてきました。

——この赤い人形、良いだろう。

——あやしいですな。帰ったらバラしますよ。

午後五時頂上をたつ。

ピッケルをとりあげて、出ようとして、岩を拾っていないのに気がついて、平井に拾うようにい

う。ザックを開いて手当り次第七つ八つほうりこむ。

岩稜をおりて荷物をおいてきたところへおりつく。

途中の岩場の下りが気掛りだ。日が暮れるかも知れぬ。もし岩場の上で暮れたらビバークし、少しでも光があったら一気に下りてしまうことに二人で話し合った。

下りは雪が相当締っていてアイゼンが割合きく。殆ど休まずにぐんぐん飛ばす。

案じていた岩場に着いた時は、まだまだ明るかった。一気に下ることにする。ワン・アット・ア・タイムで慎重に下降を開始する。前のめりになりそうな急傾斜である。下の氷河の底まで一気におちこんでいて、一寸いやな気持であるが、思ったより簡単にピッチが上がる。岩場をノン・ストップでおり切ってほっとする。

完全に日は暮れ切ったが、ライトを節約して下る。雪の中の足跡はライトなしでも、何とか見えるので、強情にライトをつけずに下り続ける。

下の第四キャンプから、ライトをつけた二人がコルへ向うのが見える。盛んにコールをかけてくる。何回も心答するが暗いので、こちが判らぬらしい。ライトをつける。二人に一個のライトだが、別に不自由しない。どうせコンティニアスで行けぬのだから、ライト一つでも変りはない。

前後左右、何も見えない真暗やみである。何か無限の空虚へ向って下りて行くような気がする。こんな時は余計なことを考えずに、眼の前のステップを完全に踏むことだけを考えた方が楽らしい。

他のことを考えるとこわくなりそうだ。

無限に長い時間がたったような気がする。いつまでもシュプールが続いている。サポート隊が出ているのに、何故おそいのだろう。もういい加減に現われても良い時分だが、とついボヤキが出がちになる。

もうコルが近いらしい。それにしてもサポート隊は何をしているんだ。

とうとう二人とも坐り込んでドロップをシャブリ出す。

案外近くでコールがする。ライトが見える。二人の姿がすぐ近いところに浮き上ってくる。中島と高村だ。

お互いに握手を交わす。どうだやったか。うんやったぞ、と平井が盛んに喋っている。

二人とも下のキャンプで成功したのを見ていたが、私達の口からじかに聞きたかったのだろう。

早速温いお茶を御馳走になる。山口がキャンプで飯を作って待っている筈だからと下りかかる。

もちろん荷物は二人にもってもらう。私は気が抜けたせいも、急に疲れが出てきた。コルからの下りがつらい。しばしば休憩を要求しながら、ゆっくりおりる。漸く月が出てきた。クラストした雪面が光って美しい。

第四キャンプの前に、山口が出て待っていた。日頃冷静そのものみたいな彼が、私の腕をかかえてはなさない。私はそんなにへばって見えるのかと振りはなそうとしてもはなさない。はなさないか

ったのは、今から考えてみると嬉しさ半分だったのだろうと思う。

第四キャンプ着、午後十時半。

テントの中でおじやを食べる。サポートの三人はフォークがないので、手づかみで食べている。緑茶をのんでほっとする。

今日のアタックは一部始終下から見えたそうである。へばっていたのを見られたかと冗談を言い合う。

十二時すぎにサポート隊は、カベリのキャンプへおりて行った。サポート隊もこれからおりのは大変な仕事だ。

外へ出てみると月が美しい。カベリ・ピークが円い曲線を見せている。チョゴリザの頂上付近のガスが消えて、昨日と同じ姿だが、もう私達はあれに登ったのだと思うと、改めて嬉しさがこみ上げてくる。

八月五日

晴後吹雪。朝はゆっくりおきる。昨日に変わらぬ快晴である。チョゴリザには私達のシュプールのついている。頂上直下の雪面にシュプールが深くえぐれたように光っている。汚れ一つなかった純白の斜面が、みにくくひっかきまわされたようだ。何かとり返しのつかぬことをしたような、深い

後悔に似た気持が心の中をふっと横切る。

あたたかい外で食事していると、ポーターが二人上ってきた。サポートの三人が、早くから出て、カベリ・ピークへ向っているのが見える。中々快調なピッチだ。あの調子なら昼頃には頂上へ登れるだろう。

ポーターに天幕や荷物をまかせて下り始める。あたたかくて気持の良い日だ。何かにつかれたように、毎日登り続けた今までと違い、すっかり解放された気持で、何も考えることもなくブラブラ歩を運ぶ。

第三キャンプが見え出した。コールに人影がテントから出てくる。加藤さんと潮田、今川、それにポーター達らしい。

こちらでも手を振りながら、テントへ歩を早めた。

... 一、... 二、... 三、... 四、... 五、... 六、... 七、... 八、... 九、... 十、... 十一、... 十二、... 十三、... 十四、... 十五、... 十六、... 十七、... 十八、... 十九、... 二十、... 二十一、... 二十二、... 二十三、... 二十四、... 二十五、... 二十六、... 二十七、... 二十八、... 二十九、... 三十、... 三十一、... 三十二、... 三十三、... 三十四、... 三十五、... 三十六、... 三十七、... 三十八、... 三十九、... 四十、... 四十一、... 四十二、... 四十三、... 四十四、... 四十五、... 四十六、... 四十七、... 四十八、... 四十九、... 五十、... 五十一、... 五十二、... 五十三、... 五十四、... 五十五、... 五十六、... 五十七、... 五十八、... 五十九、... 六十、... 六十一、... 六十二、... 六十三、... 六十四、... 六十五、... 六十六、... 六十七、... 六十八、... 六十九、... 七十、... 七十一、... 七十二、... 七十三、... 七十四、... 七十五、... 七十六、... 七十七、... 七十八、... 七十九、... 八十、... 八十一、... 八十二、... 八十三、... 八十四、... 八十五、... 八十六、... 八十七、... 八十八、... 八十九、... 九十、... 九十一、... 九十二、... 九十三、... 九十四、... 九十五、... 九十六、... 九十七、... 九十八、... 九十九、... 一百、...

しばらく骨やすめ

両日とも終日雪。それも今までのような粉雪ではなく、水気を含んだポタン雪だ。ほんとにうま  
くやった。もし、きのう今川が登頂成功の報をもたらしていなかったとすれば、どのようにキナキ  
ナすることだろう。しかし今は、私たちは、登頂隊員を、それから同様に長らく高所でたたかっ  
クタクタになっているに違いない加藤以下のサポート隊員を、早くB・Cに下ろしてやりたい。い  
や、早く彼らに会ってじかに話を聞きたい、その喜びをしばし遅らせるだけのことだ。  
カラコラムはいよいよ雨季に入ったらしい。

八月六日・七日

八月八日

天気はようやく回復した。きょうは下りてくるに違いない。脇坂、岩坪、芳賀をC1まで出迎え

に出す。

全員は七日、雪をおかしてC2まで下っていたが、この日、加藤、藤平、平井、中島、潮田の五人はベース・キャンプに下った。山口、高村の二人は、C2に残って、撤収に当る。

三日間の降雪は踏み跡をすっかり消してしまい、彼らは一歩々々と慎重に歩まねばならなかった。彼らはC1に着いて、その変りはてた様相に驚いた。片側はサーブ用、片側はポーター用と、二列にきれいに張られたテントの間に、巨大なクレバスが大きな口を開けている。最初C1を建設したさい、広々とした雪のプラトーと見えたところが、ハチの巣のようにクレバスだらけの荒地となっていたのである。テントの下は陽が当らず、雪が解けぬため、テントだけが雪面から一メートルほども高く、何かお社のようになっていた。

そこから下のアイス・フォールの変化は一段と甚だしかった。固定ロープをつけた水壁そのものが見事にひっくり返り、ロープのあとも見えない。五〇メートルおきに立てた赤旗も、ほとんどどこかに消えていた。氷河はやはり生きている。このあたりで、およそ一日一〇センチは動いているに違いない。すさまじい響きを立てて崩れる氷塊の、あの腹にひびくようないやな音、危い雪の橋、アイス・フォールが終ってからのトラバースはバドルの連続。チョゴリザは最後まで彼らに楽々とした気持を許さなかった。

B・Cではただもどかしく、彼らの帰着の遅いのを案じていた。午後もかなりおそくなってから、

「見えた」という叫びで双眼鏡をのぞくと、白いトラバースのところに黒点がつづく。数は少し足りないが、だれかが撤収残務のために残ったのだろう。それがだれか見わけがつかない。日が暮れてきたので、さらにポーターを迎えに出す。

七時半、薄暗がりの中を潮田カメラマンが早足で近づいてきた。握手もそこそこに、早口で

——先生、すぐそこに加藤さん、藤平さん、みんな来ています。このベースへ着いたところを撮らねばなりません。たのみます。

そして彼は忙しげにカメラを合わせ、人夫たちにフライヤーを持たせる。フライヤーのてらし出した泰安の顔。何という瘦せ衰え。私は一月にわたる彼の辛勞のすべてを読みとった。藤平、平井は疲れてはいない。平井などむしろ子供っぽく元気だ。握手、歓呼。

「望嫁亭」に全員集まって、わかしておいた紅茶を飲んで語り合う。ややせき込んで、断片的な言葉の交錯したやりとりだ。夜は残り少ないのウィスキーを飲む——といってもほんの一ぱいずつの程度しかないのだが、タップリ飲んだような笑声、歌声。

八月九日

快晴。全員休養。ポーターを撤収のため上にあげる。

B・Cのそばには、いつもカラスが一つがいて、いやな声でなく、私たちのキャラバンについ

てきたのだ。こちらが段々やせてきたのに、まるまる太っているのがシャクにさわり、一、二度石をぶつけたが、相手にしない。第一回攻撃のさい、いつまでも帰らぬ登頂隊員を山口、中島がさがしあぐんだとき、ドームのそばに現われて、その鳴声で、たまらなく嫌な思いをさせたというのは、こいつらだろう。

ハエがやはりついてきたが、やがて死んだらしい。三センチたらずのクモをテントの中で見つけたときは、ふと懐しかった。ユキムシはもちろんいる。

ほかに生きものといえば、山口が七〇〇メートルまで飼育していたシラミ。人夫係をしていた彼は、いつしかうつされていたらしい。かゆいので高所で睡眠不足になやんだが、ジンマシンの傾向のある彼は、それが出たものと錯覚していた。B・Cへもどって、それとわかり、D・D・Tで退治したが、いつもきまじめな彼だけに、みんな笑って喜ぶこと。

八月十日

晴。食糧その他の状態を考えると、バルトロ・カンリ攻撃は、もはや無理のようである。

朝、大シユクール、小シユクール、チョビヒゲの三人をポスト・ランナーとして、アスコールに走らせ、クーリー五五人をできるだけ速かに、ここに上げさせることにする。大シユクールとチョビヒゲは、そのままスカルドまで帰らせる。二人は電報、隊員たちの手紙、新聞への記事などを持

って行くのだ。

《Chogolisa conquered, August 4th, all the members well, B. C. Kuwabara》

ローマ字日本語だと、検閲その他で遅れるおそれがあるので、英語にして、京都留守隊の四手井、カラチ大使館、朝日新聞、ラワルピンディ放送局に出す。P・Aには手紙を持たせる。

午後、岩坪、芳賀が出迎えに行き、五時、山口、高村とともに帰る。これで全員、B・Cに無事帰着した。

最後まで残しておいたジョニー・ウォーカーをあけて、夜ふけまで大コンパ。

八月十一日

終日降雪。C1に集めた荷物撤収のためポーターを上げるはずのところ、彼らは疲労を理由に休養を要求する。雪でもあり、明日に延期。

八月十二日

終日、断続的に小雪。撤収また延期。

バルトロ・カンリ放棄確定。その代りビアンジェ氷河に偵察隊を出す計画をたてる。

昼前、イタリア隊の副隊長フォスコ・マライーニ、ボナッテイ、ドクターなど四人が、クーリー

二人を伴ってやってきた。彼らはガッシャーブルムIVの攻撃にねばりにねばったが、ついに八月六日午前、このボナッティらが登頂に成功したのだった。

マライーニ君の日本語は実にあざやかで、紅茶を出そうとすると、

——日本茶はありませんかね。久しぶりで飲みたいな。それ宇治ですか。  
最後のヨーカン、ノリなどを出すと、彼らは喜んで賞味した。

攻撃キャンプは七二〇メートル、さらに七五〇メートルにつくり、そこから酸素を使用せずに登ったが、最後の五〇〇メートルはヨーロッパ・アルプスの五級にあたるアクロバティック・クライミングであつたらしい。マライーニ氏は彼の著書『チベット——そこに秘められたもの』の邦訳を記念に私にくれた。最近刊だが、出版社からバルトロ氷河マライーニ様として速達小包で送られ、一週間前に着いたところだという。彼は小包のまま持ってきたが、一五七五円の切手はあつた。彼は英語、フランス語のほかにバルチスタン語まででき、人夫とはそれでやっている。彼の隊につけられた連絡将校の悪口は、私にフランス語でしゃべった。君の方はどうだったか、ときくので、なかなかよくやってくれた。不満はないと答えた。ほかの三人は英語もあまり達者でないが、隊員たちとお互いにブロークンで徹談している。

お互いに歌の合唱をしたが、これだけはてんで問題にならない。むこうは四人ビッター合うが、こちらは二人みんなが知っている歌をみつけるのがすでに困難。「くれない燃ゆる」「ここは御国

を何百里」それから「ソーラン節」くらいしかなく、それも合唱にならない。ソ連に行ったときも感じたが、日本人はどうしてこんなに合唱がヘタなのであろう。いまは歌え運動などというものもあるのだから、近い将来もう少しましになるだろうが、わが若い隊員はそういうものには入っていないらしい。マライーニ君は「浜なす赤き磯べにも」という北大の歌をみごとに歌った。

お客はいずれも快活な人物で、好印象をのこした。お互いに成功しているということが、このまどいを楽しくしたことは確かだ。もし一方が不成功とすれば、もちろんコンプレックスにおちいぬよう努めるつもりだが、うまくいったかどうか十分の自信はない。

イタリア隊の予算は、マライーニ君がリラ・ドル・円と換算したところによると、約六〇〇〇万円。おそろしくぜいたくなものだ。一九五四年のK2隊も一億だった。イタリアは国としてさほど富裕でないが、民族の誇りといったことに敏感で、政府も多額の国費を出し、募金もうまくいくらしい。ともかく世界最富裕のアメリカに数倍する費用を遠征隊に出しているのは興味がある。従って彼らはクーリー、ポーターたちにたいしても、P・Aの正式規定どおりに給与しているらしい。「もっとも肉を除いては」といったが。私は「あなた方があまりたくさん物をやるので、われわれ貧乏部隊は、つりあい上いささか閉口する」と言った。靴の損料も一〇ルビー出し、ポーターには数枚の毛布をやり、登攀に使った固定ロープも、はずさずにそのまま与えたいらしい。

帰りぎわに私はボナッティ君にヘルマン・ブルの遺品を手渡しした。必ず未亡人の方へ届ける

からと、喜んで、しつかとリュックサックにつめ、おりからまた降り出した小雪の中を、けきコン  
コルディアへ直行した本隊のあとを追うて、モレーンの上を走るようにして帰った。彼は当年二八  
歳。マライーニ君によると、現在イタリア最高のクライマーといわれるが、数日前に困難な登攀を  
終えたような疲れは全く見えず、血色が鮮やかで、ぐらつきやすい石の上を飛んで行く、そのバラ  
ンスのよさは、うっとりときさせるほどのものがあつた。

八月十三日

曇。ときどき小雪。脇坂、平井、岩坪がポーター六人をつれて、C1の荷下ろし。夕方、雪の降  
る中を帰ってきた。これで撤収完了。

八月十四日(十七日)

毎日小雪。いよいよ季節が変わつたと見える。

十五日朝、雪をおかして平井、芳賀、バクリーのビアンジェ隊が出発した。氷河をつめ、ステス  
テ峠に出て、シャクスガムの方を偵察、ウルドカスで本隊を待つ約束。この隊長には当然脇坂を当  
てるつもりのところ、彼の胃はまだ本調子でないので、平井に代えたのだ。

毎日なすこともなく無聊に苦しむ。私はマライーニ君の『チベット』を読み上げ、あとはツィ・

テン・ジャックとファイヴ・ハンドレッド・ゲームのバルトロ名人戦に参加する。

人間はひまになると、食べもののことを考える。隊員が毎日交代で料理責任者になつて腕くらべ  
をしたが、もうろくなネタがなくなつて競争は成立しない。

わが隊の基本方針は、荷物をできるだけ軽くというところから、現地食主義であつた。その中心  
は、アタと称するフスマのたくさん入つた小麦粉、ギーという羊からとつた粗製バター、ダルとい  
うソラマメに似た一種の豆の三つである。

主食はチャパティ。これはアタを水でねり、せんべいのようにのばし、鉄板で焼いたものだが、  
鉄板のかわりに焼け石を使うこともある。これにはギーであげたもの(フラタ)、ダルを砂糖で煮て  
サンドウィッチのように間にはさんだものなど、いろいろ変種がある。朝食用には、チャパティを  
小さく切り、ギーとミルクの汁にうかべてサイトンのようにした、バライエというのがある。ウル  
ドカスまでは、これに山羊、ニワトリ、玉子が副食としてせえられた。

B・Cから上は、アルファ米(炊いた飯から水分をぬきとつたもの、湯を加えると熱い飯になる)とビー  
フンとカンパンを使った。B・Cはチャパティと、三日に一度アルファ米という予定だつた。とこ  
ろが私はどうもチャパティが好きになれない。スカルドで軍糧秣をゆずりうけた分はよかつたが、  
アスコールで買ったアタは砂がたくさん混つていて、とてもたまらない。

或る夜夢を見た。大学の私の研究室にいつも出入りの食堂の出前持が、岡持で八十円のライスカ

レーを持ってきた場面だ。私はこの遠征にきてからも、いつもどおり、ほとんど夢を見なかった。ともかく、誰と顔のはつきりわかる個人を夢見たのは、この出前持氏だけなのはおかしい。この夢の話をしたら若い食糧係が同情して、隊長はB・Cで毎日米を食べてもよろしいということになった。もつともアルファ米の総量はきままっているので節食せねばと思ったが、幸か不幸かやがて食欲が減退して来て、一袋（一六〇グラム、一合四勺にあたる）を二食で食べて苦にならなかつた。バターは炎熱で分離していたが、これでめしをいたため、塩鮭を少し加えたチーフアンと称するものをよくこしらえた。朝食はバライエである。

私はうまいものはもちろん好きだが、食べ物のことはやかましく言わないタテマエで、女房にもこの点あまり文句をいわない。日本人が食べ物のことを人生の重要事と考え過ぎるのが氣にくわなので、食べ物雑誌には執筆しない方針にしている。

出発前に食糧係から、隊長特別食というのを二箱ばかりつくってもよいから、希望のものをいってくれ、といわれたが、私はみんなと一しょのものでいいさ、トマト・ジュースが一日一缶、ほかに特に希望はない、などと答えてしまった。わが身の実力のほどを知らぬタテマエ的道德主義の失敗である。

B・Cでひとりになってから、隊長食という箱を開いてみると、トマト・ジュースのほかには幾何かのバター、ソーダ・クラッカー、浅草のり、煎茶、たくさんのミカンの缶詰、カキモチである。

動物性蛋白食糧としてはハムとベーコン、これは上等品を多量にもってきてあったが、B・Cで開けてみると、包装が悪くてインド洋の炎熱でみんなくさりかけていた。もったいながつて、これくらい大丈夫です、私が生体実験します、などといって食べようとする隊員がある。攻撃直前にブトメイン中毒が起つてはたまらない。私は隊長命令でこれを禁止した。そうなると、あとはサブとイワシの缶詰、つくだにが少量あるだけだ。それが、ひどく安物の味なのである。

味はわかっているからいけないうが、いざとなればどんなものでもおいしく食べ、それだからだを支えようでありたい、というのが私の理想だったが、理想と自分の実力がどれほどかけはなれているか、あまりはつきりしすぎて、いやになった。食い物あさりなどした覚えはないが、私の舌と胃袋はいつしか教養がつきすぎていたのである。

窮乏化は統制主義を生み出す。食糧係の平井が、例の愛敬のある調子で宣告する。

——紅茶は、きょうから管理にします。

紅茶は「望嫁亭」においてあり、勝手にのめたのだが、これからは一々許可を得なければ沸かすことができない、というわけである。彼のビアンジェ先発後も、この統制主義はつづき、粉ミルク、カタクリ粉、等々にまで及んだが、やがて解除。品物がなくなつたのだ。

ちゃんとした汁が作れなくなつたので、隊員はわずかに残つた、とろろこぶ、塩鮭、ポリエチレンの袋の底にくつついたつくだ煮、等々の残品をめいめい自分の食器に集め、最後まで十分にあつ

味の素と塩を加えて熱湯を注ぎ、かつてに飲み物をこしらえた。これを「北陸汁」と呼ぶことになったのは最初に試みた藤平、脇坂が北陸人だったためかと思う。この隊にはほかに私と平井がいて、北陸勢は優勢だった。雑談のほずみに上等と下等というたとえに、だれかが汽車でいえば東海道線と北陸線、といったのに対して、この四人が抗議を申し込み、北陸組ということが、よく冗談の種になった。

晴れ間に私と藤平は、潮田に散髪してもらった。ドクターの外科手術用の鋭利なハサミを拝借したので。このカメラマンはあらゆることに器用な人だが、散髪もくろうと並みとは驚いた。ふた月ぶりの調髪で気持がよい。ヒゲは毎日そっていたが、ポマードは使わなかった。それをくし目正しくつけて楽しむ。

私の胃酸過多はノルモザンとプロバンサインがなくなるとともに快方に向い、やがて忘れた。

八月十八日

快晴。まさに二週間ぶりの好天気。久しぶりに見るヒドン・ピーク、はるかに世界最大の陽石ムスタグ・タワー、そして私たちのものになったチヨゴリザ、とりどりに美しい。それらに乗せる空の色は青さを増し、秋の空だ。日なたにいても、もう暑さを感じない。

クーリーがひよつとするとくるかも知れぬ、と期待したが、それはムリだった。帰途のキャラバ

ンに備え、梱包を始める。

八月十九日

快晴。ワジー大尉は帰心矢のごとく。イタリア隊は背水の陣をしき、登頂の成否にかかわらず、八月十日にクーリーをベース・キャンプへ来させる命令を出していた（実際きたのは十一日）。そして登頂が成功すると、六日目には撤収したのだが、日本隊は全員B・C集結後、十日も遊んでいる。もちろん大尉は私たちに文句をいうわけではないが、クーリーの到着が待ちきれぬと見え、きのうもポーターを一人つれてかなり遠くまで偵察に行った。けさも早くから出かけた。B・C生活中、個人テントに籠りがちだった人とは思えない。

午前十一時、大尉は手をふりふり笑顔で早足に戻ってきた。やがてクーリー五三人が、村長の長男に率いられて到着。

とたんに、何とみやかましき。私たちはこの世界の果てで、すでに人間世界にもどったのだ。盗難のおそれもあり、一つのクレバスを限り、それからこちらには、テントわきには、近よらさぬように命じたが、守られるはずもなかった。彼らは何か余りものがないかとあさり歩く。貧乏部隊で期待にそわなかったようだが、ピースの空缶など争って奪い合う。

彼らが食糧を持ってきてくれたのは、うれしかった。屋飯は久しぶりに玉子が二個ずつあたる。

羊肉もきて、北陸汁からの解放だ。

明早朝出発、帰路につく。私はベース・キャンプに四十三日くらしたことになる。

夜、整理をおえて、余った木箱、紙箱、その他の廃品を山とつんで、大キャンプ・ファイアーを  
楽しむ。例の乃木大将のような顔をした老メイトが木箱を燃やすのはもったいない、私どもにいた  
だきたい、といってきたが、だれが聞くものか。夜ふけまで火を囲んでめっちゃめっちゃの合唱だ。

（以下は非常に淡く、ほとんど読めないような文字で書かれた文章が続く）

### 楽しき帰路

（このページには、左側のページと同様に、ほとんど読めないような文字で書かれた文章が、縦書きで記されている）

八月二十日・コンコルディア

快晴。帰りのキャラバンになって、天候が好転したのはありがたい。八時半、B・C出発。

クーリーに荷物を割りあててみたら、およそ五人分残ってしまった。クーリーの食糧をかつがすクーリーの数を加算するのを忘れていたのだ。やむなく残ったダルは捨て、アタはクーリー各自に食糧の前渡しとして持たせることにする。金さえもらえば、いくらかついてもいいというのが、たくさんいるのだ。日本隊ほど何もかも持って帰った隊は少なからう。捨てたものといえば、空のプロパンガス・ボンベくらいだ。これを拾って自分の荷につけた欲深がいたが、あまりの重さに半日行つて捨てた。

ルートの、ベース・キャンプを張っていたモレーン沿いに、その上、またはそれに沿った氷の上に行く。くるときは二日かけた行程だけに、ひどく遠い。久しぶりの行動のために疲れやすいのか

もしれぬ。もうこれで再び見られないかもしれぬチョコリザ、アイス・ドーム、バルトロ・カンリ、それらを眼底に残しておこう、という殊勝な口実をもうけて、何べんも休む。五時、コンコルディアに着いたときは、ぐったり疲れていた。

K2は雲にかくれて見えない。

八月二十一日・ビアンジェ・パロ

くもり。きょうはいわゆるバルトロ・アヴェニュー。モレーンの石があまりグラグラせず、歩くのに余裕があるので、隊員たちはバルトロみやげに、きれいな小石を拾いながらゆく。キャンプに着いてから、その品評会が大へんだ。

途中で数人のアスコーレの村民に会う。イタリア隊のベース・キャンプに行くという。そこに残された物を、というより、おそらく盗んでどこかの岩かげにでも隠しておいたものを、取りに行くのだらう。彼らにとって、村からヒドン・ピークのふもとまでの往復など何でもないのだ。ビアンジェから帰った平井らにきょうウルドカスで会った、と聞いて安心したが、あらかじめそこまであげさせておいた、ヤギ二頭が逃げてしまった、というニュースにはがっかりした。アスコーレまで肉類は何一つ食えないのか。

三時、ビアンジェ氷河との出会いの、およそ中間のあたりに、キャンプする。

八月二十二日・ウルドカス

いままで乗ってきたモレーンと別れ、左岸へと斜めにバルトロ氷河を横断して下る。氷河の上に幅一〇メートルくらいの川が流れ、その渡渉でポーターの一人がひっくり返ったが、無事。

ポーターやクローリーは、この辺までくると、隊員より有能だ。つまり、どんなささやかな踏み跡も決して見のがさない。彼らをやりすごして、かっぴに歩くと、私たちは、踏み跡をうっかりすると見失い、不必要な上り下りをさせられることがある。

ウルドカス。久しぶりに見る緑、黄色のケシ、エーデルワイス。先着の平井たちが気をきかせてくれたので、テント場は清潔だ。その快適な気持を増強したのは、思いもかけぬ御馳走だった。イタリア隊が残していたカンヅメを六、七〇見つけたのだ。牛肉の大和煮、牛の舌、サラミ・ソーセージ、上等チーズ、等々。

平井、芳賀が嬉しそうにしているのは、カンヅメを見つけたからではない。ビアンジェで自信をつけてきたからだ。

十五日にB・Cをたった彼らは、二〇ないし二五キロの荷をかついでモレーンの上を飛ばし、その夜はゴレ・パロに泊り、翌日はビアンジェ氷河に入り、十七日はアイス・フォールを越えて、五〇〇メートル付近にキャンプ。十八日は快晴を利用してステステ峠(五八〇〇メートル)に登った。十九日は氷河の右またをつめて、七一七〇メートルのピークをねらった。日本アルプスで第一級といえ

る、雪と岩の壁のクライミングによって約七〇〇メートルの稜線にまで達し、シャクスガム流域を展望したが、時間がきて引返した。しかし日本で積雪期の岩登りに熟達したものが、十分高度馴化のすんだ身体でガンバレば、酸素不足にたえて、七〇〇メートル級の岩山はこなせる自信をえたというのである。しかも彼らの食糧はカンパン以外すべて現地食だったのだ。

ピース二〇缶(一〇〇〇本)が盗まれているのに気がつく。カートン・ボックスに入れてあったので、それを知っているのはポーターしかないはずだ。大尉が憤慨して、パキスタンの国辱だ、と演説をブツたが、おそらく途中のどこか岩かげに隠してきたタバコが、姿を現わすはずもない。

八月二十三日・無名のバロ

くもり。できればバイジュまで飛ばすはずだったが、リリゴから往路と分れ、左岸沿いにアーブレーション・ヴァレーを四十分ほど下って、いよいよバルトロを右岸に横断する、そのかかりのところに泊まる。

きょうのルートは、ガラガラ石の上ばかり。少し気を許すと、足をさらわれる。きょう大ぶ石車に乗った泰安と、なぜこんななヤミクモに飛ばさなければならぬのか、と疑問を発しながら、ポツポツ歩いた。毎日先頭をきる大尉も、きょうはリリゴを過ぎると大ぶへばり、バイジュ説を撤回して早泊りにしようといったのだ。二時四十分着。

八月二十四日・バイジュ

きょうの水河横断は、上り下りが案外少なく、それにアメリカ隊、イタリア隊と多数のクーリーが通った踏み跡がしっかりしていて、楽だった。ツングゲのところを斜めにどんどん下り、右岸の、堆石ではなくて、山から出たほんとうの砂が氷河との間を埋めているところを下る。その土を踏むという足の感触が、氷河との別れを実感させ、規定しがたい感慨をおぼえる。

できればバイジュとバルドマルとの中間まで行く予定だったが、ツングゲのあたりから雨が降り出し、やがて土砂降りとなる。バイジュの谷のカンバの繁みの中にかくれ、しばらく論議したが、泊りとする。

雨中にテントを張り終り、一息入れたと思ったら、雨はカラリと上った。久しぶりに半休もよろう。

山口は今川とテントにこもって、また何の計算をしているのかと思ったら、暮を囲んでいるのだ。泰安はさっそく釣竿を持って出かける。二〇尾あまり。その塩焼きはうまかった。

夜は暖かで、羽毛服はもうやっかいだ。下界へ下りてきたという感じ。

八月二十五日・ジュラ・バロ

けさ出発のさき、空荷のクーリーを発見した。木箱一つ背負ってすましているが、毎朝恒例の荷

物配分のゴタツキで調べたら、中には何一つ入っていない。ワジー大尉は激昂して、その箱を河に投げこもうとした。マハンがその箱にしがみつぎ、大尉をなだめた。木箱は貴重品なのだ。

午後三時、デュモルド谷の少し手前で、例の猛烈な砂嵐に会う。ここで泊るか、吊り橋まで行くか、問題になった。ポーターのアタが不足で、あすはどうしてもアスコレに着かなければ困るということになり、強行することにする。クーリーたちにすれば、どちらにしても十日分の賃金もらえるのだ。(実質は七日だが、勘定はパロ宿泊地の数による。もしそうしなければ、彼らは一日に二帳場歩いたり絶対にはない。)だから彼らにとつては、どちらでもいい。泊った方が一日たでで食事にありつくということにもなる。

クーリーたちの話では、橋のたもとまで、途中の道はひどく悪く、かつ遠いということだったが、ゆっくり歩いて二時間だった。クーリーだけでなく、ポーターでも、彼らにルートの距離を聞くことは全く意味がない。全然その感覚がないのである。数はおよそ一二くらい以上数えられないのだから、ムリもない。ただ、お前が歩いて何時間かかるか、という問い方なら、ポーターは比較的にちゃんと答えられる。

吊り橋の近くにかかったころ、イスマイルが「ウルドカスで逃げたヤギが見つかって、クーリーが追いつ下ろしてくる」という。もちろん、私たちには何も見えはしない。やがて彼の指さす斜面に砂煙が上りだした。それもしばらくしないと、ヤギとクーリーの姿ははっきり見分けられなかった。

これを発見し追いつ下ろしたクーリーは、さつそくボクシス一〇ルピーを要求する。

吊り橋のたもとのキャンプ地はジュラ・パロという。そこから橋まで半マイルもあるような話だったが、五〇〇メートルしか離れていない。

到着直後、猛烈な夕立ちとなる。脱走罪でさつそく死刑に処した二頭のヤギのシオルバー(汁)に期待したが、夕立ちでにごった河水で調理したから、骨の間までくまなく細砂が入っていて、一向にありがたくない。

夕食後、打合せ会。スコロ・ラ越えをどうするか。私自身はさして興味はない。それに、ここは一九五五年に今西、中尾が越えた記録があり、AACKとしては、むりに越す必要はない。ただ藤平は越えたいというので、ビアンジュの場合と同様、小部隊で行かせることにする。

八月二十六日・アスコレ

晴。夕立ち。きょうは是が非でもアスコレに出なければならぬので、五時四十分出発。直ちに渡橋。

吊り橋は、兩岸の岩壁が迫ったところであり、カンバの細い枝を編んだ綱でできている。ネパール・ヒマラヤなどにあるのと構造は同じだが、ここのは作り方が一そうお粗末だ。ところどころロープで補強する。橋の横断面はV字型になっている。その両上端が手すり、とんがった下端の幅一

五センチくらいのところを踏んで行く。体重がかかると、Vの両端が接近してIの形になり、万力のようにからだを締めつける。大きな荷物をかついでは渡れない。そこでクリーリーが五人ほど、橋の要所々々にがんばり、片側に腰をあて、両足で他の手すりを押しやり、間隔を保つのだが、渡るものはそのクリーリーの脚をまたいで行かねばならぬ。そのおりどうしても下を見るが、ものすごい急流で、からだが無意識的に反対側に動き、それが重なると、橋全体がぶらんこのように揺れだす。そうなつてはおしまいだ。ただ前方をにらんで渡るのがコツだ。かつてスイスから来た優秀なガイドだが、神経質なのがいて、どうしても渡れず、目かくしをして土地の工夫に背負われて通過したという話もある。私は目まいのしないたちで、サッサと渡つたが気持のいいものではない。

脇坂はまだ完全になおってはいなかった。明け方、胃が猛烈に悪くなり、嘔吐を重ねる。ドクターが注射して、橋は自力で渡らせたが、そのあと歩けなくなり、ポーターのハサンが背にかつぐ。橋のたもとからコロフォンまでずっと岩壁のへつりだ。潮田はカメラを持たせておけば、どんな危いところでもスタスタ歩くが、きょうは空身なので足許が危い。一度私の背中に落ちてきた。そうした道をおんぶで歩くのは危険この上もないが、ハサンは前にもムスタグ・タワの英国隊長を山からアスコレまで背負つたことがあり、慎重、安全にからんで行く。

私は神経質なのか、脇坂発病と聞いたこの日は、すっかり元気でピッチが上がる。コロフォンに早く着いたが、気がかりなので、脇坂の来るまで待つ。ここで休んでいたクリーリーの荷の中から、

ドクターの医療箱を取り出し、ここに置いておく約束だったが、そのクリーリーはとっくに出発していた。村へ帰るといので、この日のクリーリーのスピードはやたらに早い。平井に追いかけさせる。彼はマラソン選手のように急いだが、村の手前でやと追いついた。病人は、しばらく岩かげに寝かせると、歩けるようになったので、ドクターと潮田にあとを頼み、アスコレに向う。

村の手前で夕立ちに会い、岩かげで休む。晴れたあと、バルトロ側にすばらしい虹が出た。村は近い。私は「楽しい帰路」という言葉がふと頭にうかび、心のゆとりを感じた。

久しぶりの人家。うれしいはずなのだが、あの不潔さと喧噪を思うと、それは半減する。例のテント場には、ちょっと油断すると、クリーリーや村民がなだれ込み、追い出すのに一苦勞だ。今夜は盗難率最高で、嚴重に注意しなければならぬ。

着くなりドクターは往診を求められた。行きに人夫徴募その他で私たちを助けてくれた村長が死にかけているのだ。私がお礼に養殖真珠を一粒わたしたら、いきなり口に投げこんだ爺さんだ。こちらが叫んだので、はき出したが丸薬と思つたらしい。結核とガンの併発で日数だけの問題だとい

う。  
村長の息子が、お礼のつもりか、ゆで玉子をカゴに山のように盛って、持ってきた。私はたて続けに四つ食べ、生玉子もあると聞いて、それを一つ流しこんだ。うまかったというのか、生理的欲求を満たしたというのか、ともかくよかった。

天候の見込みも悪く、病人も出たので、スコロ・ラ越えは取りやめにした。スカルドへはデュツソーからイカタで一日で下れる。それと比べてスコロ・ラで、もし難渋すれば、遅れてしまつて意味がないのだ。

八月二十七日・チョンゴ

朝、加藤、今川とマハンの家庭訪問をする。彼は喜んで待つていてくれた。お盆のようなものにゆで玉子を五つばかりのせて出した。家はこの辺の標準農家。石を積みかさね、その間を泥でつめてある。二階建のようになり、階下には家畜（ヤギ、ニワトリ）をおき、下が土間の居室。部屋の中真に切り口があり、そこからハシゴで下へおりられる。またその上は天井が四角く切つてあつて、天窗になつてゐる。かまどはキャンプ地のそれにも似て、そこらの石を三つばかり集めただけだ。この土間の周囲に五つばかり狭い寢室のようなものがついてゐる。その木の扉は開けてくれなかつた。細君はどこかへかくれたのか姿なく、老父と子供が二人いた。この居間にもニワトリは平気で入り込み、不潔というのではおそらく言い足りまい。貧困と不潔とは必ず不可分のものか。

このあたりの村民たちは、四、五〇〇メートルのあたりから灌漑用水をひき、急斜面の荒地に小麦とソバを作つて生きている。木製農具を使つてゐるものが多く、畑には雑草が作物の半分くらいしげつてゐるところがある。これで食糧は大たい自給自足、というのは、生まれた赤ん坊の半数

以上が数カ月で死んでしまうからだ。

アスコール、トグノル、チョンゴ、村々のソバ畠が美しい。薄桃色の花がちょうど満開なのだ。チョンゴの手前を山手の方へ少し上つたところに、温泉がある。もちろん露天で、浴槽に当る岩のくぼみも深くはない。下には泥が一ぱいたまつていて、入るとにごつてしまふ。温度は三五度、上がると寒いくらいだ。風の静まるのを見越して上がらねばならぬ。しかしこの三〇〇〇メートルの地点から周囲の五、六〇〇メートルの山々を眺めながら、氷雪とガラガラ石の道を何日も歩ませた足を、のんびり伸ばして温めてやるのは、何よりの悦楽だ。行きに入らなかつた私などは、ワルペンディを出てから、実に七十四日目の入浴だ。

裸になつて下着を振ると、ちょうどフケのような白いものがパラパラと落ちる。垢だ。しかし清浄なところだから、その垢は少しも黒みを帯びてゐない。湯につかると、恥かしいほど垢が出るが、一挙にきれいにならう、などというのはムシがよすぎるだろう。瘦せたことは知つていても、それをまともに見るのはうれしくない。ただつかつて、タバコを吸いながら、ぼんやり山を見つてゐるがさう。

私はベース・キャンプでひまにまかせてヒゲはそつていたが、上へ登つた隊員にそんなひまのあらうはずはない。一たんのびると、何となくそり落すのが惜しくなるものらしく、そのままにしてゐる隊員が多かつたが、ここで割愛した。加藤や潮田のように四〇を越したものは別として、はた

ちこそこの、子供っばさをどこかに留めたかわいい顔に、ヒゲを一ぱい生やしているのは、変なものだ。

——ヒゲはそってしまえ。隊長命令だぞ。

私は若い隊員たちに笑いながら、いった。平井はセルフ・タイマーをかけて入浴中の自分を写してから、かみそりを使い、すり落したものをていねいに紙に包んだ。お母さんへのみやげものでもあろうか。

この温泉はサーブ専用で、人夫は入らない。彼らのためには、少し下った所に別の温泉がある。私にはその方がきれいに見えた。現地人には金をやるときでも、決して手渡しせず、じべたに投げつけて拾わせた、というイギリス人の差別感のなごりかと思つたが、真相はむしろ回教徒たちが、けがらわしい異教徒と同じ浴場には入りたくない、という下からの差別感によると考えた方が正しいようだ。ヒューマニストをもって自認する私も、実はこの差別待遇がたいふしもある。B・Cで人夫の一人が、傷の化膿だといって診察を求めたとき、ドクターがあとで、あれはひよつとするどレプラじゃないか、といっていたから。

村へ入ってからは、毎夕ドクターのテントの前は患者で一ぱいだ。ゆきは投薬もできかねたが、さいわい山中で病人がほとんどなく、帰途は薬も余裕があり、まともな治療がしてやれて嬉しい、と中島もいう。

アスコレでは、私たちをさんざん悩ませた、煽動者「イタ公」も青い顔をして現われた。足に大怪我をしたのが化膿して、意気銷沈している。ほっておけば助からないものだ。マジナイにつけている草の葉をすてさせ、小手術をし、ペニシリンをぬり、ズルフォン剤をあたえておいたから、大丈夫だろうという。

一〇ばかりの可愛い女の子をみたあと、ドクターが、ダメです、という。ひどい中耳炎で、手術をすれば助かる率があるが、その用意もなく、またそれには数日間滞在しなければならぬのだ。

そんなことはできない。あの子は私たちがスカルドへ着くまでに死ぬのか。あまり診察がおそくまでつづくと、私は、そろそろ切り上げろ、と声をかける。ドクターもまた人間で、疲れることは他の隊員とちがいはない。それに明日もつらい山道だ。万一ドクターがへばれば、隊員の健康管理ができなくなる。理屈はそうだが、なにかムゴイような気がどこかにする。

私はヒューマニズムに立っているつもりであった。人種をこえて、人間は人間として大切にせねばならぬと思っている。そして、このあたりのバルチスタンも、その貧困と不潔の故に軽蔑はしたくない。ある外国の登山隊長のように「彼らは人間ではない。獣人だ。彼らに飲食と睡眠と性交以外のことがやれようとは思えない」などという気持は少しもない。彼らの輸送力なくして遠征は成り立たないのだ。クーリーの手くせの悪さと仲間意識の不足には、もちろん腹が立ったが、ある西洋隊のように、けつたり、なぐつたりはしなかった。もとより私たちは目的をもつ行動者として、純

粹ヒューマニストではありえなかった。しかし、西洋の諸隊にくらべて、ヒューマニズムという点で、見劣りしたとは絶対に思っていない。このヒューマニズムなるものはキリスト教とギリシア文化から生まれた、などという系図しらべほどバカバカしいことはない。問題は思想を現在いかに行動化するかにあるのだ。

登山にしても同じだ。徳川期に剣岳は登られている。しかし、今日の登山は西洋起源にまちがいはない。問題はそれが実績をあげているかどうか、にだけある。私たちはチヨゴリザの山頂に日章旗をかかげて、国威発揚とよろこぶのではない。ただ、こうした客観的実績をつぎつぎと積み重ねることによってしか——それは登山でも学問でも芸術でも、同じことだが——民族の自信はそでない。そして自信なき民族はダメな民族なのである。

八月二十八日・チャポ

早朝、ポーター二人をデュッソーでの渡河および河下りのイカダの交渉のために、ユーノーへ先発させる。

途中猛烈な夕立ちに会う。落石のある悪場は事なく通過したが、往路はここまでみな緊張してきたので、短時間と錯覚していた。だから悪場をすぎると、すぐチャポのような気がしたが、三時間かかり、うんざりする。

村の周囲はすべてアンズの木。それが枝もたわわに実っている。久しぶりの新鮮な果物、みんな夢中になってむさぼり食らう。二〇〇もたべたのは誰か。

八月二十九日・デュッソー

ひどく暑さを感じるようになってきた。高まわりのトラバースにかかると、みんな半ズボンにはき換えた。その最高点、峠に当るところで、ゆっくり休む。デュッソーの村に入る手前に、きれいな水がある。キャンプ地へ着いてから、それを汲みにやらせたが、ボクシスールピーヤつても、クーリーたちは嫌やがってなかなか汲みに行かない。眼の前にブラルド谷がたっぷり流れているでないか、と思うらしい。彼らは濁り水の方が好きである。

八月三十日・ゴラブール

早立ちしてイカダの渡河点で待ったが、なかなかこない。村の子供がアンズをたくさん持ってきて、おこづかいをせびる。そして水晶を二つばかり出して、買ってくれという。記念に買う。イカ

ダの来るのを待つ間、今川を通訳にポーターたちに、この辺の村の状況をいろいろ聞く。土地所有には大小あり、小作もあるが、もちろん大地主はない。結婚は男一五歳、女一二歳が適齢で、まず女の家から男の方に一〇〇〇ルピー届け、男の方からは三〇〇ルピーくらいを返し、な

おアタ四〇キロ程度を贈るといふ。既婚者の姦通は目撃証人が三人なければ罪にならないというのだから、大めに見ているわけだが、未婚の娘がいたずらすれば、父はこれを殺してもいい、ということになっている。私有物と見るせいか。

イカダが三隻やつときた。まずクリーとそれを監督してスカルドまで陸路を行く高村、岩坪とワジー大尉を渡す。大尉は、この下手でアメリカ撮影隊の遭難があつたというので、イカダを危険視して、どうしても陸路を行くというのだ。

残りの隊員一〇人は、私と副隊長のベアラーとしてのイスマイル、きのう足を捻挫したハサンを加え、三隻のイカダに分乗して河を下る。今度は長い舟旅だから、イカダのワクの上にテントのシートとエア・マットレスを敷き、リュックサックを背中に当て、それによりかかつて足をのばし、楽な姿勢をとる。一度激流で波をかぶつてからは気がついて、ポリエチレンを足にかけた。

このイカダ下りほど壮絶なものはない。急流では急行列車のスピードを出す。一メートル以上の大波の乱れ立つ激流、そして、皮袋が河底にきしむ浅瀬、肝を冷やすこと一再ではない。激しかった、またそれだけになつかしい、山々が見る見る消えてゆく。

一番の難所では、イカダを捨てて岸を歩き、船頭たちはイカダをかついで越すのである。

一隻に四人ずつの船頭たちは、下半身は全裸体だ。しょっちゅうぬれるのだから当り前だが、婦人遠征隊はちよつと困るだろう。回教のおきてで毛はそつてある。難所どころでちよつと休息す

ると、彼らは河原の熱砂の上にべったり尻をおろし、大切なものにしきりに砂をかけて温めている。私たちは一日でスカルドまで飛ばせるものと思ひ込んでいた。ところが午後、右岸ゴラブル村の下手の河原に止めてしまい、先へ行こうとしない。あの激流にイカダをあやつるのは重労働で、長時間連続はいやなのだろう。こちらも乗る前にスカルドまで三隻一〇ルビーとはきめたが、一日で、とはつきり念をおしてないのだから仕方ない。

しかしその泊り場はころよい芝生。前を大河がゆるやかに流れ、山の上には美しく月が出る。村から離れているので、じつに静かだ。ポーターが買出しに行ったニワトリをつぶし、潮田がイスマイルと協力して最後に腕をふるった料理は、この上ない美味。わが隊はコックがいない方が食事がうまいのである。

薪はふんだんにある。大きなキャンプ・ファイアーをおこし、月をめでながら静かに歌をうたい、長い旅路の最後の夜を惜しんだ。

八月三十一日・スカルド

朝、村人が、お盆にアンズと小さなリンゴをのせ、まわりを草花できれいに飾つたのを持ってきた。このあたりの人々は、野生のバラなどを愛すると脇坂はいうが、彼らの美的感覚を示すようなことには一度も出会わなかった。きょうの届け物は、はじめて意識的な美の存在を実証したといえ

る。ボクシスはずむ。

ここからは河の流れがおだやかになる。私たちはイカダの上で、時にまどろみ、時にリンゴ、ア  
ンズをかじり、船頭がうたうものうい船歌を聞きながら、のんびりに下る。P・Aの注文でシガール  
の小学校を撮影に行く、潮田カメラマンと脇坂らと別れ、私たちはそのまま下る。あとは楽だと思  
ったが、シガール河とインダスの合流点に来たとき、今までに遭遇した最大の砂嵐がまき起った。  
全く日が暮れたように、一尺先は見えない。合流点の河原に半時間ばかり退避する。耳の中、鼻の  
中まで砂だらけだ。

スカルドの下手でイカダを降りたが、例の岩山の古城のすそをからみ、町を抜け、レスト・ハウ  
スまではなかなか遠かった。四時着。

P・Aには明朝あいさつ、と思っていたら、先方から訪問された。カラコラムにおけるアジア人  
最初の成功、と心から喜んでくれ、私の手を何度も握りしめた。手紙をみて、すぐラウルペンデイ  
へ連絡し、ただちに放送させるようにしておいた、という。(帰国後、成功のニュースは八月十九日カ  
ラチA・P電で世界中に報知されたことを知った。その電文中に、九月第一週スカルド着の予定、とあるのは  
P・Aあての手紙にだけ書いた言葉だ。)

御希望のシガール小学校の撮影は、カメラマンが今日やったはず、という、  
——それは明日になるだろう。きょうは日曜で、学校は休みだから。

山中暦日なし。曜日のことなどすっかり忘れていた。

電灯がパツとつく。何と明るく便利なものか。久しぶりにベッドのねむり。

翌早朝、P・Aは馬をとばせてシガールに向ったという。撮影を指揮し、スクリーンに自分も入  
るつもりらしい。

郵便局へ行った隊員が、たくさんの手紙と電報を受取ってきた。それを手にのせたとき、私はひ  
とびとの好意をズッシリと重く感じた。一つ一つ読んでゆくうちに、喜びと幸福の実感が胸にわき  
上ってきた。こんなに私たちのことを思ってくれる人がたくさんある。(アメリカ隊のクリンチ隊長か  
らのもある。)それなのに、もし不成功に終わったとしたら、どうだろう。そう思うと、また嬉しかっ  
た。

九月二日の夜、P・Aから全隊員が牛肉のスキヤキ・パーティに招かれた。五郎は早くから行っ  
て、ダシ作り、野菜の切り方など万端の指導にあたる。当地では肉といえば羊で、牛肉は下層民の  
食べものとなっている。P・Aは、それをおもんばかってか、私に羊肉にしようかと相談したが、  
私はスキヤキといえば牛肉にきまっている、それにしましょう、といっておいたのだった。かたく  
てよわった。禁酒のはずだが、今晚だけは特別、といって私たちにだけウイスキーが出た。適度に

酔っぱらった。

P・Aは、自分がうった大きなアイベックの角の壁飾りを記念にくれた。日本隊の成功をわがことのように喜んでゐる。飛行機も特別手配してくれたから、早くのれるだろう。

九月三日、桑原、加藤、ワジー大尉の三人が第一便で飛び、翌日六人、最後の四人も五日にはワルペンディに安着した。

ワルペンディは、各方面のあいさつ廻り。しかし、祭日があったり、日曜がはさまったり、五日かかる。この国ではすべてセツカチになってはいけないのだ。

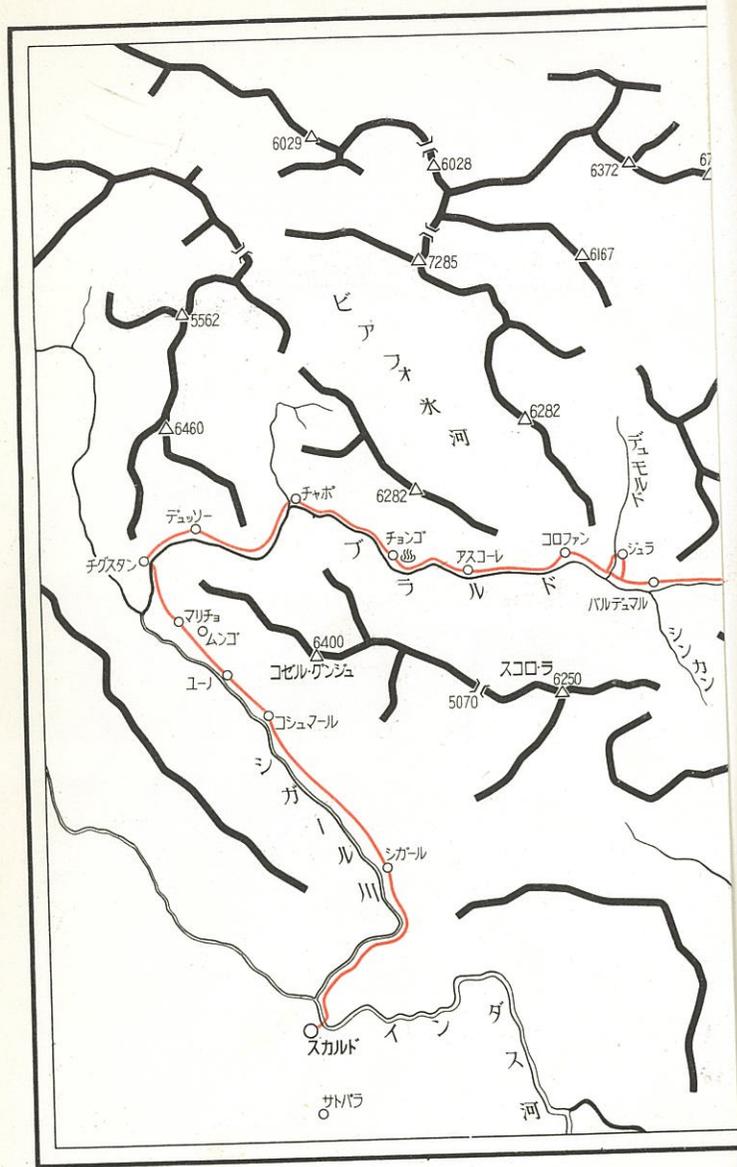
オースタリーのハラモシユ隊と交歓できたのはよかつた。彼らはぜひともチヨゴリザに仇討ちしたい、と勇んできたのだが、日本隊に先約され、ハラモシユに転進、見事それに登頂したのである。相互に成功を喜び合つた。ヘルマン・ブルの友人たちが多く、心から感謝された。(カラチへ出てからも、オースタリー公使から正式にあいさつを受けた。)

放送局へお礼に行くと、登頂成功についてインタヴュー形式で英語放送をやってくれという。すぐでは困る。質問条項をあらかじめきいておき、午後三時にやると答えた。今川が一時までには着くことがわかつていたからだ。彼ならすぐ書いてくれるだろう。のんきにひるねしていたら、一時になって、天候悪化で今日はこない、といってくる。三時といえば二時には迎えにくるのだ。あわ

ててポケット和英たよりに作文にかかる。この年になって、この炎暑の中で、英作文の試験とはつらい。やっと書き終つたところへ車がきた。汗を流して拙悪な発音でしゃべつた。

日本へ帰つてしばらくすると、西ネパールの山奥に探検に入っている川喜田二郎から、お祝いの手紙がきた。チャルカでふとスイッチをいれたら、聞き覚えのある声で英語がきこえる。耳をすますと私の放送。全隊員が歓声をあげ、万歳を絶叫したというのである。

つらいことは何でもやっておいた方がいいのだ。





チヨゴリザ登頂

Takeo

著者略歴

明治37年福井県に生まる。  
昭和3年京都大学仏文科卒。  
現在京都大学人文科学研究所・教授。  
著書に「歴史と文学」「この人々」など。  
訳書に「赤と黒」他多数あり。  
現住所  
京都市上京区塔ノ段敷ノ下町421

昭和三十四年三月二十日 発行

定価二七〇円

著者	桑原武夫
発行者	車谷弘
印刷者	長久保慶一
発行所	文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四  
振替口座東京七八七四三番

印刷 大日本印刷  
製本 矢嶋

万一落丁乱丁の際は  
お買求の書店  
又は発行所にて  
お取換え致します

この人々 桑原武夫

西堀第一次南極越冬隊長、貝塚茂樹氏、森外三郎先生などを語り、東西にわたる博識と清新な感覚が、おのづからにしみ出た名随想です。 二七〇円

たつた一人の山 浦松 佐美太郎

東西古今を通じて山の本といえは本書が最大の傑作である。著者の若い頃、アルプスに傾けた情熱と、山に誘う名文をもつて永遠に輝やく名著です。 二七〇円

エヴェレスト

—その人間的記録—

W・ノ イ ス  
浦松佐美太郎訳

限りない熱情と努力と冷静な科学精神が遂に人類百年の夢を破つたのです。世界の絶点にいでむ人間の生活感情を克明に記録した山岳文学の傑作。 三九〇円

山に憑かれた男

加藤喜一郎

何故苦しい想いをしてまで山に登るか？ 誰もうまく答えられぬ問いに、マナスル登頂に初成功した、生まれながらの山男が明快に解答します。 二六〇円

苦悶するデモクラシー

美濃部亮吉

天皇機関説、森戸事件など日本の学界、思想界を興つた弾圧の嵐、それに抗して民主主義思想は如何に成長したか。文藝春秋読者賞受賞の感動の書。 二〇〇円

日本の人物鉅脈 大宅 壮一

その土地の風土や歴史が、人物にいかにか大きな影響をあたえるかを、各県ごとに丹念に調べあるいた著者は、いかなる結論に達したか。 二七〇円

文 藝 春 秋 新 社

